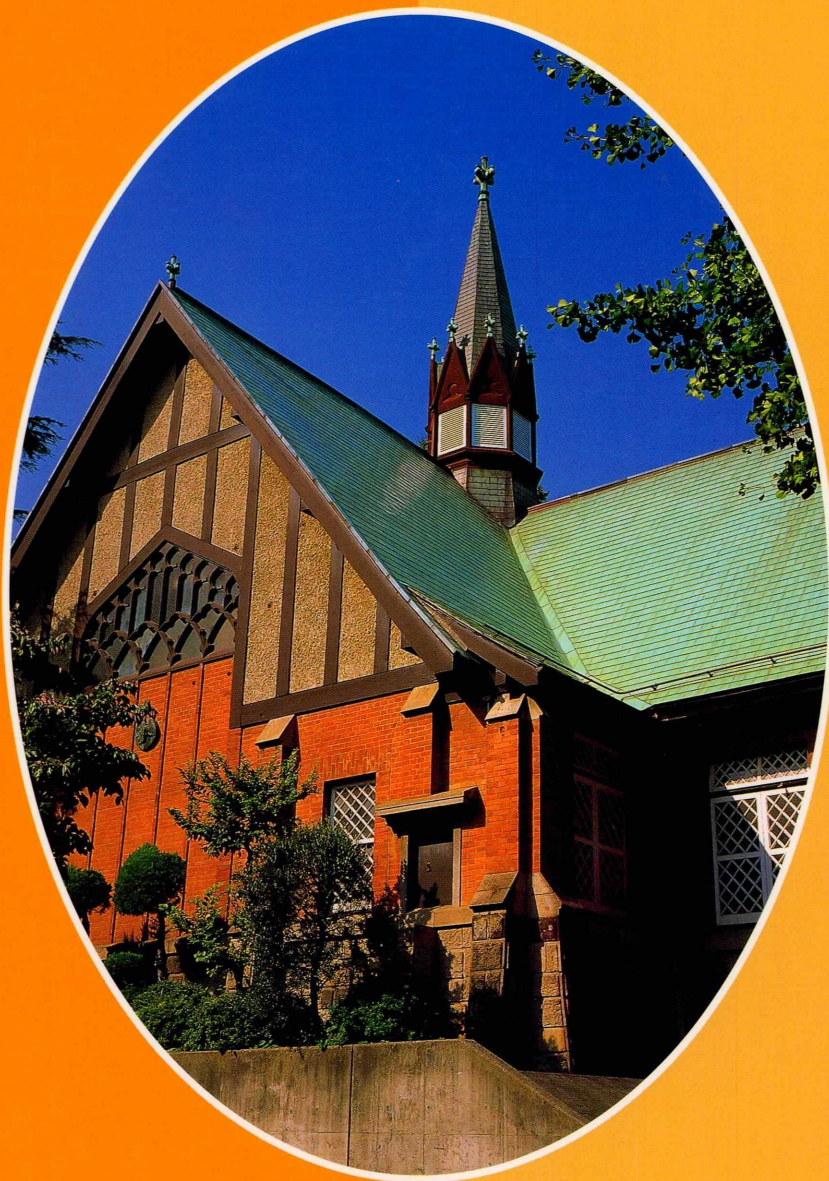


# 真理と自由を求めて

—明治学院 120年の歩み—

*Seeking Truth and Freedom:  
Reflections on Meiji Gakuin's 120-Year History*



学校法人 明治学院

# 真理と自由を求めて

—明治学院120年の歩み—

Seeking Truth and Freedom: Reflections on Meiji Gakuin's 120-Year History



# Seeking Truth and Freedom:

Reflections on Meiji Gakuin's 120-Year History

## 刊行にあたって



明治学院創立 120 周年を記念し、歴史写真集『真理と自由を求めて』を刊行できることは、私どもの大きな喜びである。

「戦無派」という言葉が聞かれるようになってからさらにかなり時が経ったが、最近は本当に「無歴史」「無思想」の風潮が強まっているように思われる。「情報」も「国際性」もふんだんにあるのだが、肝心のそれらの「主体」たるべき「個人」は、おろそかなほど空虚ではなからうか。

こうした時代にあって、明治学院に学び、働き、関与する者は、この伝統ある歴史の中にもう一度沈潜し、自己の思想をその中から再構築すべきではなからうか。それこそが「21世紀の明治学院」を新たに生み出していく大きな力となるに相違ない。

本書は写真を中心とし、歴史を視覚から訴えることを試みた。視覚から言葉へ、言葉から精神へ、と探求は深まるであろう。

こうして生きた歴史に深く沈潜したのちに、はじめて私どもは「後のものを忘れ、前のものに向かって」（ピリピ人への手紙 3 章 13 節）飛躍していけるのではなからうか。

1997年10月

学院長 中山 弘正

### *A Message from the Chancellor*

*It is our great pleasure to present this collection of memorial photos entitled "Seeking Truth and Freedom," in order to commemorate the 120th anniversary of the founding of Meiji Gakuin.*

*In view of society's tendency towards uncritical and ahistorical thinking in the post-war generation, each one of us tends to be overwhelmed by too much information and internationalism.*

*All the faculty, staff, students, and graduates of Meiji Gakuin join with me in this effort to review and assess our past, while formulating a vital and engaging vision for the future.*

*By inspecting a number of memorial photos, we hope that our cherished history and traditions will come alive through our own sensitivity so that our inquiring mind can deepen from sensitivity to words, and words to spirit.*

*These reflections are not merely a nostalgic journey to the past but represent an attempt to critically appropriate the traditions and ideals of our early history. The courage and determination of our predecessors over the past century should inspire us to face the challenges of our rapidly changing world.*

*As we prepare to enter the 21st century, we recall the words of one New Testament author who encouraged, "forgetting what lies behind and straining forward to what lies ahead..."  
(Philippians 3:13, New Revised Standard Version of the Bible)*

*Hiromasa Nakayama*

*Chancellor*

*October, 1997*

# CONTENTS

## 真理と自由を求めて—明治学院120年の歩み—

<b>I 現況と展望</b> ——輝かしい未来に向けて .... 1	
1978(昭和53)~1997(平成9)年	
1. 大学——未来あふれる大学キャンパス..... 2	
(1) 白金キャンパス..... 2	
(2) 横浜キャンパス..... 4	
(3) 第二部・白金祭..... 6	
(4) 戸塚グラウンドと体育祭..... 7	
(5) 国際交流..... 8	
(6) クリスマス・二つの出版物..... 9	
2. 中学・高校——新たな船出..... 10	
(1) 明治学院高等学校..... 10	
(2) 明治学院中学校・明治学院東村山高等学校 13	
(3) テネシー明治学院高等部..... 16	
3. 同窓会——ホームカミング(卒業生、母校に帰る日) .. 18	
<b>II 明治学院の建学</b> ——前史・草創期 ..... 19	
1859(安政6)~1906(明治39)年	
1. 明治学院の夜明け——横浜時代..... 20	
2. 近代日本とヘボン..... 25	
3. 明治学院の揺籃期——築地時代..... 27	
4. 白金の丘に根深く——明治学院の創立..... 29	
5. 明治学院のロマンティズム——文学と美術の開花... 33	
6. 立てよ、畏るるなかれ——文部省訓令12号問題と学院生の社会的関心 .. 35	
7. 井深梶之助と植村正久..... 36	
8. フルベッキと東山学院——もう一つの源流... 37	
9. ヘボン館に集まった若者たち——初期明治学院生群像 .. 38	

## III 明治学院の軌跡——苦難の道を ..... 39

1907(明治40)~1945(昭和20)年

1. 1907(明治40)年校歌制定..... 40	
2. 明治期の終焉..... 41	
3. 明治学院のシンボル・チャペル..... 42	
4. 賀川豊彦と社会運動..... 43	
5. 神学部の移転..... 44	
6. 苦難の道..... 45	
7. 東山学院合併と白金校地..... 47	
8. 昭和初期のころの通学風景..... 49	
9. 御真影奉戴式..... 50	
10. 戦時体制への協力..... 51	
11. 軍事教練と戦時体制..... 52	

## IV 目覚ましい発展 ..... 55

1945(昭和20)~1977(昭和52)年

1. 明治学院大学の開設..... 56	
2. 1950年代の学院生活..... 58	
3. 1960年代(安保から大学紛争時)..... 59	
4. 1970年代(増大する学生と創立100周年)..... 62	
5. 1960年代(白金時代)の中学校..... 64	
6. 明治学院高等学校..... 65	
7. 明治学院中学校・東村山高等学校..... 69	
8. 明治学院とライシャワー..... 73	
明治学院の年表..... 74	
英文ヒストリー..... 76	
明治学院発展系統図..... 78	

1978(昭和53)～1997(平成9)年

I

# 現況と展望——輝かしい未来に向けて

Meiji Gakuin Today and Tomorrow -Towards a Bright Future

明治学院は建学の祖・ヘボンたちが抱いたキリスト教精神、リベラリズムの伝統、国際人の育成という教育理念を受け継ぎ、明治、大正、昭和、平成という時代の変動を乗り越え、すでに約12万名の卒業生を世に送り、1997(平成9)年11月には、創立120周年を迎える。

学院は現在、大学、大学院(白金キャンパス、横浜キャンパス)、明治学院高校、明治学院中学校、明治学院東村山高校、アメリカのテネシー明治学院高等部を擁し、そのますますの充実と、戸塚総合グラウンドの完成、また国際交流も年を追うごとに盛んになり、そして白金、東村山キャンパスの再開発など、21世紀を担う国際的な一大総合学園としていまや大きく飛躍しようとしている。



年	明治学院事項及び一般事項
1978(昭和53)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学長金井信一郎が学院長代行となる</li> <li>・成田空港(新東京国際空港)開業</li> <li>・第2次オイルショック始まる</li> </ul>
1979(昭和54)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学部室棟が完成</li> <li>・東グラウンドに大学体育センターが完成</li> </ul>
1980(昭和55)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イラン・イラク戦争勃発</li> </ul>
1981(昭和56)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学長平出宣道が第9代学院長に就任</li> </ul>
1982(昭和57)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・横浜校舎新築工事の起工式挙行</li> </ul>
1983(昭和58)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東京ディズニーランド開園</li> </ul>
1985(昭和60)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・横浜校舎開校</li> <li>・男女雇用機会均等法成立</li> </ul>
1986(昭和61)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際学部国際学科設置</li> <li>・バブル景気始まる</li> </ul>
1987(昭和62)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・創立110周年記念式典を行う</li> <li>・明治学院110年史「明治学院の現況」出版</li> <li>・国鉄が民営化される</li> </ul>
1988(昭和63)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治学院高校山中寮新設</li> </ul>
1989(平成1)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テネシー明治学院高等部開校(男女共学)</li> <li>・「ドキュメント 明治学院大学1989 学問の自由と天皇制」出版される</li> <li>・消費税スタート</li> <li>・ベルリンの壁崩壊</li> </ul>
1990(平成2)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文学部に芸術学科、心理学科、法学部に政治学科設置、大学院国際学研究科国際学専攻修士課程を設置</li> <li>・湾岸戦争始まる</li> <li>・エドウィン・O・ライシャワー死去</li> </ul>
1991(平成3)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明治学院高校新校舎完成</li> <li>・東村山中高体育館、特別教室棟完成</li> <li>・中学、両高校男女共学開始</li> <li>・ソ連邦消滅し、CIS誕生</li> </ul>
1993(平成5)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学新本館(第1期)完成</li> <li>・非自民の細川内閣発足、55年体制に幕を下ろす</li> </ul>
1994(平成6)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学院文学研究科心理学専攻修士課程設置、中山弘正が第10代学院長に就任</li> </ul>
1995(平成7)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・横浜校舎開校10周年を祝った</li> <li>・「心に刻む、敗戦50年・明治学院の自己検証」出版される</li> <li>・阪神・淡路大震災起こる</li> </ul>
1996(平成8)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・経済学部商学科、同二部商学科を経営学科に名称変更</li> <li>・戸塚グラウンド完成</li> </ul>
1997(平成9)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・創立120周年</li> </ul>

(太字は当学院関係)

# 1 大学——未来あふれる大学キャンパス

University-Campus life full of hope

## (1) 白金キャンパス

*Shirokane Campus*

都心にありながら、勉学にふさわしい落ち着いた雰囲気をかもしだし、OLD & NEWが調和する白金キャンパス。ここにはアカデミックな時間と、希望と感動にあふれた青春いっぱいのキャンパスライフが繰り広げられている。



キャンパス内の学生たち *Students on the Campus*

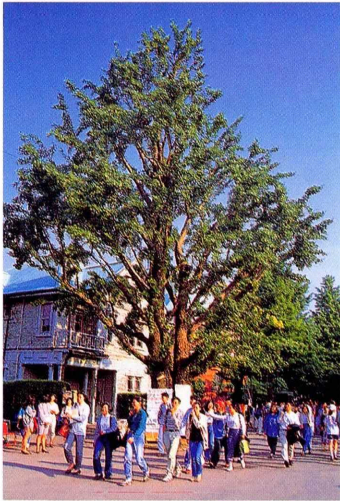
大学は現在、文学部（英文学科、フランス文学科、芸術学科、心理学科）、経済学部（経済学科、経営学科）、社会学部（社会学科、社会福祉学科）、法学部（法律学科、政治学科）、国際学部（国際学科）と第二部（英文学科、経済学科、経営学科、社会学科、法律学科）そして大学院を有し、学生数14,000名を数える総合大学となった。

さらに輝かしい未来に向け、1997年度からさまざまな教学改革が計画され、21世紀には新たな夜明けを迎えようとしている。



白金キャンパス全風景 *A Bird's-eye view of Shirokane Campus*

# Shirokane Campus



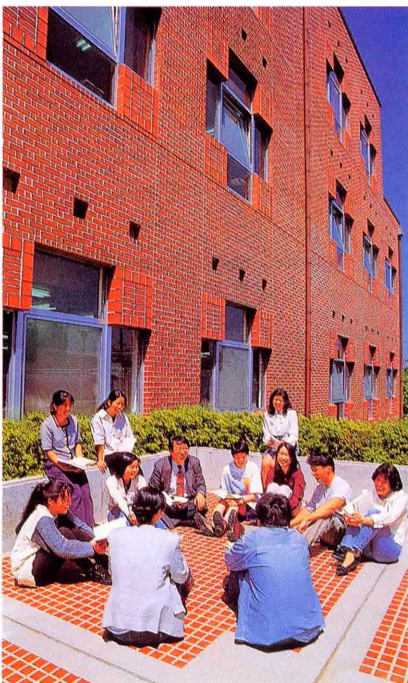
登校風景 (インブリー館前) Students attending school (in front of Imbrie Hall)



## 白金キャンパスマップ



キャンパス内の学生たち Students on the Campus



教授と語る学生たち Students talking with their professor



大学本館 University Main Building



## (2) 横浜キャンパス

### *Yokohama Campus*

学院の総力を結集し、また将来への祈りをこめへボン塾発祥の地・横浜に校地面積201,531㎡におよぶ緑にかこまれ、白亜の建物が並ぶ新キャンパスが1985(昭和60)年に開校した。

ここでは1、2年生が学び、3、4年生は白金キャンパスと、大学は二つのキャンパスに分かれた。

1986年には国際学部が新設され、この学部の学生は4年間横浜キャンパスで過ごす。



チャペル Chapel



福利厚生棟 Social Welfare Program Building



7号館前の学生たち Students in front of Building No.7



横浜キャンパス全風景 Aerial view of Yokohama Campus



談笑する学生たち Chatting students



遠望橋を渡る学生たち  
Students crossing "Enbobashi"

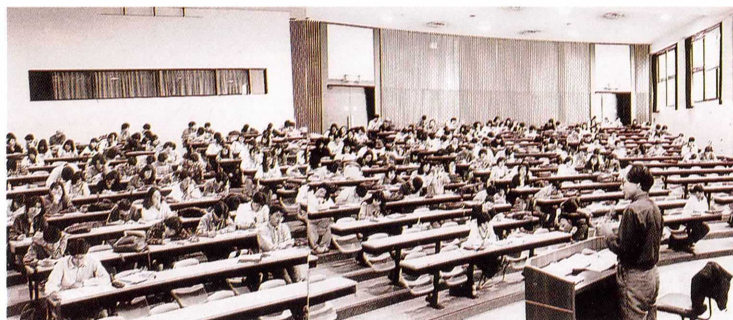
## 横浜キャンパス マップ



## Yokohama Campus



図書館内の学生たち Students in the Library



教室内の学生 Students in a Lecture Hall



横浜開校10周年記念講演で講演する作家大江健三郎  
Mr. Kenzaburo Oe (Novel Prize writer)

横浜開校10周年記念行事として、講演会、学部横断シンポジウム(「責任のとりかた——敗戦50年、それぞれの自己検証」)、卒業生・出身者によるシンポジウム(「いまのわたしと学生時代——明学にいたころ」)、ゼミナール共同研究発表会、市民スポーツ交歓会、学生企画のさまざまなイベント、その他盛り沢山の行事が行われた。

### (3) 第二部・白金祭

*The Evening Division · Shirokane Festival*

#### ①第二部（夜間）

向学心に燃えるすべての人びとのために勉学の機会は平等に開かれていなければならず、この理念に基づき、本学では1935(昭和10)年以来、第二部を設置して社会に大きく貢献してきた。

現在、学生たちも多様化し、そのライフスタイルと生涯学習への意欲の高まりに応え、社会人入学への道も開かれ、長い伝統のもと、熱気あふれる授業が展開されている。

第二部は現在、英文学科、経済学科、経営学科、法律学科があり、修業年限、カリキュラム、講義内

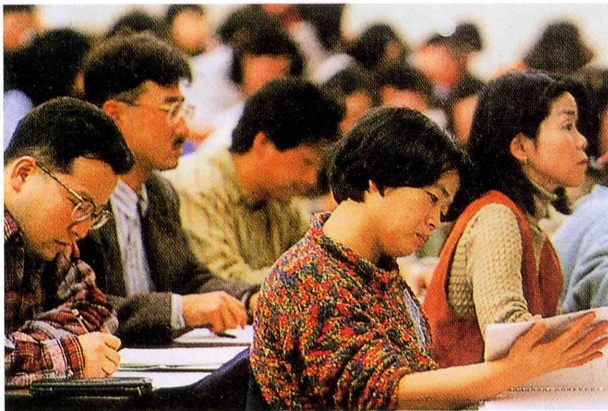


キャンパスいっぱいの学生たち *Shirokane Campus full of students*

容もほぼ第一部と同じである。

#### ②学生の祭典——白金祭

創立記念日をはさんで行われる白金祭は全キャンパスあげての祭典、この期間はキャンパスいっぱいに青春のエネルギーが満ちあふれる。



熱心に学ぶ学生たち *Earnest students*



すっかり名物になったネブタを中心に繰り広げられる後夜祭  
*Popular "Nebuta" symbolizing the evening after the festival*



白金キャンパス夜の風景  
*Night view*

黎明館外観

"Reimeikan"'s outward appearance



#### (4) 戸塚グラウンドと体育祭

Totsuka Sports Field and Sports Festival

1996(平成8)年に白金キャンパスの1.5倍(4.8ヘクタール)の広さを誇る戸塚グラウンドが完成。県下でも有数の規模と充実した設備をもつ。センター121m、両翼98mの広さをもつ本格的な野球場が1面、テニスコートは全天候型が4面、クレーコートが4面の計8面、サッカーやラグビー用に使える多目的グラウンドが1面あり、またクラブハウスの「黎明館」内には70畳大のトレーニングルームとレストラン風の食堂、そして宿泊施設も整っている。



多目的グラウンド Multipurpose Field



黎明館トレーニングルーム

"Reimeikan"'s Training Room



戸塚グラウンド全景 Aerial view of Totsuka Sports Field



野球 Baseball



アメリカン・フットボール American Football



グラウンドの見取図 Sports Field Sketch



体育祭(横浜校舎グラウンド) Sports Festival

## (5) 国際交流 *International education and exchange*

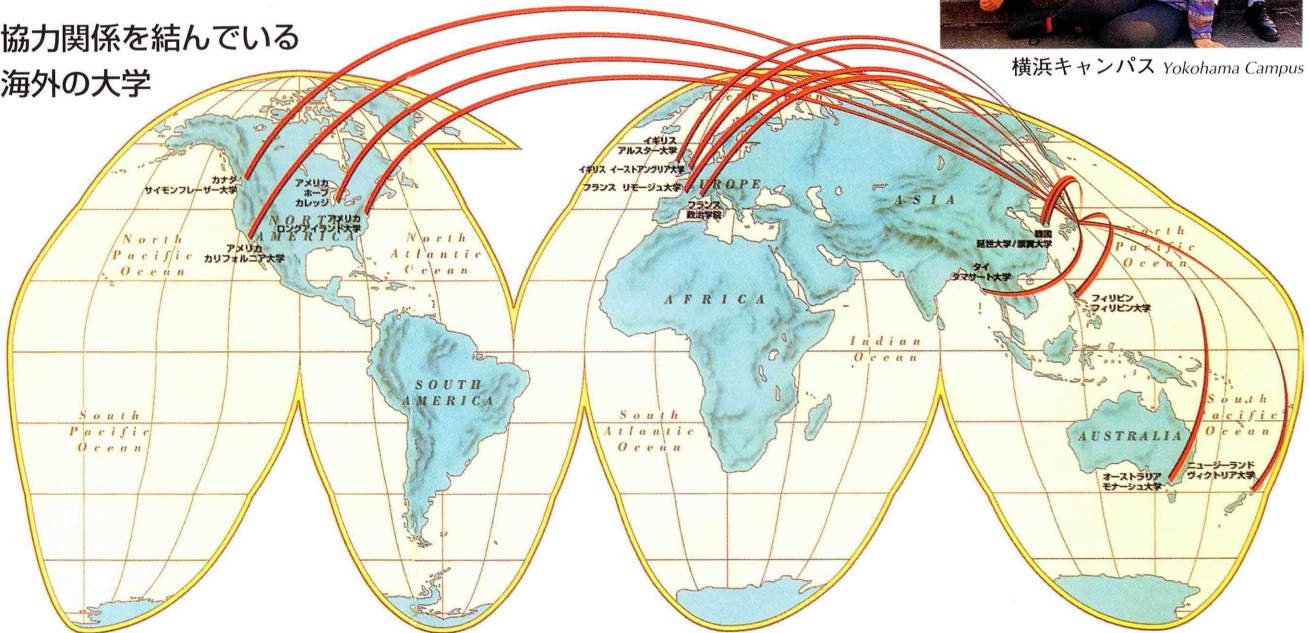
### 世界に広がる国際交流

国際社会で活躍できる真の国際人の育成をめざして、明治学院大学では海外の大学との協力関係を重要視し、実際に海外で勉学に励んでもらえるよう以下の大学と協定を結び、また交換留学などにより学生の交流を図っている。

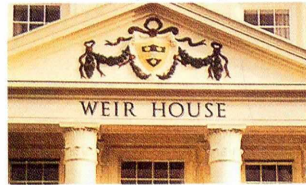


横浜キャンパス Yokohama Campus

### 協力関係を結んでいる 海外の大学



ヴィクトリア大学  
Victoria University of Wellington



ホープカレッジ  
Hope College



カリフォルニア大学  
University of California



### ●協定校派遣実績

( ) 内は出願者

	1992~93	1993~94	1994~95	1995~96	1996~97
ホープカレッジ(アメリカ)	1	1	1	1	1
カリフォルニア大学(アメリカ)	9	15	15	10	10
ロングアイランド大学(アメリカ)	1	5	3	5	1
リモージュ大学(フランス)		1	3	6	7
政治学院(フランス)			3	1	
アルスター大学(イギリス)					3
サイモン・フレイザー大学(カナダ)			2	2	2
モナーシュ大学(オーストラリア)					2
ヴィクトリア大学(ニュージーランド)				1	2
延世大学(韓国)					1
	11(14)	22(24)	27(34)	26(43)	29(59)



白金キャンパス Shirokane Campus

### ●短期留学派遣実績

( ) 内は出願者

	1992	1993	1994	1995	1996
ホープカレッジ(アメリカ)	15	15	15	15	
イーストアングリア大学(イギリス)				33	
スンシル大学校(韓国)				16	
	15(26)	15(24)	15(26)	64(96)	

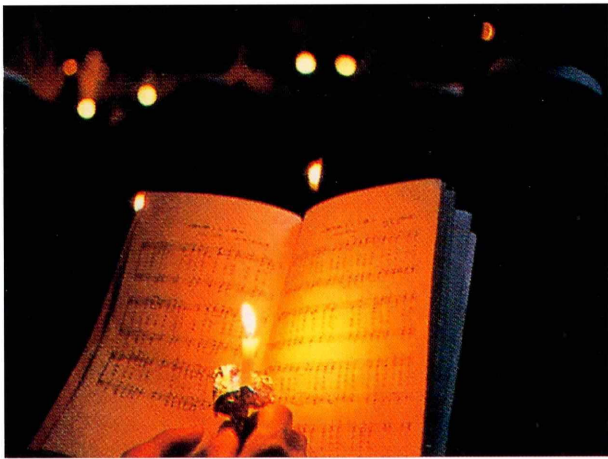
### ●本学在学中の正規留学生出身国(1996年度)

	男子	女子	計
韓国	12	12	24
中国	9	14	23
台湾	2	14	16

## (6) クリスマス

Christmas worship service

大学のクリスマス

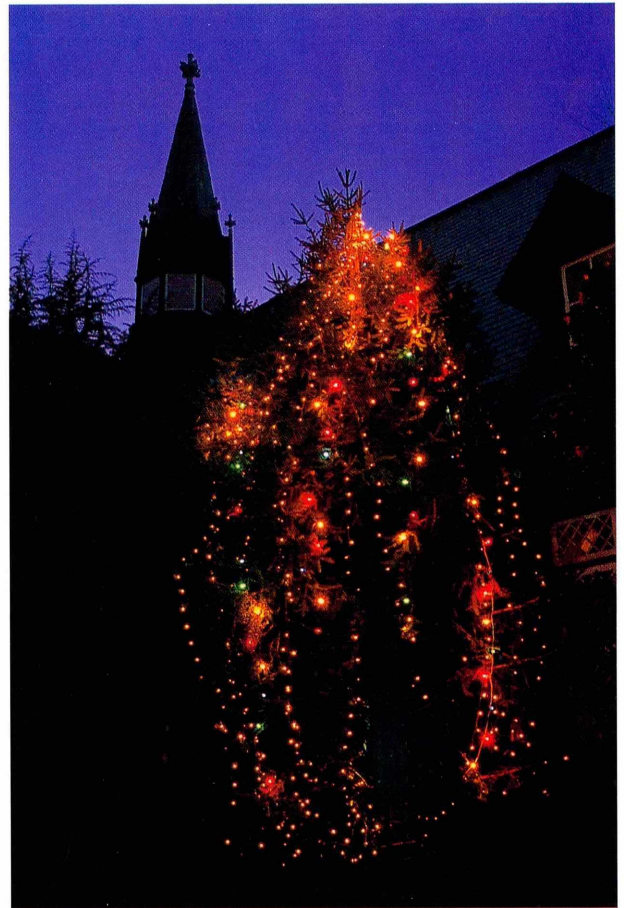


横浜キャンパス パイプオルガン

Yokohama Campus Pipe organ

「クリスマス音楽礼拝」は、グリークラブ、ハンドベル、管弦楽団、グレゴリーバンドOBたちが出演し、チャペルを澄んだ調べで満たした

横浜キャンパスでは、毎年、大学の近隣の方々をお招きして「市民クリスマス」を行っている  
Christmas at Yokohama Campus with neighbors



白金キャンパス Shirokane Campus

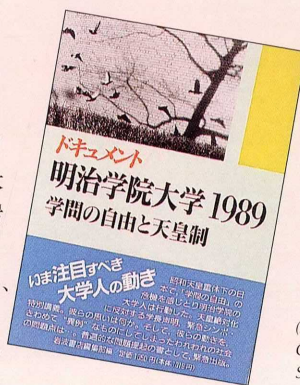


大空に届く歌声がみんなの心をつなぐ  
Angelic voice of choir

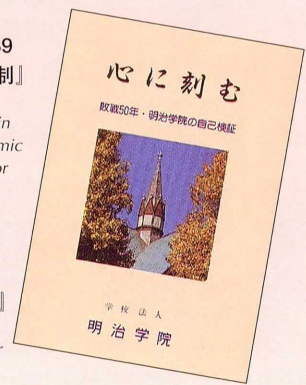
### 二つの出版物 Two publications 社会が明治学院の精神の自由とその進歩性を新しく見直した二つの出版物。

「天皇の病気」「自粛」「大喪の礼」という日本を包んだ異様な雰囲気の中で、明治学院大学が学問と精神の自由を貫き歩んだ軌跡が岩波書店から緊急出版された。

1995年は敗戦50周年を迎えた。われわれは、改めて戦争で犯した多くの過ちを心に刻み、過去の反省のうえに未来を築かなければならないと表明し自己検証を試みた。



『ドキュメント  
明治学院大学 1989  
学問の自由と天皇制』  
Two publications  
(Document - Meiji Gakuin  
University 1989 - Academic  
Freedom and the Emperor  
system of Japan)



『心に刻む』  
(A self-inspection of Meiji  
Gakuin's responsibility for  
Second World war)

# 2

## 中学・高校——新たな船出

Senior High School and Junior High School—New beginnings with a coeducational system

### (1) 明治学院高等学校

Meiji Gakuin High School

#### ①旧高等学校校舎

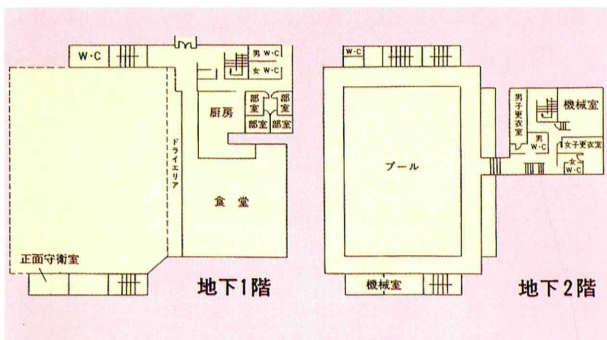
1925(大正14)年落成の井深ホールは新制高等学校校舎として使用されていたが、1978(昭和53)年新建築のため、取り壊された。



旧高等学校校舎 The former High School Building



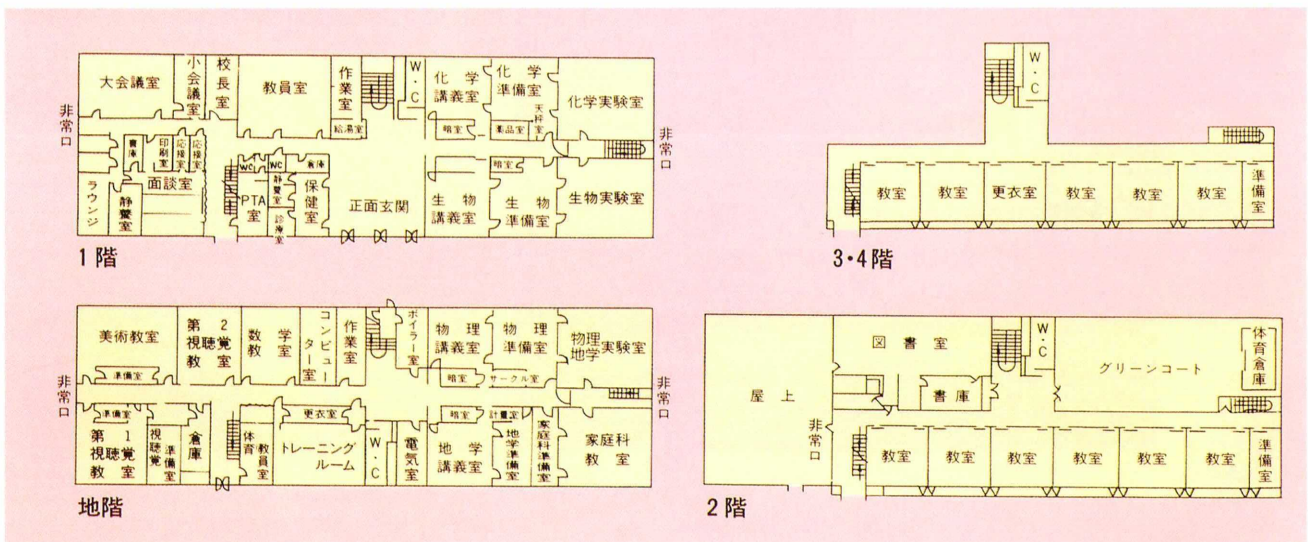
1990年体育館前に高等学校新本館が建築された  
The new High School Building



新本館の見取図 The new Main Building Sketch



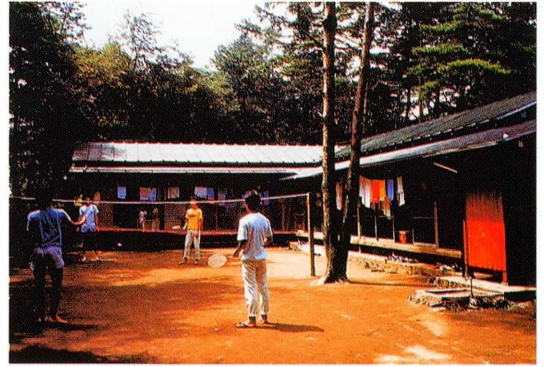
体育館 Gymnasium  
限られた敷地内で最大限の体育施設を、との目標で1980年完成した。1階は25m、8コースの温水プール 2階は合わせて300畳の柔剣道場 3階はメイン球技場



高校校舎内部の見取図 High School Building Interior Sketch

②明治学院高等学校山中寮 High School Lodge at Lake Yamanaka

1988年山中寮はそれまでの木造から鉄筋コンクリートの建物  
 に建て替えられ、50名収容の宿泊棟、食堂、ホール、集会室な  
 どが整えられた。



建て替え前の山中寮 The former Yamanaka Lodge

山中寮 Yamanaka Lodge



多目的ホール Multipurpose Hall  
 礼拝、屋内スポーツやレクリエーションなどもここで行われる



食堂 厨房で食事は自炊する Students cook for themselves  
 数人の班で50名分の3食の食事作りを行っている



温水プールで行われる水泳大会 Swimming Meet  
 クラスごと得点を競う。温水プールは4~11月まで、体育の授業で使用されている



文化展での展示風景 (ホームステイ参加者の発表展示)  
 Cultural Exhibition



### ③男女共学 Coeducational system

1980年頃より、明治学院高等学校の将来について教職員の研修会が何度も開かれ、その議論のなかから、明治学院高等学校の教育は男子に限る必要はないとの結論を得、1991(平成3)年より男女共学を実施することとなった。



教室内の風景 Students during a class



女子生徒たちの下校風景 Female students leaving school



クラブ活動 Extracurricular activities



全国に先立って1991年度から、家庭科を必修にした  
Home cooking practice



大井競技場で行われる体育祭 Sports Festival  
リレーなど男女混合で行われる競技もある

## (2) 明治学院中学校・明治学院東村山高等学校

*Meiji Gakuin Junior High School*

*Meiji Gakuin Higashi Murayama High School*

### ①男女共学への道のり

東村山で1991(平成3)年に男女共学が始まるについては、長い論議の道のりがあった。

最初は、中学移転の前年(1965年)、次に中高とも志願者が急減した年(1969年)、そして学院百周年のころから1980年代初め、ようやく実現の展望をもって準備したのが1980年半ばより開始までで、この地域における数少ないキリスト教主義男女共学校として、中高とも多数の志願者に恵まれ産声をあげた。



男子校時代の体育祭 *Sports Festival in boys' school*



男子校時代の文化祭 *Cultural Festival in boys' school*



1991年共学開始直後の高校礼拝 *High School worship service just after start of coeducational system (1991)*



共学開始とともに女子だけのクラブも誕生した  
*Girls' volleyball team appeared since 1991*



入学式におけるハンドベル演奏  
*Handbell performance at the entrance ceremony*

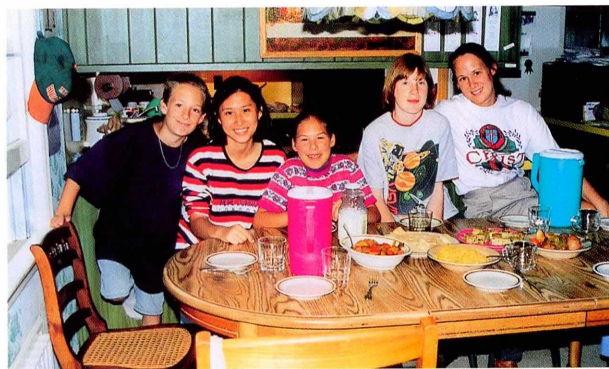
## ②中・高の国際交流

### *International education and exchange in Junior and Senior High School*

1972年に第1回のホームステイ・イン・アメリカが行われたが、その発案は当時本校に赴任されていたR.G. コーバー宣教師による。米国改革派教会との橋渡しなど功績は大きかった。

1973年からは隔年でグリークラブによる北米演奏旅行、1975年以降、米国留学開始、1978年からは諸外国からの留学生受け入れも行っている。

1995年より中学3年生を対象にサマーキャンプ・イン・テネシー（テネシー明治学院高等部での英語研修）が開始された。



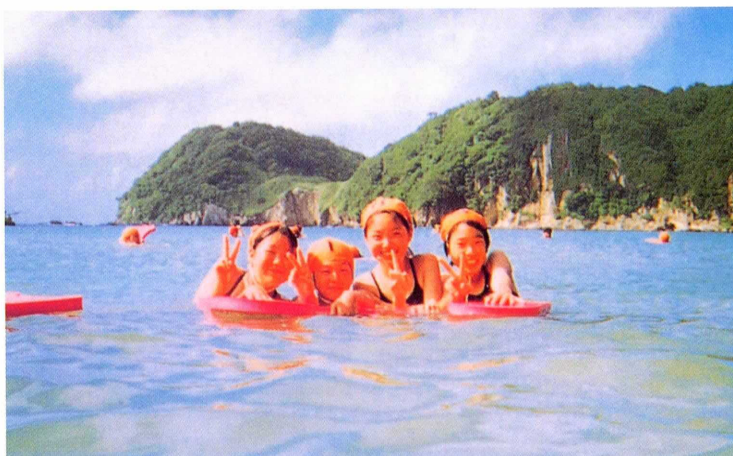
ホームステイ受入家庭の家族の方々と Homestay family members



テネシー明治学院高等部にて Snapshot of Tennessee Meiji Gakuin



家庭科調理実習 Home cooking practice  
試食も男女一緒に



1966年から始まった臨海教室（現在は伊豆岩地で行われている）  
Seaside school since 1966



1977年から行われているワーク・キャンプ Work camp  
栃木アジア学院、北海道三愛牧場、島根東の原農場で生徒たちは酪農を中心に働く

③1997年東村山キャンパス

*Higashi Murayama Campus 1997*

新高校校舎、さらに増築されて完成する。



東村山新校舎。1977年度は中学生が使用

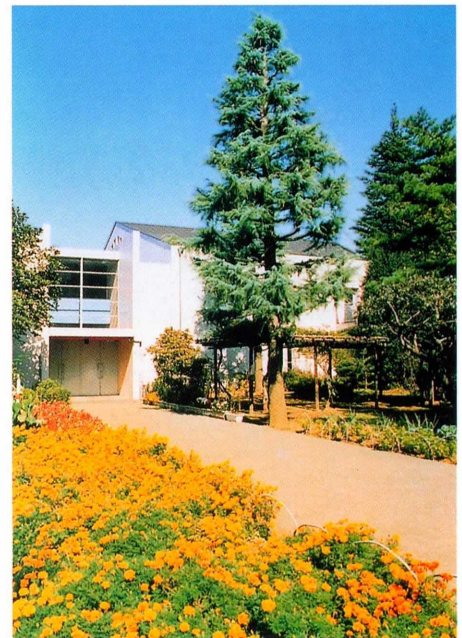
*Higashi Murayama new School Building*

1997年完成の道場 *Training Hall completed in 1997*



道場内で柔道の練習

*Judo practice in Dojo Interior*



四季の花々に彩られるチャペル

*Chapel full of flowers*

1991年に完成した体育館

*Gymnasium completed in 1991*



### (3) テネシー明治学院高等部

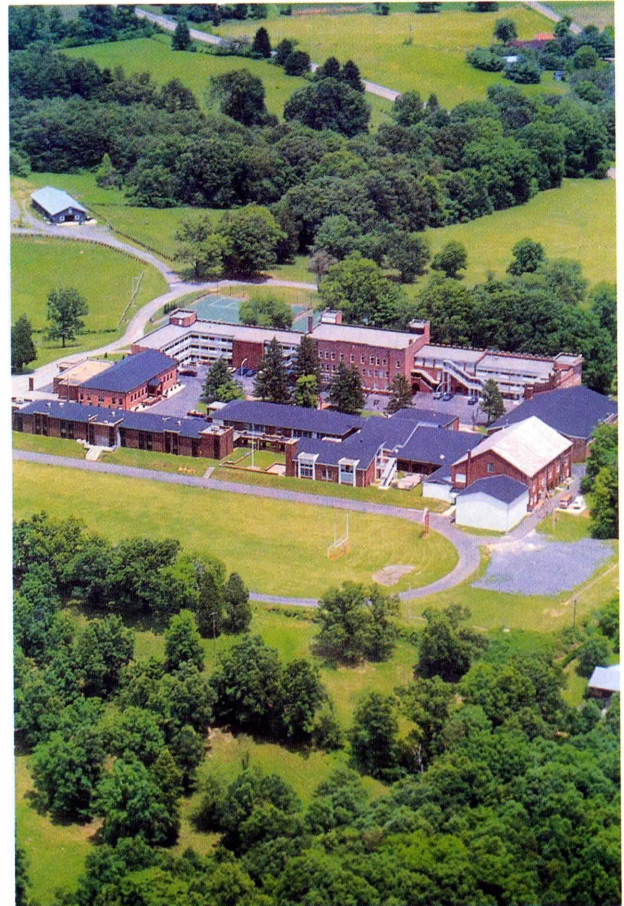
*Tennessee Meiji Gakuin High School*

米国テネシー州は、数多くの日本企業を受け入れ、きわめて親日的な土地柄。同州東部の起伏に富んだ地域にあるスウィートウォーター市が、テネシー明治学院高等部(TMG)の所在地である。

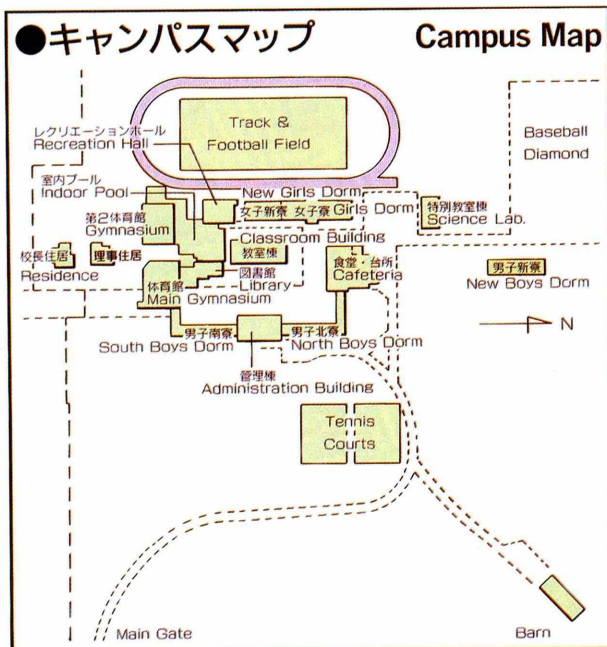
1989(平成1)年5月にTMGが開校したとき、日本の正規の高等学校が初めて米国に生まれた、と大きな話題となった。男女共学で全寮制、生徒の総定員207名の小規模校だが、クラシックな本館を中心とした広大なキャンパスは、絵のように美しく、また施設もよく整っている。

在外日本人家庭や国内から入学した生徒たちは、日米の大学への進学にもつながる、少人数クラスでの学習のほか、地域社会との交流などを通じて、国

内の高校では得られない貴重な体験に満ちたのびやかな青春時代を送っている。



全景 Aerial view of the School



キャンパスマップ Campus Map



北側からみた本館  
Main Building

〔生徒たちの学園生活〕

Student life



体育祭に若いエネルギーがほとばしる  
Students doing sports



広大な自然に抱かれたキャンパス  
Spacious Campus



教室での生徒たち  
Students during a class



二人部屋の女子寮で快適な生活  
Comfortable double room system in the Girls' Dormitory



地域の祭りで子供たちに折り紙を教える生徒  
A student teaching 'origami' to the neighboring children



学園祭には近隣の人びとが訪れて生徒たちと茶の湯などを楽しんでいる  
Neighbors enjoy the tea ceremony with students in School Festival

# 3

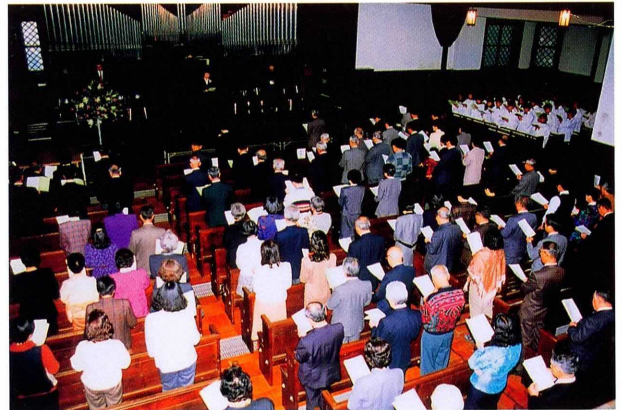
## 同窓会——ホームカミング(卒業生、母校に帰る日)

Reunion Festival and Homecoming celebration-Meiji Gakuin Alumni return to Campus

母校の創立記念日のころ「卒業生、母校へ帰る日」(ホームカミング)が毎年盛大に行われている。心静かに祈りを共にするチャペルアワーの後に、パーティー会場でなつかしい先生方を迎え、老若男女入り交じって、秋の夜のひとときを学生気分に戻る同窓会の大イベント。参加者がみんなで盛り上げる「同窓会の学園祭」。



パーティー会場でのなつかしい顔・顔・顔  
Nostalgic reunion after a long interval



ホームカミング礼拝 Homecoming worship service

### 母校に脱帽する

ユーモア作家  
明治三十八年 高等学部卒  
故 佐々木 邦

人は皆故郷を誇りとする。広く言えば、日本人は日本に生れたことを誇りとする。他のところを知らないからだろうが、知ることは愛すること、そこに愛国心が生れる。同じ道理から私は明治学院に学んだことを誇りとしている。世間に学校はたくさんあるけれど、私は一度として他の学校で学んだらよかつたろうと思ったことがない。

学校を卒業して社会へ出たものは、どういう地位にいても、その来た道筋を後に辿ると、母校の門に達する。明治学院を出たものは、明治学院を出ればこそ、各自今日がある。その今日が得意のもので、不如意のもので、いまさら仕方がない。もし他の学校を出ていたら、もっと出世をしているだろうなどと思うものがあれば、それは弱者である。共に語るに足りない。

こういう風に考えるから、私は常に明治学院の恩を感じている。十年ばかり前に、或晩、品川の奥の方へ講演に招かれて帰りに自動車ですって貰ったことがあった。品川から家への順路として車が明治学院の傍の電車道にさしかかった。雨が降っていて、夜もかなり更けていた。私は薄暗のなかに学校の建物を認めた時、何とも言えず懐しくなると、他に仕方がないから、帽子を脱いで頭を下げながら通り過ぎた。現在から卒業までの道筋を瞬間的に辿って、感謝の意を表したのだった。



挨拶する中山学院長 Greetings by Chancellor Hiromasa Nakayama



グレゴリーバンドO.B.の歌声 Chorus of Gregory Band graduates

1859(安政6)～1906(明治39)年

II

# 明治学院の建学 前史・草創期

The Foundation of Meiji Gakuin-The Early Days

まだ夜明け前の日本に、神の導きのみを信じて上陸した4名の宣教師とその家族は、愛と熱心をもってキリスト教を宣べ伝えた。彼らはまず日本語の習得と聖書の和訳に力を注ぎ、さらに若い魂の教育に心を砕いたのである。明治学院は実にこれら宣教師たちの祈りのうちに建てられた学校である。日本のキリスト教(プロテスタント)と浪漫主義芸術運動に明治学院が大きく貢献していることは周知の事実である。しかし、それだけではない。政治的にもはっきりと発言すべき時には発言してきた。そのために学校の存立が危ぶまれたこともあったが、神への礼拝を中心に、確信と勇気をもって乗り越えてきたのである。これこそが学院の伝統的精神といってよい。



ヘボン博士夫妻金婚式(1890年)

Dr. and Mrs. Hepburn on their silver wedding anniversary(1890)

年	明治学院事項及び一般事項
1859(安政 6)	・ヘボン、S.R. ブラウン、フルベッキら来日 ・安政の大獄
1860(万延 1)	・咸臨丸の渡米、桜田門外の変
1861(文久 1)	・水戸浪士、英仮公使館(東禅寺)襲撃、和宮江戸に下る
1862(文久 2)	・ヘボン横浜居留地39番に診療所・住宅を建てる ・坂下門外の変、生麦事件
1863(文久 3)	・長州藩、外国船を砲撃、薩英戦争
1864(文治 1)	・幕府長州征伐、英仏米艦隊下関砲撃
1865(慶応 1)	・英公使パークス着任、外国との条約を勅許
1866(慶応 2)	・将軍家茂死去、福沢諭吉「西洋事情」
1867(慶応 3)	・『和英語林集成』上海で印刷 ・徳川慶喜、大政奉還
1868(明治 1)	・戊辰戦争、五カ条の誓文、江戸開城
1869(明治 2)	・版籍奉還、東京遷都、築地に外国人居留地設置
1871(明治 4)	・廃藩置県、散髪・廃刀の自由を認める
1872(明治 5)	・学制の発布、新橋・横浜間に鉄道開通
1873(明治 6)	・徴兵令、征韓論おこる
1877(明治10)	・東京一致神学校設立 ・西南戦争、東京大学の設立
1880(明治13)	・ヘボン塾、東京築地に移転し築地大学校と改称 ・新約聖書翻訳出版記念会開催 ・集会条例、自由民権運動の激化
1883(明治16)	・東京一致英和学校設立
1886(明治19)	・東京一致神学校、英和学校合併し明治学院を創立することを決定。 ・白金玉縄台を校地と定める
1887(明治20)	・設置認可 ・サンダム館ヘボン館竣工し島崎藤村ら普通学部本科入学
1889(明治22)	・大日本帝国憲法公布
1890(明治23)	・第1回帝国議会、教育勅語の発布
1893(明治26)	・北村透谷、島崎藤村ら雑誌『文學界』創刊
1894(明治27)	・日清戦争(～1895)
1899(明治32)	・文部省訓令12号により宗教教育、儀式の禁止が通達され、明治学院は尋常中学資格返上を決議
1902(明治35)	・学院生鉱毒視察旅行 ・東山学院神学部合併
1904(明治37)	・日露戦争(～1905)

(太字は当学院関係)



# 1 明治学院の夜明け——横浜時代

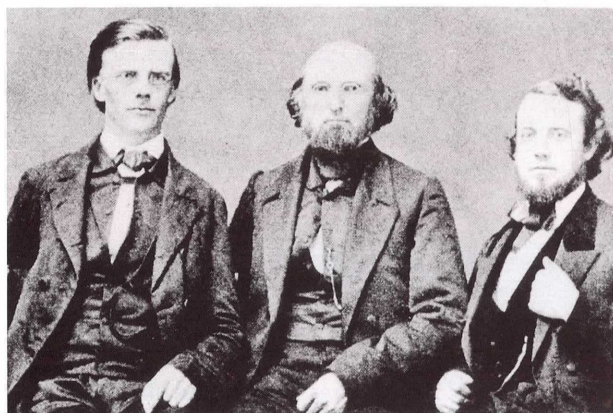
The dawn of Meiji Gakuin-The school in Yokohama

1859(安政6)年、アメリカの「長老教会」と「オランダ改革派教会」から4名の宣教師が来日した。ヘボン、ブラウン、シモンズそしてフルベッキである。彼らは幕末の神奈川、長崎に上陸、伝道活動を開始した。

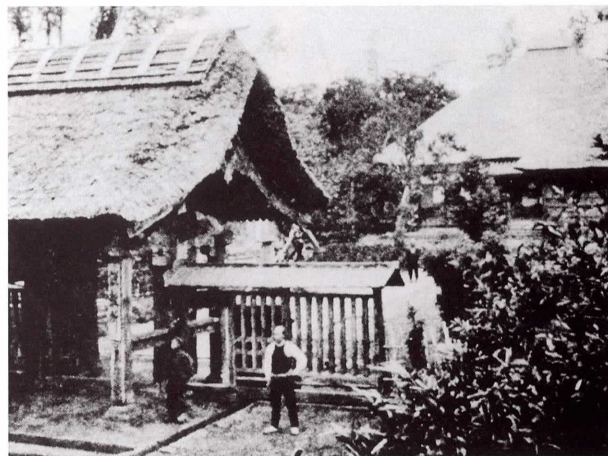
ヘボンは医者としてニューヨークで病院を開業していたが、宣教師として東洋に行き伝道の業につきたいという願いは聞かれ、日本に赴いたのである。上陸後、神奈川成仏寺を宿舎として医療伝道に従事し、夫人は教師としての経験をいかし、塾を開いた。これがヘボン塾で、後の明治学院の源流ともなり、フェリス女学院の基ともなった。ブラウンは牧師として聖書の日本語訳を第一の事業と考え、その最初の実が1872(明治5)年、10年間の歳月を経て出版されたヘボン・ブラウン訳『新約聖書』3巻である。一方彼は伝道者養成にも力を入れ、英学塾から出発したブラウン塾は神学塾へと変わっていった。シモンズもまた医師としてヘボンに協力した。長崎のフルベッキは幕府の英語伝習所などで教え、のち明治新政府の政治顧問として日本近代化に寄与するところ大であった。その後、明治学院教授として牧師養成に貢献した。



ヘボン(Hepburn,J.C.1815~1911) 明治学院初代総理(学院長)  
Meiji Gakuin's first president

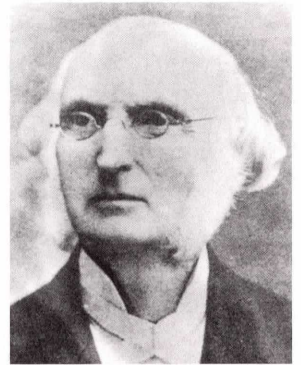


左、フルベッキ (Verbeck,G.H.F.1830~1898) (left)  
中、ブラウン (Brown, S.R. 1810~1880) (center)  
右、シモンズ (Simmons, D.B. 1834~1889) (right)



ヘボンら宣教師たちが最初に居を構えた神奈川成仏寺  
(現・横浜市神奈川区神奈川本町10番地)  
Jobutsu-ji (the residence for the earliest missionaries)

来日したヘボンたち宣教師に住居として提供されたのは仏教寺院である。開港後わずか4カ月、神奈川宿、成仏寺にヘボン、ブラウン、ゴープルそして新婚早々の若きバラ (James) 夫妻もそこに同居した。ゴープルは明治学院史に登場することは少ないが、ヘボンの協力者として聖書の翻訳に功績があったことで忘れるわけにはいかない。宣教師たちの成仏寺での生活は約3年間続き、ヘボンは1862(文久2)年、横浜の居留地39番に移転した。ヘボンは日本語の研究と施療に専念し、夫人はすでに成仏寺で自宅に英語塾を開設していたが、夫人の一時帰国中、ヘボンは幕府より委託生9名を預かり横浜に移転後も教育を続けた。



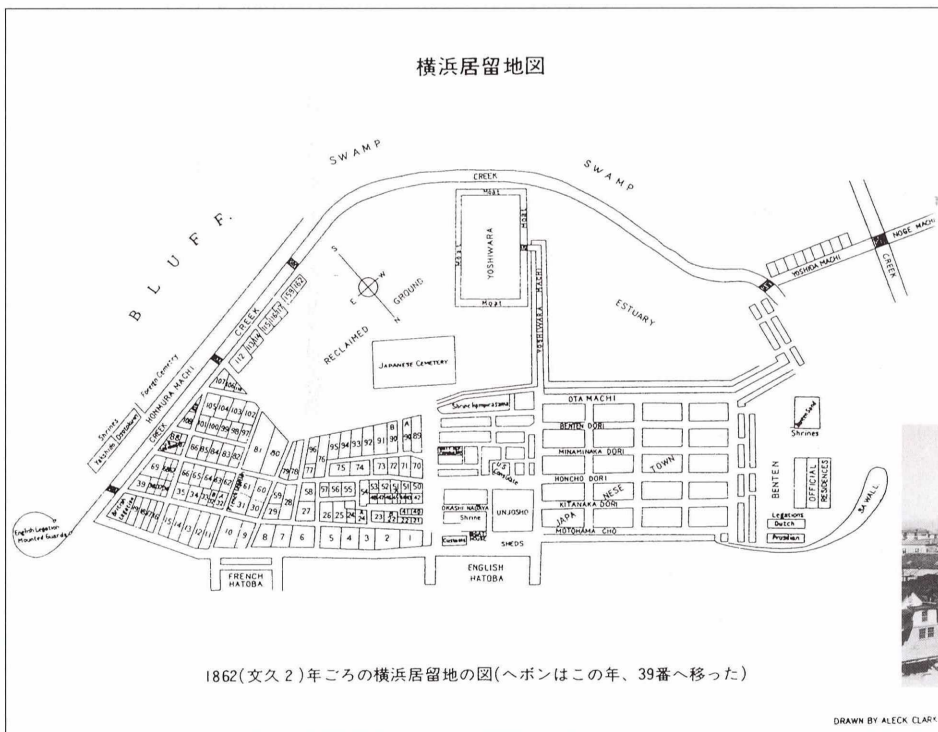
ブラウン夫妻  
Dr. and Mrs. Brown



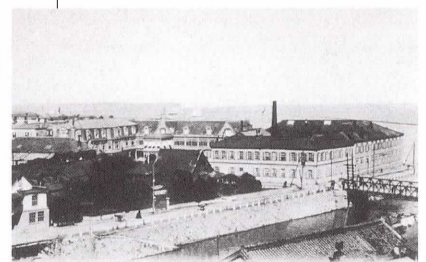
ゴープル(Goble,J.1828~1896)夫妻  
Mr. and Mrs. Goble



バラ(Ballagh,J.1832~1920)夫妻  
Mr. and Mrs. Ballagh



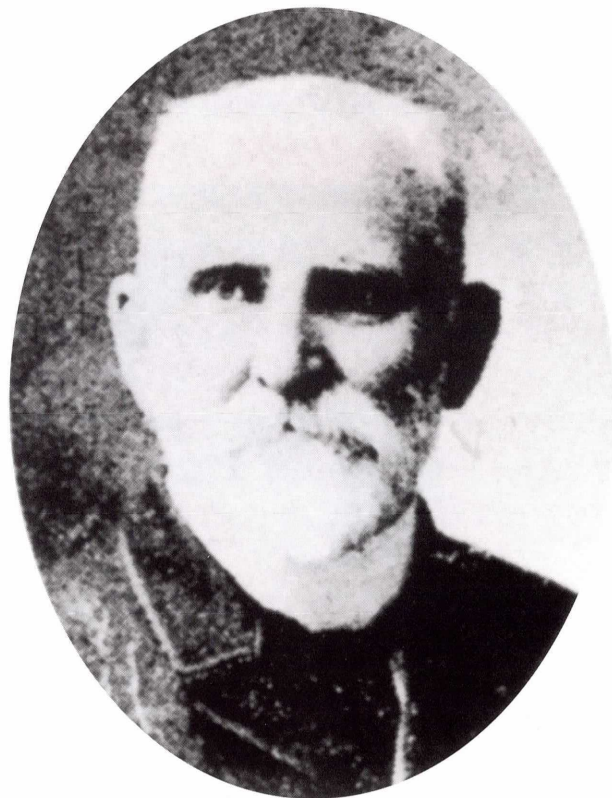
横浜居留地図 (1862年当時)  
Yokohama foreign settlement map



ヘボン邸(中央) Dr. Hepburn's residence

ヘボン塾は時代をリードする優秀な人材を輩出し日本の近代化に大きく貢献した。日本最初の医学博士となった三宅秀、幕府委託生の大村益次郎、林董(逋信相、外相)、三井物産創業の貢献者益田孝、高橋是清(蔵相)などの顔も見える。英語塾は夫人に任せ、ヘボンは横浜英学所(ヨコハマ・アカデミー)を開設し、英語のみならず数学、地理学、博物学を教授したが、そこからは安藤太郎、大鳥圭介、矢田部良吉、沼間守一、星亨らが出ている。ヘボン塾は、その後バラ (Ballagh, J.G. 1842~1920, Jamesバラの弟) に委託されバラ学校となり、1880年東京に移転し築地大学校となっていく。

ヘボン塾の女子部はキダー (Kidder, M.E. 1834~1920) に委ねられ、フェリス女学院の源流となっていった。



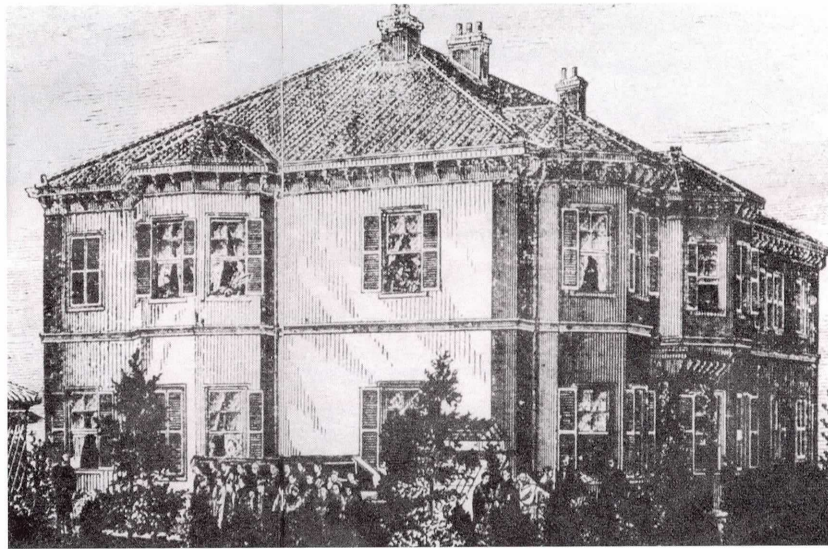
ヘボン塾後継者 John バラ

John Ballagh. Took over the Hepburn Academy and started "Ballah School".

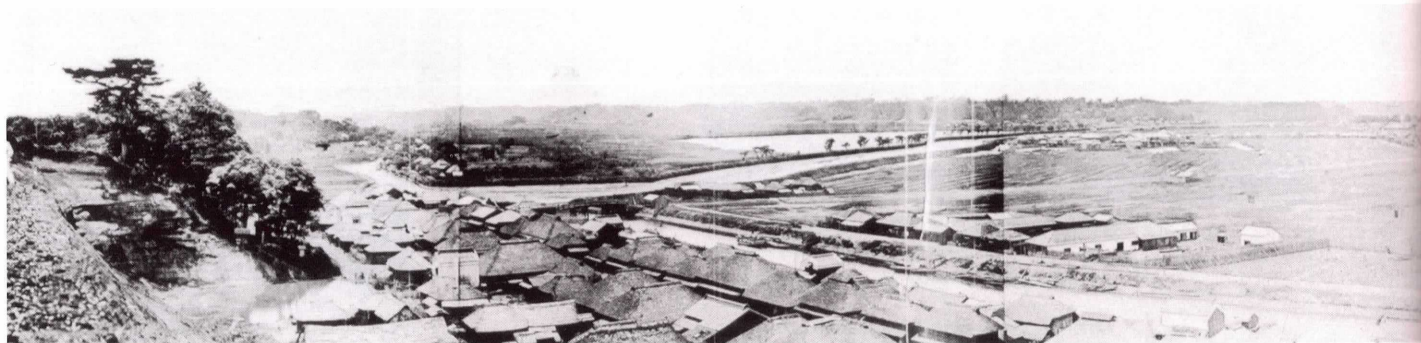


フェリス女学院 初代校長キダー

Mary E. Kidder, Ferris Seminary's first Principal

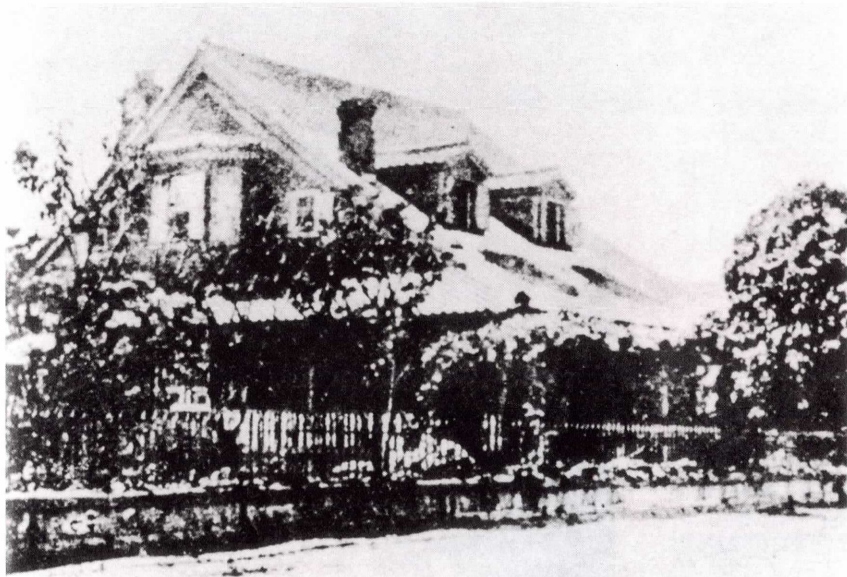


フェリス女学院最初の校舎 (1873年落成) Ferris Seminary's first School Building



上の写真はオランダ、ライデン大学所蔵の1862年当時の横浜居留地全景である。ヘボン邸が右端、河口付近に見える

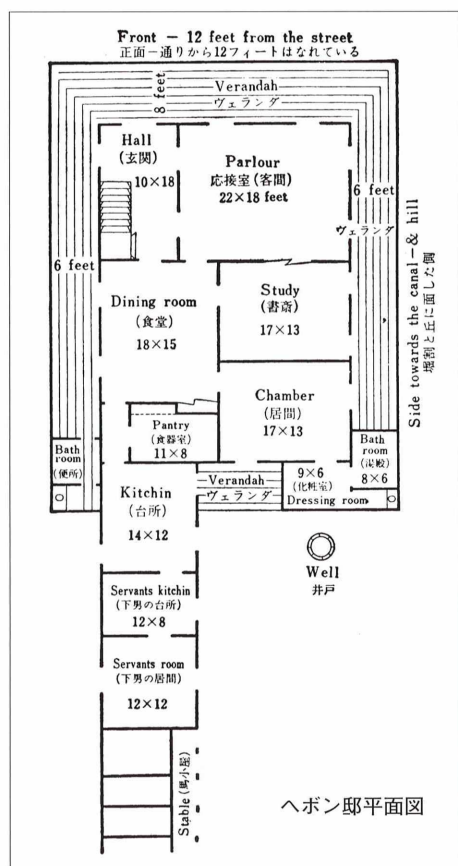
Overall view of Yokohama foreign settlement



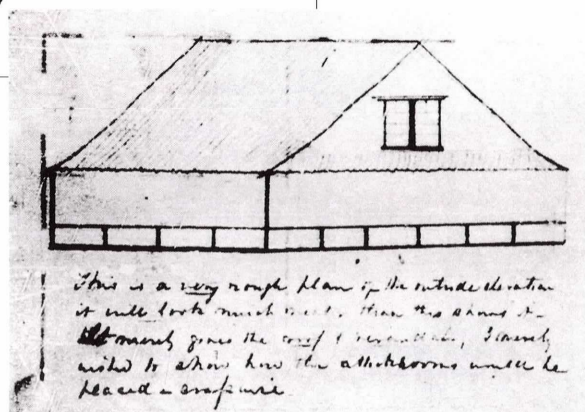
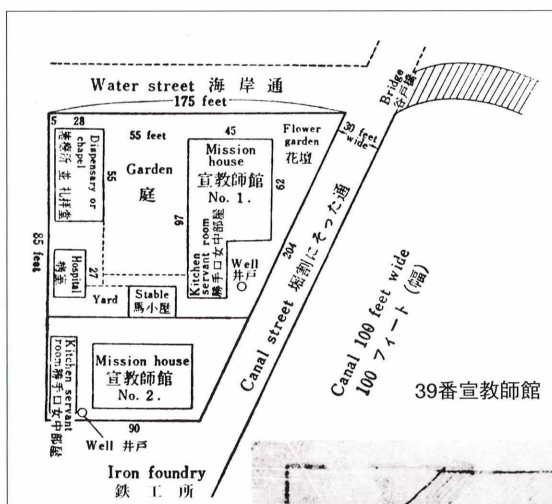
ヘボン塾 (ヘボン邸の一部) *The Hepburn Academy*



ヘボン夫人 *Mrs. Hepburn*



*Dr. Hepburn's residence ground plan*



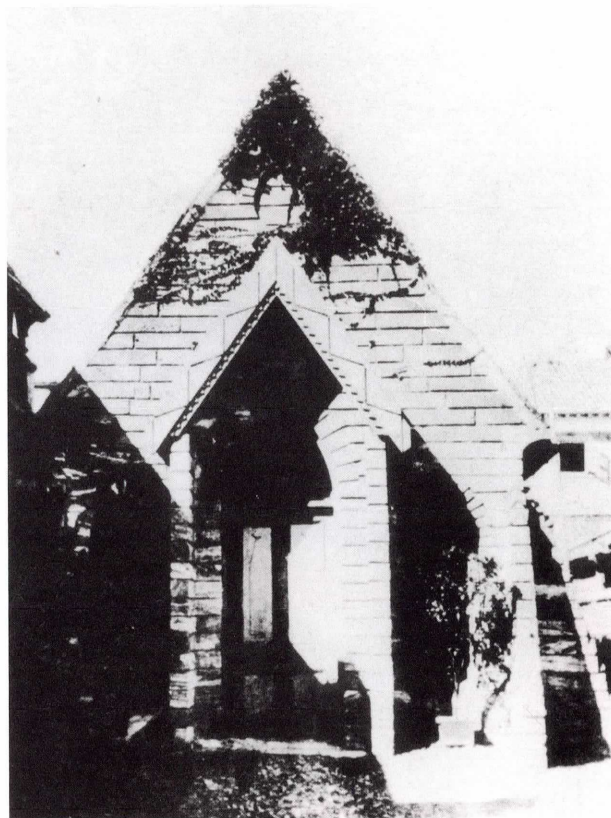
ヘボンが図面を引いた邸宅外観

*Outward appearance of Hepburn's residence drawn by himself*



(「甦る幕末」朝日新聞社刊による)

一方、ブラウンは来日後、ヘボンと協力して聖書の和訳に努めてきた。かたわら英語教師として、横浜英学所、新潟英学校、修文館(横浜)で教えてきたが、契約満了を機に辞任した。学生たちは失望し、ブラウンの住宅に家塾を開くことを懇請して、できたのがブラウン塾である。後にJamesバラの塾生たちも合流し、はじめは英学中心であったが、学生たちの多くがクリスチャンであったところから、あたかも伝道学校のような気風が生まれた。学生たちのなかに井深梶之助、植村正久、本多庸一、押川方義、熊野雄七、奥野昌綱、松平定教、駒井重格、島田三郎など有為な青年たちが群がり、日本キリスト教界に重要な役割を演ずる人びとが多く含まれていた。いわゆる横浜バンドである。



日本最初のプロテスタント教会、海岸教会小会堂、Jamesバラ建立(1871年)。後に英語教室にも使用され、岡倉天心は幼き日、ここで英語を学んだ

*Japan's first Protestant church established by James Ballagh*

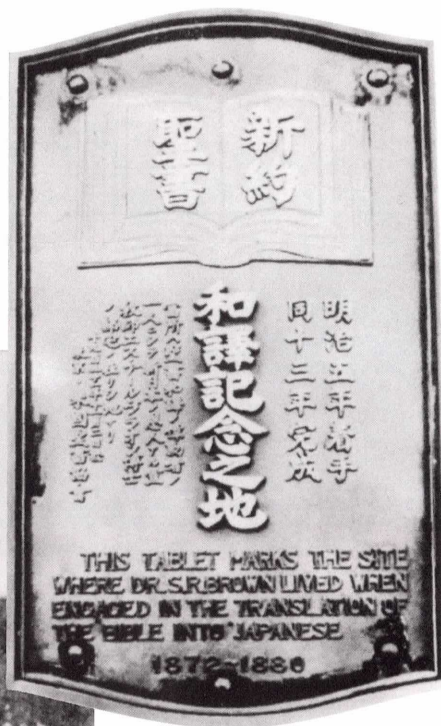


ブラウン塾生、左端本多庸一(青山学院院長)、右から2人目、押川方義(東北学院創立者)(1870年横浜で撮影)

*Katayoshi Oshikata(right second) and Yoichi Honda(left end)*

ブラウン邸跡に建つ「新約聖書和訳記念の地」碑

*Monument commemorating Brown's translation of the New Testament*



横浜・山手211番(現・横浜共立学園所在地)にあったブラウン邸。1873年ブラウンはここに家塾を開いた

*Dr. Brown's residence*

# 2 近代日本とヘボン

Dr. Hepburn and modern Japan

## 医は仁術なり

医は仁術であることを身をもって実践してみせたのがヘボンであるといっても過言ではない。神奈川宗興寺に設けられた施療所には、わずか5カ月の間に延べ3,500名の患者が訪れ治療を受けた。全患者無料で、専門の眼科のみならず外科手術も行い、当時の歌舞伎女形俳優澤村田之助の下肢手術は錦絵にもなり評判を呼んだ。岸田吟香も眼の手術をうけ、後に『和英語林集成』編集助手となった。

順天堂大学の祖、佐藤泰然、函館戦争のおり、敵味方の区別なく負傷者の治療をした高松凌雪も親しくヘボンより教えを受けている。



錦絵に描かれた田之助の手術風景。右端がヘボン（杉立義一氏蔵）  
Operation sketch painted in a color woodblock print-Hepburn(rightmost) -

## 『和英語林集成』とヘボン式ローマ字

日本文化におけるヘボン最大の功績はヘボン式ローマ字と、わが国最初の和英・英和辞書『和英語林集成』を世に出したことだろう。最も教養ある日本人の発音を表現しようとしたとヘボン自身が語るように、日本語をできる限り正確に欧米人に伝えようとした試みである。

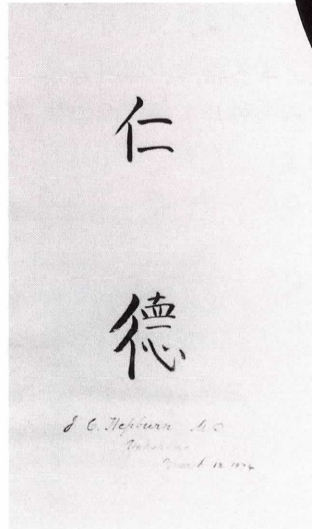
『和英語林集成』はおよそ2万語を超える見出し語を、日常会話、書物の中から採集し、古来のやまと言葉、漢語はもちろん日常語も記録された。したがって幕末、明治初期の日本語のありのままをそこに見いだすことができる。

晩年横浜に住み、ヘボンと親交があった西洋医学者佐藤泰然

Taizen Sato



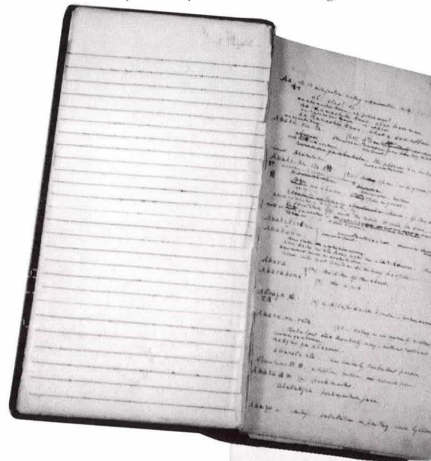
ヘボン自筆の書(川室道隆氏蔵)  
Dr. Hepburn's own handwriting



『和英語林集成』  
初版のローマ字五十音図  
Systematic table of  
the Roman alphabet syllabary

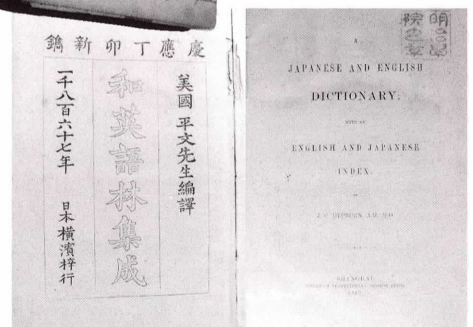
a	i	u	e	o
ka	ki	ku	ke	ko
sa	shi	sz	se	so
ta	chi	lsz	te	to
na	ni	nu	ne	no
ha	hi	fu	he	ho
ma	mi	mu	me	mo
ya	i	yu	ye	yo
ra	ri	ru	re	ro
wa	i	u	ye	wo
ga	gi	gu	ge	go
za	ji	dz	ze	zo
da	ji	dz	de	do
ba	bi	bu	be	bo
pa	pi	pu	pe	po

ヘボン自筆原稿ノート（明治学院大学所蔵）  
Draft note by Dr. Hepburn's own writing



『和英語林集成』初版  
（明治学院大学所蔵）

Waei Golin Shusei-the first edition-



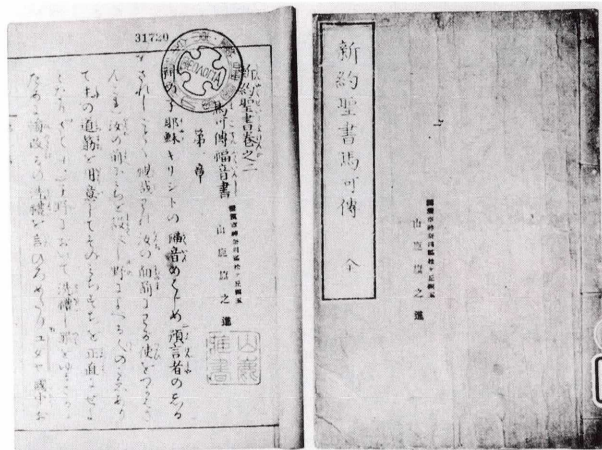
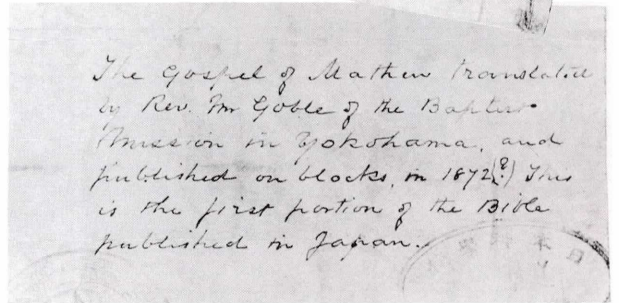
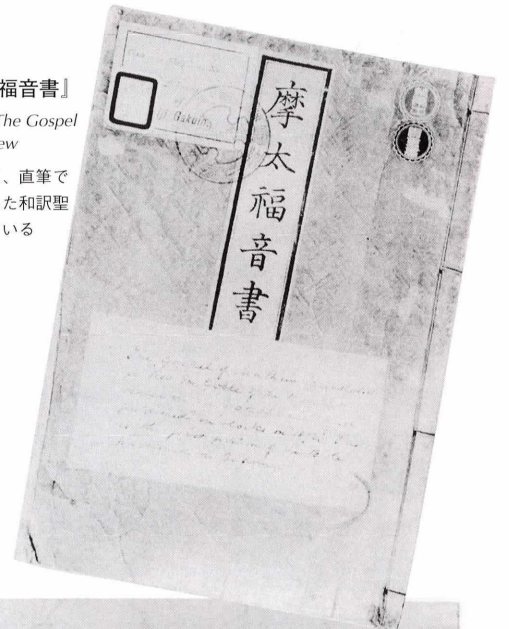
ヘボンと聖書和訳 Dr. Hepburn and the Bible translation

日本で和訳聖書が最初に出版されたのは横浜であり、その際使用されたのはヘボン苦心の辞書『和英語林集成』である。旧、新約聖書全巻にわたって、和訳に関わったのはヘボンただ一人であった。「日本語で書かれたこの貴重な書物は金にも銀にも勝る貴いものです。私は労苦を語るつもりはありません。それはただ愛の労作であり、喜ばしい奉仕の労作であるからです」とヘボンは語る。ブラウン、フルベッキら宣教師とともにブラウン塾の出身者奥野昌綱、高橋五郎さらに国学出身で、のち神戸で受洗した松山高吉の協力を忘れてはなるまい。奥野、松山はわが国の讚美歌作詞にも大きく貢献している。

ゴープル訳『摩太福音書』

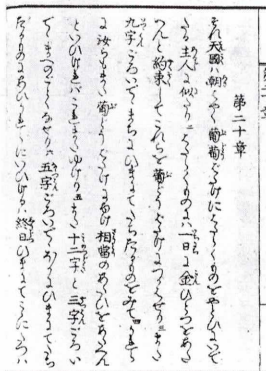
Goble's translation of The Gospel According to St. Matthew

ヘボンは、その表紙に、直筆で日本で最初に出版された和訳聖書であることを記している



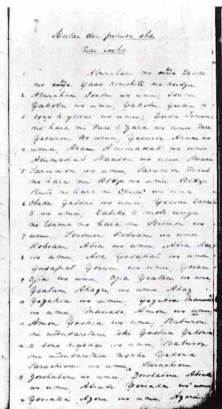
1872年出版ヘボン、ブラウン共訳『新約聖書馬可傳』の表紙と第1ページ

Dr. Hepburn and Dr. Brown's translation of Mark



ヘボン訳(奥野昌綱筆)マタイ伝の一部

The first translation of the Bible in this country by Dr. Hepburn(part of Matthew)



ヘボン訳 マタイ伝草稿



聖書和訳の貢献者たち Contributors to the Bible translation

右側 S.R.ブラウン、高橋五郎、R.S.マクレー  
中側 G.H.フルベッキ、J.C.ヘボン、奥野昌綱、P.K.ファイソン  
左側 D.C.グリーン、松山高吉、N.ブラウン

(Tokyo Missionary Conference 1900年所収)

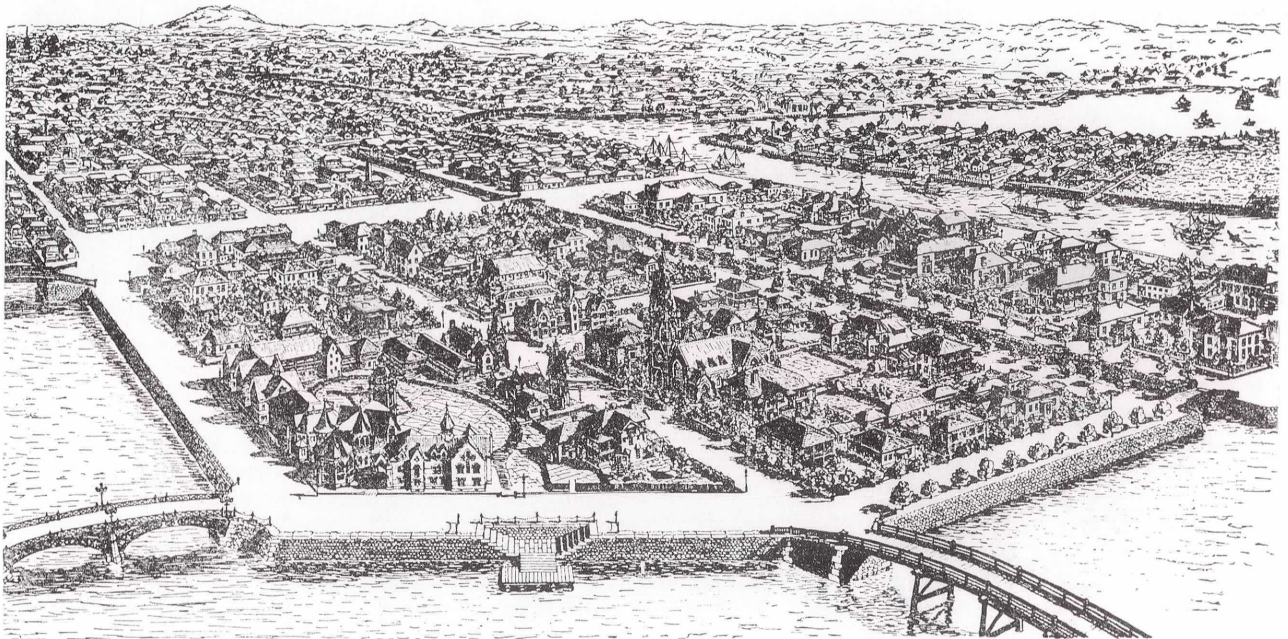
## 3

## 明治学院の揺籃期——築地時代

*The cradle of Meiji Gakuin-The school in Tsukiji*

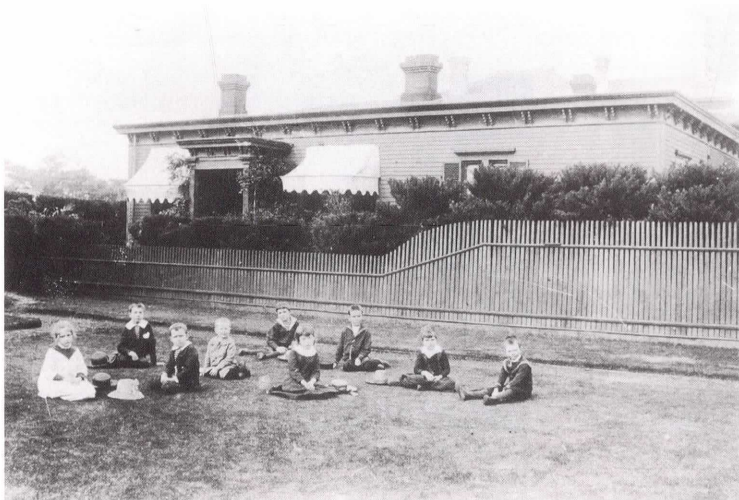
1877(明治10)年アメリカ長老教会、スコットランド一致長老教会およびアメリカ改革派教会は合同で日本人伝道者育成のために新しい神学校を創設することを決議した。東京一致神学校の誕生である。築地外国人居留地17番(現・東京都中央区明石町7番14号)に平屋建ての校舎が建てられた。その第1回卒業生は井深梶之助、植村正久、瀬川浅、松村介石である。そして1880年へボン塾の後身バラ学校が同地に移転し築地大学校と命名された。さらに横浜の

ワイコフ(Wyckoff, M.N. 1850~1911)の先志学校と合併し、東京一致英和学校となったのである。当時、わが国には東京大学と大学予備門とが最高の学府で工部大学校、札幌農学校などを除いて高等教育機関があまりなかったこともあり、米国風のカレッジに模した、この学校が高等教育を施すハイカラな学校として優秀な青年学生を集めたのも当然である。一致英和学校には勝海舟の三男梅太郎、また朝鮮からの留学生5名も在籍していた。



TOKYO, THE FOREIGN CONCESSION, AND THE CHURCH'S MISSION PROPERTY.

築地外国人居留地外観 Overall view of Tsukiji foreign settlement



インブリー館(築地居留地6番)

*Imbrie residence(Tsukiji settlement No.6)*

インブリー(Imbrie, W. 1845~1928)は1875年来日、東京一致神学校教授として新約釈義、キリスト論を講じる。1886年明治学院創設の際には中心的な役割を果たし、明治学院のキリスト教教育のためにその生涯を捧げた



東京一致神学校(1879年新校舍落成)開校当時は築地六番館付属小会堂(元築地六番神学校校舍)およびフォールズ(Faulds,H.)の築地病院が使用されていた。



明治14年頃の浦堀橋付近  
 左手前は東京一致神学校(17番)、隣へ、ユニオン・チャーチ、B6番; A6番女学校、右手前フォールズ宅(横浜開港資料館)  
 The Tokyo Union Theological Schoolhouse



一致神学校蔵書印  
 Ownership stamp



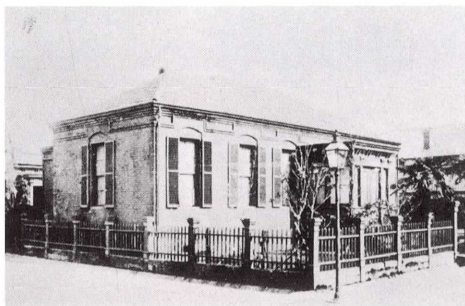
築地大学校印 School seal



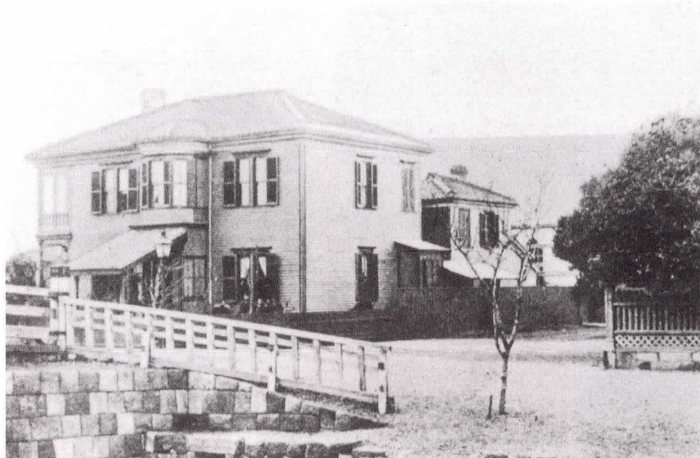
1878年当時の一致神学校学生 Theological students in 1878



東京一致英和学校印 School seal



この建物は、従来、築地大学校とされてきたが1995年6月『明治学院旧宣教師館建物調査』において、一致神学校の一部であることが報告された。同報告書には築地大学校について『明治学院50年史』の記事を引用し「…二階建ての小さな建物があった。間口は十間ほどで、中央に玄関があり、その間口十間の本館の両端からは後方に向かって二つの翼が出ていて、謂はば変則なH字形をなして居った。…中略…付属建物としては、H字形の後方に一棟の横長の食堂及び賄部の建物があった…云々」とあり、写真の入れ替わりがあったことを示唆している。



築地大学校(1880年開校)英学科(予科3年、本科3年)と漢学科があった。教授として田村直臣、幹事として松村介石も名を連ねている  
 Tsukiji College Schoolhouse



明治学院発祥の地記念碑(築地明石町)  
 Meiji Gakuin's Birthplace Memorial

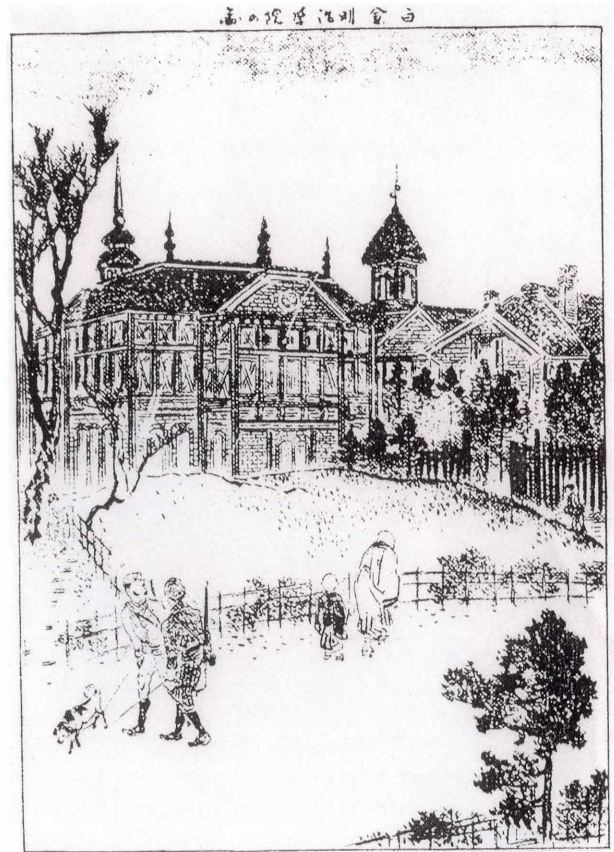
# 4 白金の丘に根深く——明治学院の創立

Deep-rooted in the "Green Hill of Shirokane"-The establishment of Meiji Gakuin

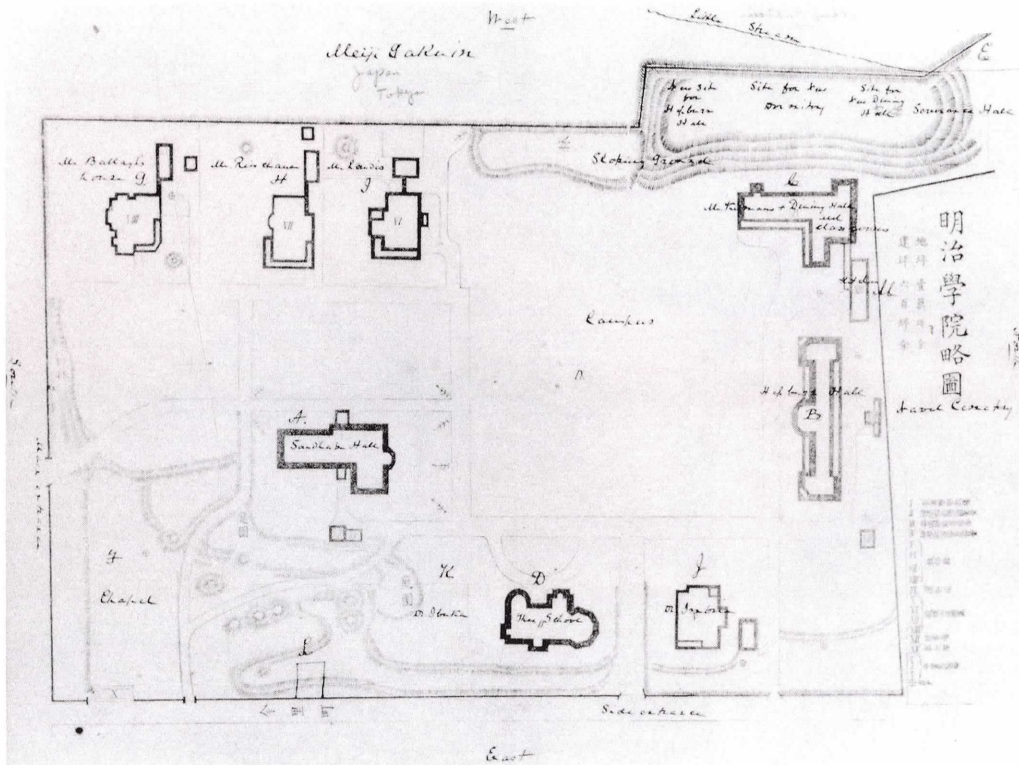
1886(明治19)年、東京一致神学校、東京一致英和学校と同予備校は合併し、明治学院の創立が決議され、翌年設置認可を得た。東京府下、荏原郡白金村字玉縄台、旧三田藩の下屋敷跡を校地と定め、邦語神学部、普通学部と専門学部を設置した。普通学部第1回生には島崎春樹(藤村)、戸川明三(秋骨)、馬場勝弥(孤蝶)らが名を連ねている。

明治学院の名称は設立者の一人植村正久の提案で、明治文化のなかに輝く学問の殿堂という意味が込められているという。

「時は古い学窓を変えた。そこにある建築物、そこにある運動場——今はほとんど昔の日の面影をとどめない。しかし私が少年期から青年期に移りかける頃の学生時代は、まだそこに残っているような気がする」(藤村『古い学窓のこと』より)



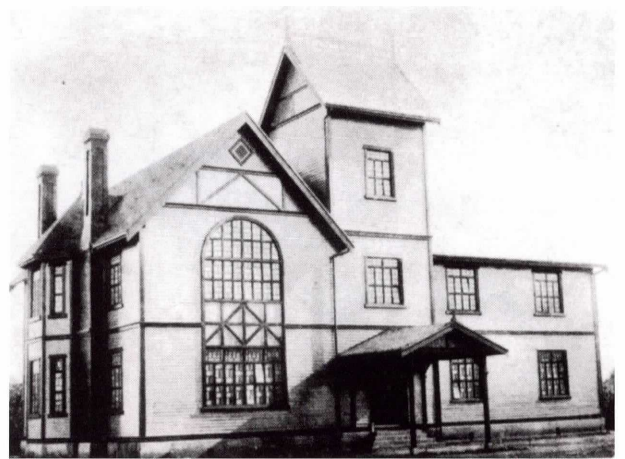
初期明治学院風景(版画) Woodblock print of Meiji Gakuin in the early days



1890年代の明治学院構内略図 Meiji Gakuin Sketch Map

初期明治学院校舎 *Early Meiji Gakuin School Buildings*

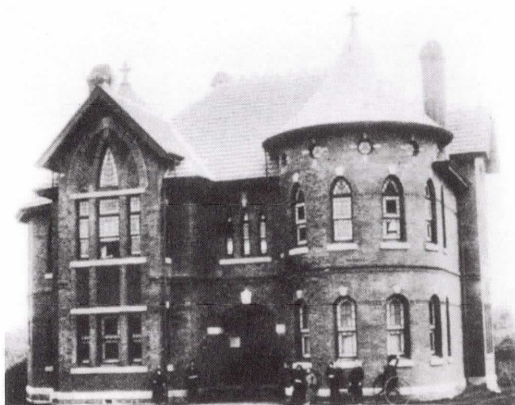
白金の丘にまず、普通学部校舎、寄宿舎が建てられた。それぞれサンダム館、ヘボン館と、建築資金の主たる献金者の名にちなんで命名された。とりわけヘボン館は当時東京随一といわれた大建築で、地下1階地上3階さらに屋上に楼があったが、ヘボンが『和英語林集成』の版權を書肆「丸善」に譲渡して、その代金全額を寄付したことによる。その後、神学部仮校舎となり寄宿舎にもなったハリス館、さらに1890年に神学部校舎兼図書館が新築された。このように明治学院の建築はアメリカの教会信者さらに宣教師たちの献金によるものであり、まさに彼らの祈りのうちに建てられたと言ってよい。



サンダム館(講堂兼校舎)ここで毎週1回金曜日夜に文学会が開かれ内外の講師を招き講演会、音楽会が催された Sandham Hall



ハリス館、ヘボンホールそして運動場の一部 *Harris Hall Dormitory, Hepburn Hall and part of Sports Field*



神学部校舎兼図書館(現・記念館、1890年奉献)  
*The present Memorial Hall used as the Theological School Building and Library in 1890*



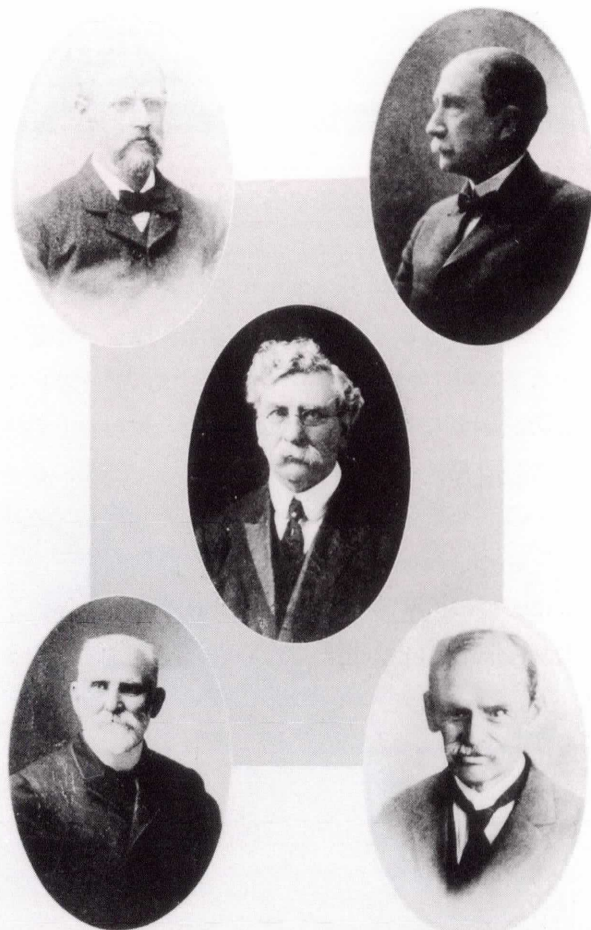
1890年代明治学院遠景、中央サンダム館、右ヘボン館  
*Distant view of Meiji Gakuin(1890's), Sandham Hall(center)*

### 初期宣教師群像 *Early Missionaries*

東京一致神学校、英和学校から始まって明治学院は多くの宣教師たちの献身的努力によって支えられてきた。彼らはミッション・ボードによる以外まったく無給であり、しかも学院校舎の建築にあたっては率先して献金を寄せたのである。その夫人たちも教壇に立ち、あるいは学生たちを家庭に招き、よき援助者として働いた。秋骨、藤村らもドイツ語、フランス語の初歩を宣教師の家庭ですでに学んでいた。

明治学院「私立学院設置願」(1887年)によると、初期の宣教師たちは13名にのぼる。右の写真でやや遅れて就任したランディス以外は、築地時代からの人びとであるが、これ以外にも次のような人物がいた。

J.M.マッコレーイ、H.ワデル、G.H.F.フルベッキ、H.ハリス、J.W.ノックス、T.M.マクネア、E.R.ミラーさらにバラの妹であるA.B.バラ、妻のJ.C.バラも英語、音楽を教えている。彼らは神学、英語のみならず物理学、化学、数学なども教え、日本の近代教育のあり方に大きな示唆を与えた。



右上よりインブリー、ランディス(Landis, H.M.1857~1921)、中央ワイコフ、左上よりアメルマン(Amerman, J.L.1843~1928)、ジョン・バラ *Early Missionaries* (upper left-Amerman, upper right-Imbrie, center-Wyckoff, lower left-Ballagh, lower right-Landis)

白金キャンパス内にあった宣教師館、現在は下のインブリー館(1997年修復)のみ同窓会館として残っている

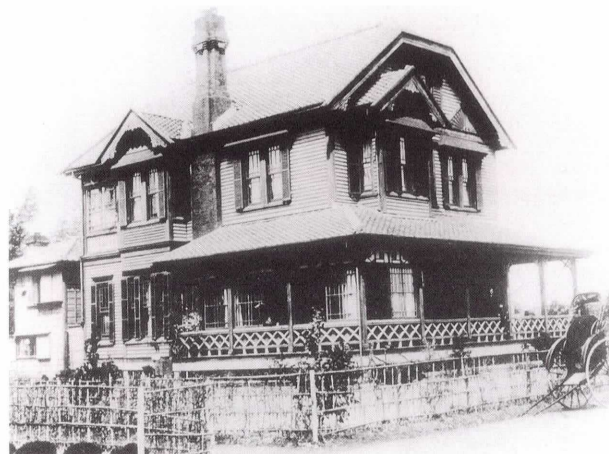
*Missionary residence in Shirokane Campus*



インブリー館 *Imbrie residence*



バラ館 *Ballagh residence*



ランディス館 *Landis residence*

学生生活——桜の実の熟する時——

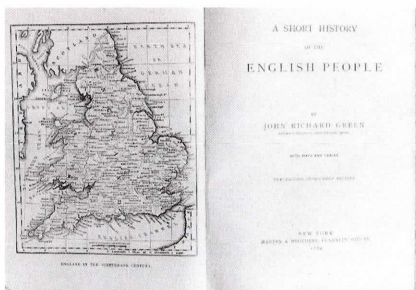
Student life —when the time is ripe for cherry blossom fruit—

草創期の明治学院での学生生活はどんなであったろう。普通学部第1回卒業生島崎藤村は、その思い出を「桜の実の熟する時」で懐かしげに語っている。学年の終わりにある英語の競争演説、教授たちの家庭に一同が招待された時の夜の楽しさ、同級のなかにずいぶん年の違った生徒がいること、そして教授は“Now, Gentlemen!”と至極丁寧な懇懇な調子で一切アメリカ風に紳士扱いをしたことなど。

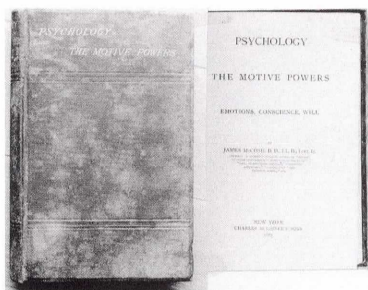
普通学部は神学部の予備的教育機関として設置され、同時に高等中学校(旧制)高学年に進学しうだけの学科目が用意されていた。教頭ヘボン博士はじめ8名の米人教師、4名の日本人教師によって教授された内容は、英語英文学、国漢学は当然のこと、心理学、論理学、理財学(経済学)、星学(天文学)に至るまで現在の大学教養学部匹敵するものであった。一部の学科目以外はすべて英語でなされ、ヘボン自身、生理学を担当していた。



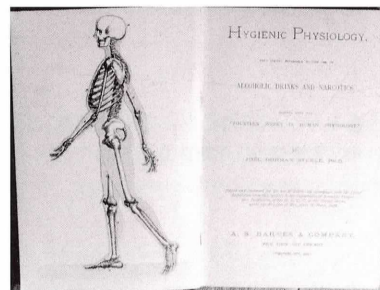
普通学部時代藤村と学友たち (左端が藤村)  
Young Toson Shimazaki and his fellow students (left end—Toson)



英国史教科書  
Textbook (History)



心理学教科書  
Textbook (Psychology)



ヘボン使用の生理学教科書  
The textbook (Physiology) Hepburn used

宣教師たちは聖書だけではなく、芸術、スポーツなども日本にもたらした。日本野球史を紐解くと、その発祥は東京一致英和学校にまで遡ることができる。宣教師インブリー、マクネアがアメリカの大学のプレーヤーであったこともあり、よき指導者を得て明治学院普通学部は一高(東大教養学部)と並ぶ野球名門校と称せられていた。世にインブリー事件として知られるインブリー教授負傷事件も、この一高との試合の最中に起こったのである。



明治学院普通学部野球チーム(1890年頃)  
Baseball team (c.1890)



普通学部第1回卒業式  
(1891年、ヘボン博士を中心に)  
General Course graduation photo in 1891  
(center—Dr. Hepburn)

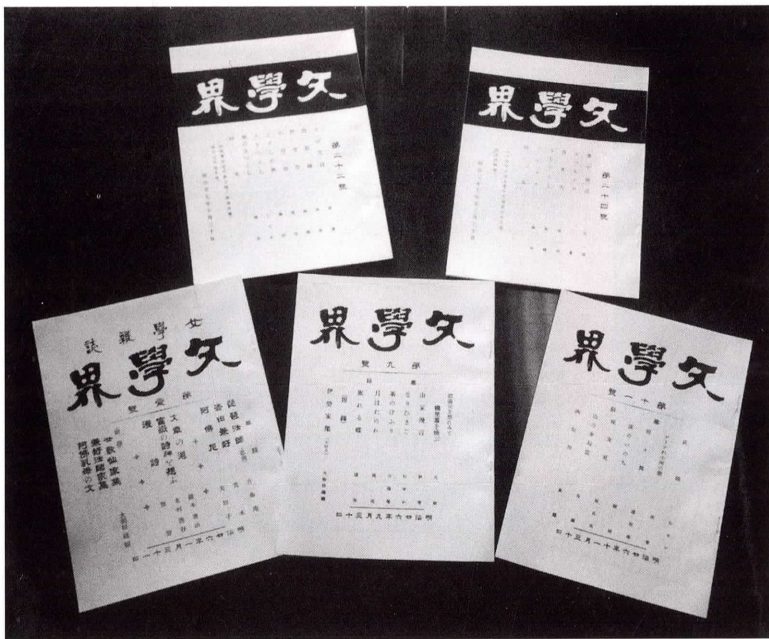
# 5 明治学院のロマンティズム——文学と美術の開花

Meiji Gakuin and the Romantic Movement-The Development of Literature and the Arts

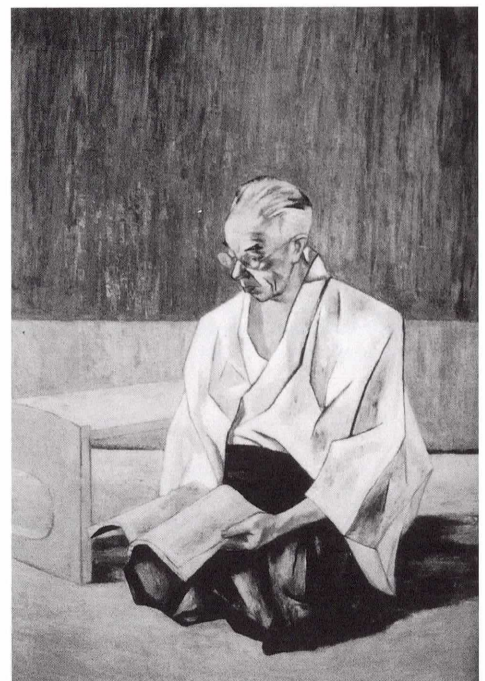
「ついに新しき詩歌の時は来たりぬ、そはうつくしき曙のごとくなりき」近代日本の浪漫主義運動は明治学院を中心に起こったと言っても過言ではあるまい。1893(明治26)年『文學界』は星野天地の編集で発行されたが、北村透谷、樋口一葉らの活躍も大きい。藤村をはじめ戸川秋骨、馬場孤蝶の動きは大切である。この時期の藤村、秋骨はロセッティ(Rossetti, D.G.)に傾倒し、その詩と美術に深い関心をよせていた。唯美主義、神秘的理想主義にたつロセッティ派(ラファエロ前派)への関心はなみなみならぬものがあった。一方、三宅克己、和田英作、岡田三郎助ら洋画家たちもほぼ同じくして普通学部在籍し、後の東京美術学校長和田英作は藤村の助言で画家への道を選んだという。この明治学院のロマンティズムの伝統は、画家では岡田謙三、岡見富雄らにひきつがれ、文学では中山昌樹、さらには現代の作家耕治人、小沼丹にまでもつながっている。ちなみに、藤村の次男鶏二、三男翁助(中学部中退)も画家として活躍した。



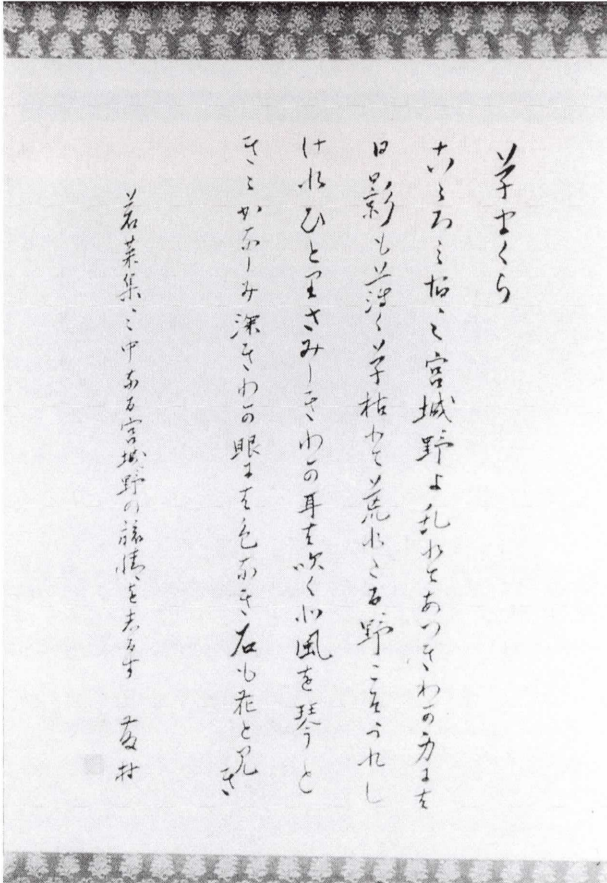
『文學界』同人 前列右より星野夕影、秋骨、星野天地、上田敏、後列右より平田禿木、孤蝶、藤村(1894年1月) Bungakukai coterie



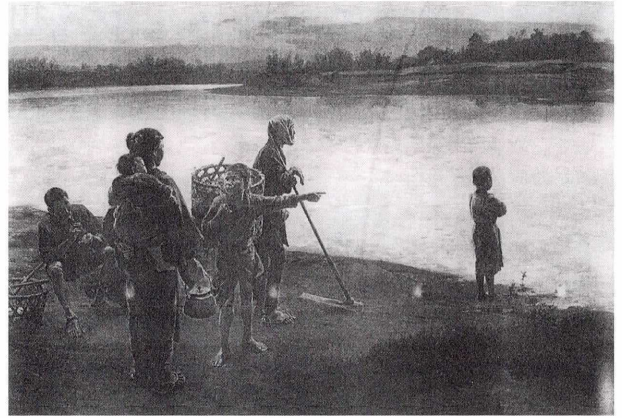
『文學界』(1893年1月~1898年1月) 藤村、秋骨、孤蝶らが参加した浪漫主義文学運動の中心的雑誌である Covers of Bungakukai



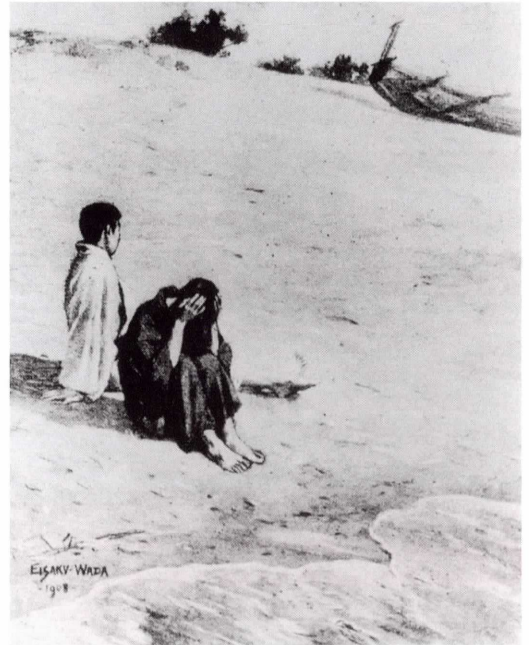
「藤村像」藤村次男鶏二(二科会所属)画 Image of Tosen



藤村自筆『若菜集』の一節 Draft of Wakanashu by Toson



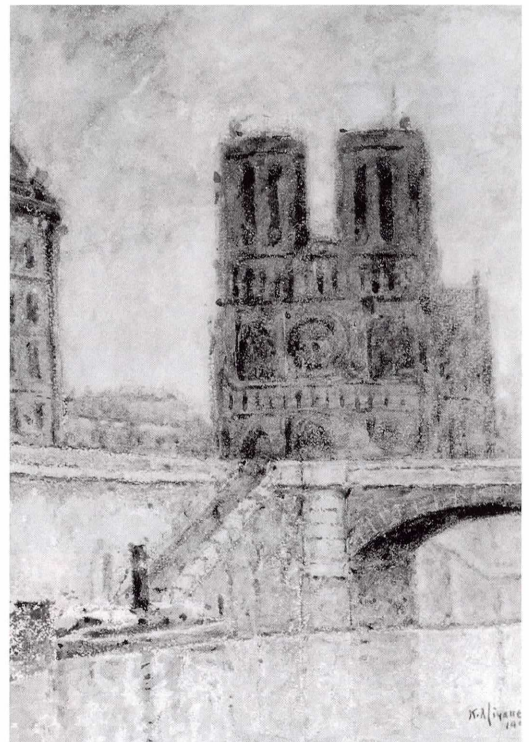
和田英作「渡頭の夕暮」(1897年) Landscape by Eisaku Wada



島崎藤村「春」の口絵「緑陰叢書第二編」和田英作画 (1908年) Frontispiece of Toson's Haru painted by Eisaku Wada



岡田三郎助「自画像」(1899年) Painting by Saburotsuke Okada



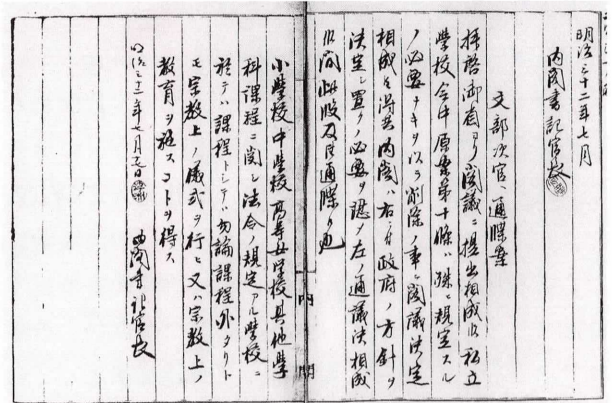
三宅克己「雨後のノートルダム」(1902年) Painting by Katsumi Miyake

# 6 立てよ、畏るるなかれ——文部省訓令12号問題と学院生の社会的関心

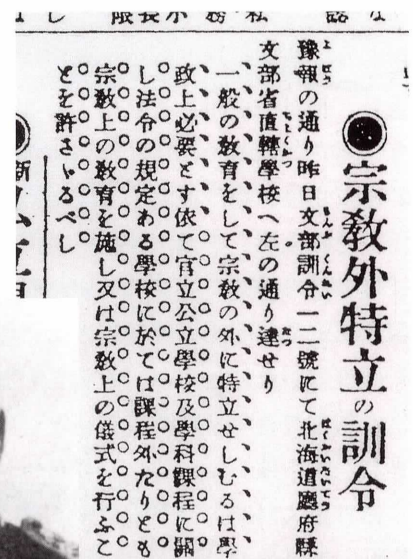
Take a Stand and Be Afraid of Nothing—The Issuance of Directive 12 by the Ministry of Education and Meiji Gakuin students' deep involvement in social affairs

1899(明治32)年は明治学院にとって、最初の受難の年である。明治政府はこの年8月、「私立学校令」を公布したが、同時に文相樺山資紀は訓令第12号を発令した。これは、官公私立すべての学校における宗教上の儀式と教育を禁止したものであるが、キリスト教主義学校を直接の対象としたことは明らかである。明治学院はキリスト教教育を堅持することに決し、尋常中学部(普通学部)は上級学校への進学資格と徴兵猶予の特権を失い、在校生の間に将来の進路への不安から退学者が続出した。翌年3月訓令発布後最初の卒業式に卒業証書を授与されたのは鈴木春(元理事長、1880～1979)ら3名であった。

明治期最大の社会問題といわれる足尾鉍毒事件に対して学院生はいかなる関心を持ったか。1901年12月、「毎日新聞」は学生たちの鉍毒被害者窮状視察旅行の広告を掲載した。発起人として田村直臣を委員長とする安部磯雄ら6名の委員会、それと社長島田三郎らが提携して企画したのであるが、学院生15名もそれに参加している。明治学院では1903年11月、日光足尾地方への修学旅行を行い、宿舎で臨時文学会を開き熱心に討論した。



宗教教育禁止の閣議決定通牒書案(国立公文書館蔵) Official notice from the Administrative Vice-Minister of Education prohibiting religious education



文部省訓令十二号を報じた新聞記事 A newspaper account reporting the Order



川俣事件(鉍毒被害者押し出し事件)裁判に関する被害調査団一行(1901年) Inspection tour



樺山資紀文相 Tsugunori Kabayama

鉍毒問題を天皇に直訴し、その生涯を足尾鉍毒事件解決に捧げた田中正造およびその記念碑



Stone monument



Shozo Tanaka



# 7 井深梶之助と植村正久

Dr. Kajinosuke Ibuka and the Rev. Masahisa Uemura

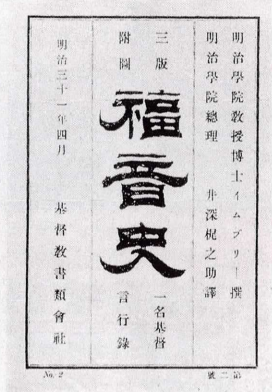
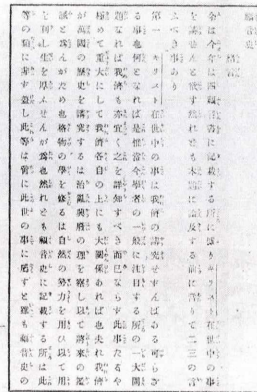
日本キリスト教界の二人のリーダー

Two leaders in the Japanese Christian community

ヘボン、S.R.ブラウン、フルベッキら宣教師たちの功績は大きかったにせよ、明治学院を今日に至らしめたその基礎は、井深梶之助、植村正久この二人によって築かれたといってもよからう。明治維新において没落の憂き目をみた彼らが、新時代を夢見て横浜ブラウン塾に入塾したのは偶然ではない。牧師、神学者として、さらに教育者、文明評論家として日本のために尽くした貢献度は、はかり知れない。

井深梶之助(1854~1941)は明治学院設立と同時に副総理兼神学部教授に任ぜられ、普通学部においても英文学を講じ、藤村や戸川秋骨らに大きな影響を与えた。1891年初代総理ヘボン博士の後を受け、第2代明治学院総理に就任、その人格、学識に相まって訓令第12号事件の毅然たる態度、明治学院校歌の制定など明治学院発展の基礎づくりに貢献した。日本基督教会大会議長、日本基督教青年会同盟委員長として大きな足跡を残している。

植村正久(1857~1925)は下谷教会、麹町一番町教会(現・富士見町教会)牧師として伝道のかたわら明治学院神学部教授として初期明治学院創成に尽力した。旧約聖書翻訳委員の一人として「詩篇」「雅歌」「イザヤ書」の翻訳、「新撰讚美歌」の編集。また雑誌『福音新報』『日本評論』における福音主義の立場に立つ文明批評、さらには西欧文学の紹介、評論など近代日本文学の発展にも貢献した。1903年明治学院を辞任し、東京神学社を設立。外国ミッション団体によらない日本人のための日本人による神学教育を志した。



インブリー撰 井深訳『福音史』

The History of the Gospels (Selected by Imbrie and translated by Ibuka)

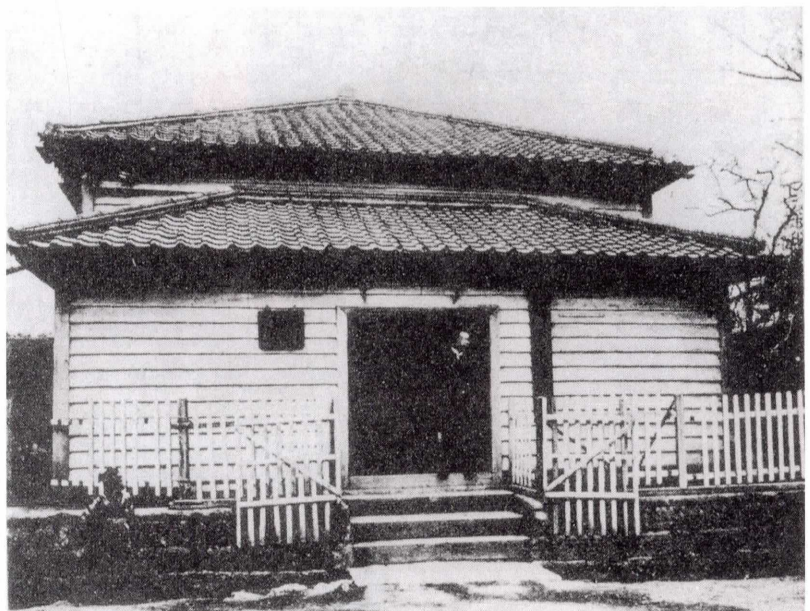


明治学院第2代総理 井深梶之助

Kajinosuke Ibuka, Meiji Gakuin's second president



植村正久牧師 Rev. Masahisa Uemura



植村の牧した一番町教会(富士見町教会の前身、1888~1906)

Ichibancho Church (the present Fujimicho Church) where Uemura served as a preacher

## 8 フルベッキと東山学院——もう一つの源流

*Dr. Guido E. Verbeck and Tozan Gakuin—Another link in the university's historical chain*

フルベッキが新婚の MARIA 夫人とともに長崎に赴任したのは1859(安政6)年の、年も押し迫ってからであった。翌年1月、MARIA 夫人は女兒を出産したが、日本が開国して、最初に生まれたクリスチャンの子供であることを喜び、エマ・ジャポニカ・フルベッキと名づけた。しかし、数日にして天に召された。フルベッキの長崎伝道はこのように悲しみのうちに始まったのである。

フルベッキは宣教師でありながら、長崎の英学所、後に洋学所、済美館と名称は変わるがその教頭となり、さらに佐賀藩の藩校、致遠館にも出講し、語学(英、仏、蘭、独)のほか政治、天文、科学、築城、兵事等の諸学を講じている。長崎における彼の門下生として、大隈重信、副島種臣、江藤新平、大木喬任、伊藤博文、大久保利通、加藤弘之、杉亨二、横井小南らがあり、後年明治新政府の指導的役割を果たした。

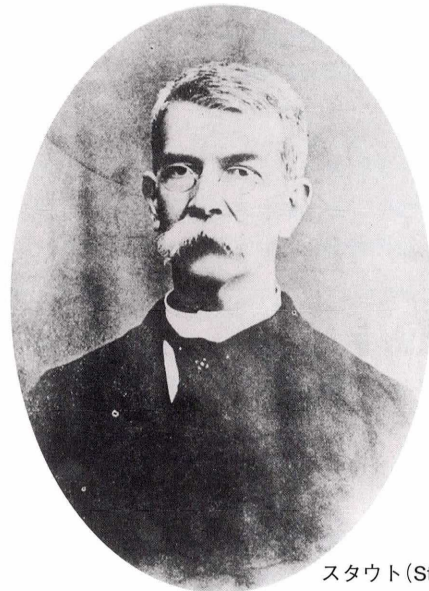
長崎済美館におけるフルベッキの後任が、スタウトである。スタウトは1868年来日し、広雲館(済美館の後進)で教鞭をとった。しかし、明治初年の切支丹迫害は伝道活動を困難にしたため、自身の邸内に会堂を建て、英語教授と聖書講義を行い、日曜学校、祈祷会を持った。この私塾がスチール記念学校神学部となり、東山学院となっていくのである。

このスタウト塾で信仰を与えられた瀬川浅らが上京し、東京一致神学校に入学。瀬川は卒業後、東山学院に帰りスタウトを助けて伝導者養成に尽力した。東山学院神学部はその後1902(明治35)年明治学院神学部と合併される。



フルベッキ(ヴァーベック)

*Dr. Guido E. Verbeck*



スタウト(Stout, H. 1838~1921)

*Dr. Henry Stout*



フルベッキと済美館生徒 *Dr. Verbeck and the students of Seibikan*



東山学院神学部校舎 *Theological Department School Building*

# 9 | ヘボン館に集まった若者たち——初期明治学院生群像

Students gathered at Hearn Hall—Student life in the early days

近代日本文学、芸術の黎明期において明治学院のはたした役割は、藤村、和田英作らを生み出しただけに止まらない。世界冒険譚の桜井鷗村(1872~1929)、自然主義作家岩野泡鳴(1873~1920)、日本におけるバイロンの紹介者でありプラトンの翻訳者である木村鷹太郎(1870~1931)も普通学部を通過した一人である。『早稲田文学』から出発したユーモリスト生方敏郎(1882~1969)もそこにいた。ヘボン館は彼らの憩いの場であり語らいの場であった。

母校教師から実業界に転じた富尾留雄(1879~1951)、革命思想家和田三郎(1872~1926)と詩人革命家池亨吉(1873~1954)はともに中国革命運動の中心孫文を支援した。彼らもまた普通学部の学生であった。明治30年代後半になると、ヘボン館が手狭になり隣のハリス館も寄宿舎になった。沖野岩三郎(牧師・作家、1876~1956)の後を追って神学部に入った加藤一夫(評論家、1887~1951)、賀川豊彦(社会運動家、1888~1960)、イタリア原語からわが国最初にダンテの『神曲』を全訳した中山昌樹(英文学者、1886~1944)、第6代学院院長 都留仙次(神学者1884~1964)、第5代明治学院院長になった村田四郎(神学者、1887~1971)も顔を見せる。そのころ高等学部生佐々木邦(作家、1883~1964)は英文学の研究に余念がなかった。



都留教授と卒業生、三谷隆正ほか  
Professor Tsuru, Takamasa Mitani and graduates

## 方法序説

デカルト著  
落合太郎訳



理性はすべての人間に平等に備わっており、正しく用いれば人は誰でも自分の精神を最高の点まで高め得るとする「方法序説」の言葉は、中世的迷妄主義からの独立宣言であり、近代精神の確立を告げる画期的なものであった。徹底的な疑いを通じて確実な真理に迫ろうとしたデカルト(1596-1650)の体験と思索が集約された思想的自叙伝。



青 613-1  
岩波文庫

フランス・モリス  
ト研究の権威落合太  
郎博士(1886~1969)  
もこのころの普通学  
部生である

Taro Ochiai's Translation  
of An Introduction to the  
Methods by René Des-  
cartes

## 幸福論

三谷隆正著



人生いかに生くべきか、幸福とは何か——誰もが若い日々に、あるいは年を経てからも、繰り返し確認し納得したいという強い思いに駆られる。本書は、秀れた法

哲学者で無教会キリスト者である著者(1889-1944)が、深い学識と信仰を基に、この永遠のテーマについて明晰に述べた遺著で、読む者をしっかりとらえて放さない。  
(解説=武田清子)



青 187-1  
岩波文庫

An Essay on Happiness by Takamasa Mitani



神学生都留仙次は普通学部生を集めて幼年党を組織している

Young boys belonging to the Preparatory Department(center-Senji Tsuru, who later became chancellor)

幼年党の綱領は、曰く「少年は少年らしく無邪気なるべし」「白金の伝統を守りて自由自治なるべし」とあり、『自治の星』という回覧雑誌を作っていた。普通学部生三谷隆正(法哲学者、1889~1944)はそのころのことを懐かしく回想している。三谷は後、一高教授になるが、その人格と学識は慕う者が多かった。

# III 明治学院の軌跡——苦難の道を

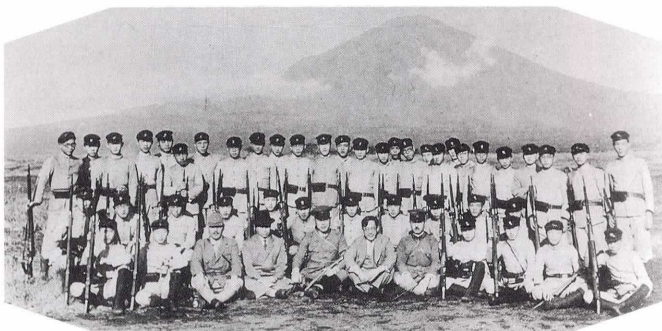
Significant Developments in the Pre-War Period-Struggling Against Difficulties

明治政府は、最初は旧幕府以上にキリスト教に厳しい態度をとっていたが、欧米からキリスト教迫害を抗議されて1873(明治6)年、切支丹禁制の高札を撤去した。また、実際宣教師から先進西欧諸国の文明を学んだため、キリスト教は順調にその勢いを伸ばしていった。

しかしやがて明治政府は天皇制による超国家主義体制確立の準備を着々と進めていく。1889(明治22)年、大日本帝国憲法が公布され、それを阻止しようとした文部大臣森有礼は、キリスト教徒であるという理由で暗殺された。1890年、教育勅語が公布され国家主義支配体制が整えられていった。

日本のキリスト教界、キリスト教学校も、世代交代するにつれ、日本全体の社会的権威に対してしだいに妥協的態度をとることを余儀なくされていく。

1936(昭和11)年、全国キリスト教協議会は「神社は宗教的なものではない」という国家神道を超宗教的なものとする政府見解を受諾する。そしてキリスト教学校も軍事教練を受け入れることと、天皇の御真影、教育勅語を強制され、忌まわしい戦争へ巻き込まれていくこととなる。



軍事教練 Military training

年	明治学院事項及び一般事項
1907(明治40)	・校歌制定
1910(明治43)	・大逆事件、日韓併合
1911(明治44)	・ヘボン館、ハリス館焼失
1914(大正3)	・第一次世界大戦勃発
1915(大正4)	・普通学部を中学部と改称
1916(大正5)	・礼拝堂献堂式
1920(大正9)	・賀川豊彦『死線を越えて』を雑誌『改造』に連載 ・国際連盟に加入
1921(大正10)	・井深梶之助総理辞任、オルトマンズ総理事務取扱
1923(大正12)	・関東大震災
1924(大正13)	・神学部角答移転
1925(大正14)	・高等学部校舎井深ホール完成 ・田川大吉郎総理就任 ・陸軍大尉派遣、中学部に軍事教練実施 ・治安維持法、普通選挙法の公布、ラジオ放送の開始
1926(大正15)	・学生協議会軍事教練反対決議
1927(昭和2)	・明治学院消費組合設立 ・創立50周年記念 ・市電開通「二本榎明治学院前」
1928(昭和3)	・高等学、高等商業両部に軍事教練実施
1929(昭和4)	・社会科学学生セツトルメント開設
1930(昭和5)	・神学部分離、日本神学校設立
1931(昭和6)	・学生消費組合創立
1932(昭和7)	・東山学院中学が明治学院第2中学部東山学院となる ・上海事変、5.15事件
1933(昭和8)	・国際連盟を脱退、京大滝川事件
1934(昭和9)	・社会科を社会事業科と改称
1935(昭和10)	・田川院長辞任、ホキ工院長事務取扱となる
1936(昭和11)	・「御真影」奉戴問題で文部省に召喚 ・2.26事件
1937(昭和12)	・校歌碑建設創立60周年記念 ・日中戦争、日独伊防共協定
1938(昭和13)	・学生消費組合解散 ・「御真影」奉戴 ・国家総動員法の公布
1939(昭和14)	・矢野貫城院長就任
1940(昭和15)	・井深梶之助死去 ・ミッション奨助辞退
1941(昭和16)	・学友会解散、報国隊結成 ・日ソ中立条約、太平洋戦争(～1945)
1942(昭和17)	・学院特設防護団組織 ・高等学、高等商業両部繰上卒業
1943(昭和18)	・学院勤労報国隊出勤、繰上卒業
1944(昭和19)	・明治学院専門学校開設
1945(昭和20)	・文部省訓令十二号廃棄を指示

(太字は当学院関係)

# 1 1907(明治40)年校歌制定

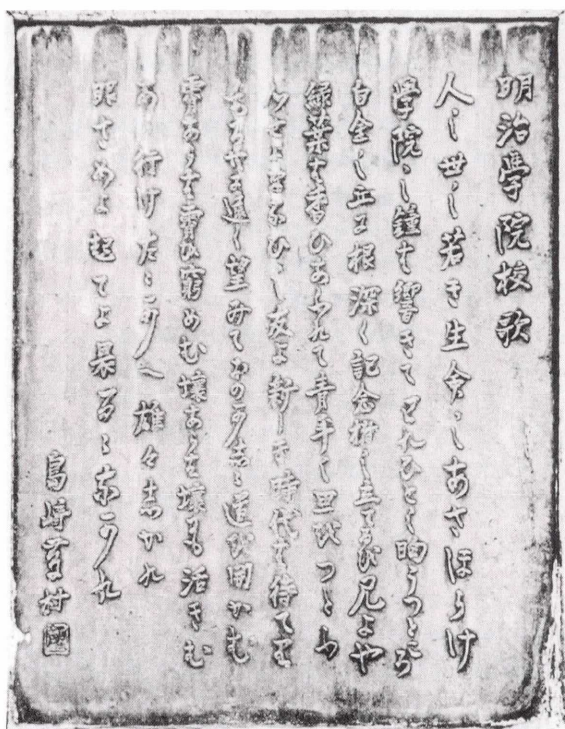
The school's new alma mater

1906(明治39)年6月3日、島崎藤村は学院の依頼で校歌を作詞した。そのころ藤村は前年三女縫子を、同年次女孝子を病死させ、しかも長女みどりが危篤入院中という家庭の不幸のどん底にあった。当日藤村はただひとり家にあり、二人の娘の位牌を前に、創作に関する抱負を語ったという。

藤村が悲しみのなかで作詩し、前田久八によって作曲された学院校歌は1907年3月の4教授勤続25年祝賀会の席で文学会会員によって改めて披露され歌われるに至った。そして大正期には盛んに愛唱されるようになった。



晩年の藤村  
Tosen in his later years



人の世の若き生命のあさぼらけ  
学院の鐘は響きてわれひとの胸うつところ  
白金の丘に根深く記念樹の立てるを見よや  
緑葉は香ひあふれて青年の思をつとふ  
心せよまなびの友よ新しき時代は待てり  
もろ共に遠く望みておのがじし道を開かむ  
霄あらば霄を窮めむ壤あらば壤にも活きむ  
あゝ行けたゝかへ雄々しかれ  
眼さめよ起てよ畏るゝなかれ

## 藤村自筆の校歌 The School Song draft of Tosen's own handwriting

この校歌は、ワイコフら宣教師や神学生の指導で大いに歌われた。郷司浩平は回顧録のなかで校歌について「藤村の詩の中でも、小諸の詩に匹敵する大傑作だと思う。のみならず、全国の校歌の中でも最も優れたものだと思う。昔の中学校の校歌などは、どれも説教的なもので、若者の琴線にふれるようなものはなく、旧制高校の寮歌なども、内容は空疎で、詩としては概ね駄作だ。そこへいくとわが藤村の詩は、ぐっと芸術性が高い。少年の私は、この校歌を口ずさむごとに、いわゆる立身出世主義をこえた高い精神を鼓舞されたものだ。」と絶賛している

## 前田久八 Kyuhachi Maeda

作曲者前田久八は卒業生ではなく、1874年生まれのパイアニスト。東京音楽学校卒業後、当時の楽壇で大活躍をした。北京中学で教鞭を取っていたころの前田久八は非常に礼儀正しく几帳面であったが、生徒をよく躰け、心から可愛がったという。1943(昭和18)年名古屋で亡くなった



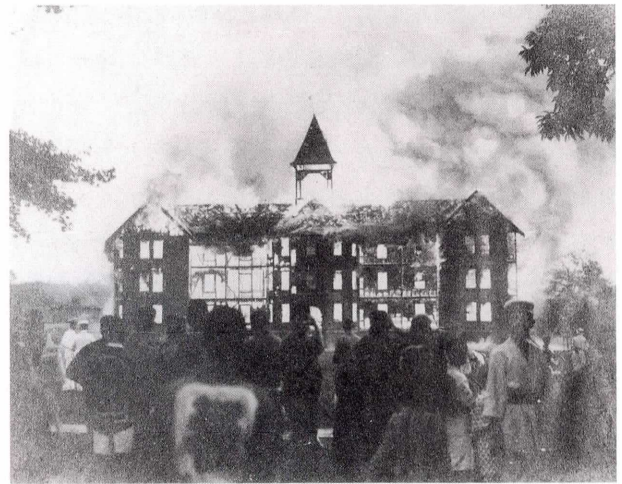
## 2 明治期の終焉

Toward the end of the Meiji period

1911(明治44)年9月21日、ヘボン館焼失

In September 1911(Meiji44), Hepburn Hall burned down.

9月21日朝、突如ヘボン館から火を發した。火は折からの初秋の風にあおられて、1階から2階、3階へと広がり、さらに隣接のハリス館に飛び火し、鎮火したのは午前7時頃だった。そして、その赤煉瓦の土台の余熱の去らないうちに、外務省に届いた電文に「ヘボン博士、9月21日朝死去せり」とあった。この日ヘボン博士は96歳で、米国イースト・オレンジにて昏睡状態の後、息をひきとった。



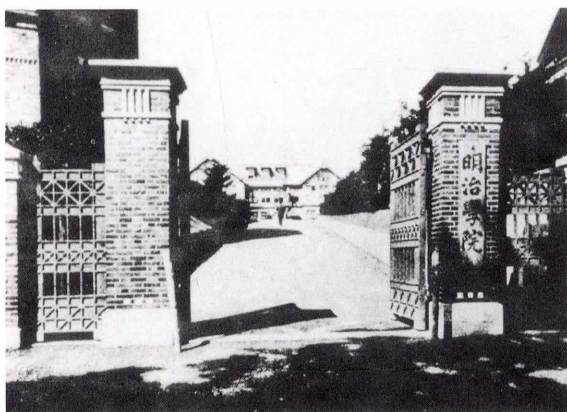
炎上するヘボン館 Hepburn Hall on fire



ミラー館記念講堂 Miller Memorial Auditorium



類焼するハリス館 Hepburn Hall fire spreading to Harris Hall



ミラー記念講堂と当時の正門

Miller Memorial Auditorium and the front gate in those days

ミラー記念講堂、またはミラー記念礼拝堂は現在のチャペルが建築される前の礼拝堂であった。また当時正門は現在の国道側(旧中学部校舎正面、次ページ写真参照)にあった



明治末期の神学部教授陣

Theological Department teaching staff toward the end of the Meiji period

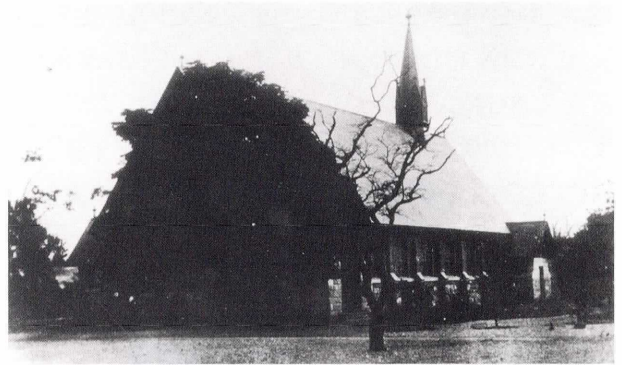
明治学院は専門学部、邦語神学部、普通学部の3学部で成り立っていたが、なかでも日本のキリスト教の中心的存在は神学部であった

# 3 明治学院のシンボル・チャペル

Meiji Gakuin's symbolic Chapel

1916(大正5)年3月、ヴォーリス建築設計事務所設計による新礼拝堂献堂式挙行。

ミラー記念礼拝堂が2回の地震で破損し、生徒の唯一の集会場であったサンダム館が焼失したため、礼拝堂と高等学部校舎の建設が急がれ、1916年3月に落成した。その後大正末期に両袖が設計者ヴォーリスによって拡張され十字架形となった。建築資金はセベレンス父子によるところが大きい。

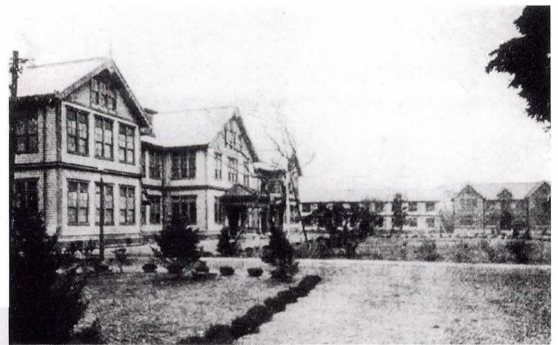


建築された直後のチャペル Newly built Chapel

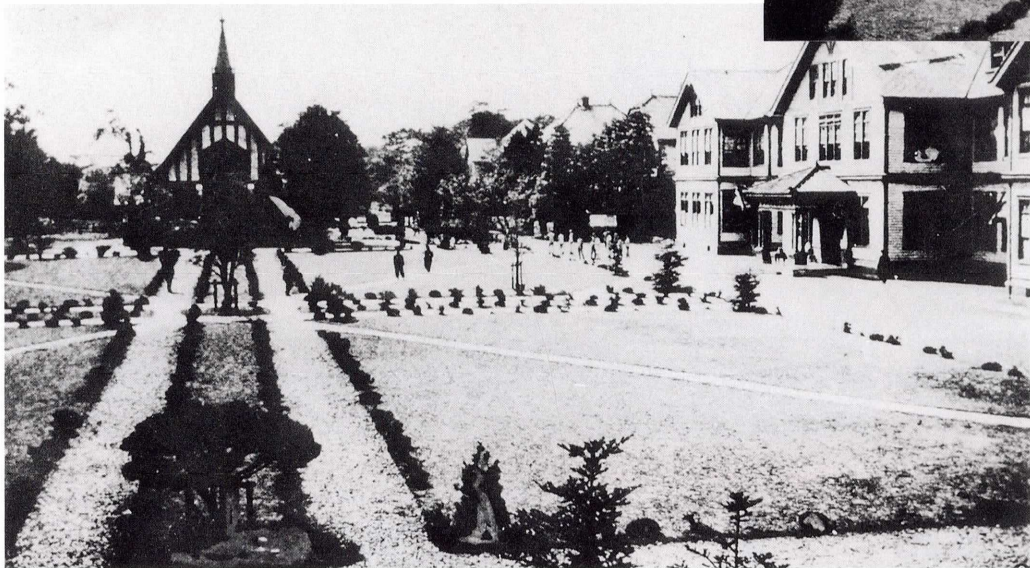
## 大正期の学院風景と配置図

Meiji Gakuin Campus in the Taisho period

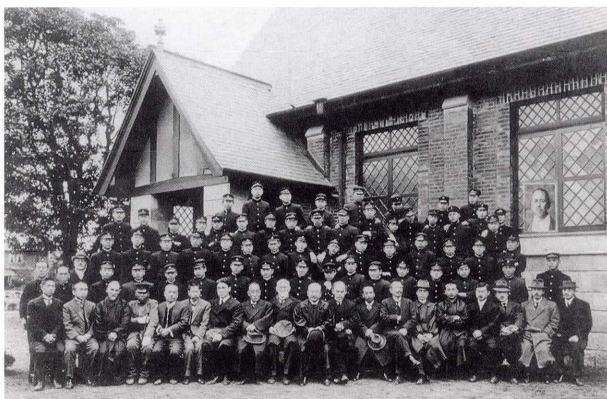
1915年、普通学部は中学部と改称された。中学部校舎の横に、新ヘボン館と称する小規模の2階建ての寄宿舍ができた。しかし1940(昭和15)年、中学部校舎新築のため取り壊された。1966年、同じ敷地に鉄筋コンクリート12階のヘボン館が建築された。



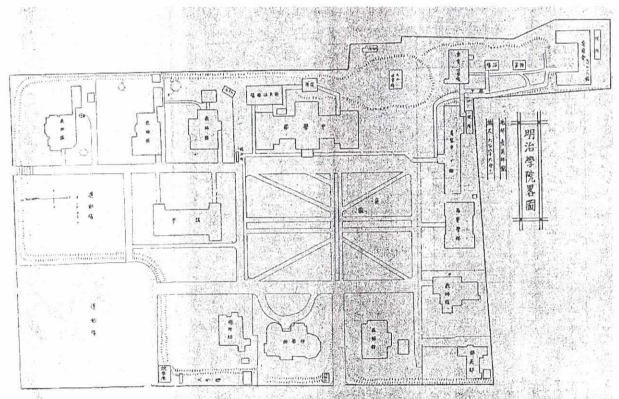
1917年当時の中学部教室、新ヘボン館、高等学部校舎  
Middle School classroom, the new Hepburn Hall and Academic Department School Building (c.1917)



大正期の学院風景 チャペル前に広場と特徴的な道が作られていた Campus landscape in the Taisho period



1917年の中学部教職員および中学生 写真中央は井深梶之助 Middle School teaching and clerical staff in 1917, Kajinosuke Ibuka, president, at front center



上の写真当時の学院見取図 Contemporary Sketch of the Campus

# 4 賀川豊彦と社会運動

Toyohiko Kagawa and the social movement

賀川豊彦(1888年7月10日～1960年4月23日)

社会事業家、伝道者。1904(明治37)年徳島でマイアースから受洗し、彼について明治学院神学部予科に入学。神戸に神学校ができ、マイアースについて神戸神学校に入学し、1911年同校卒業。

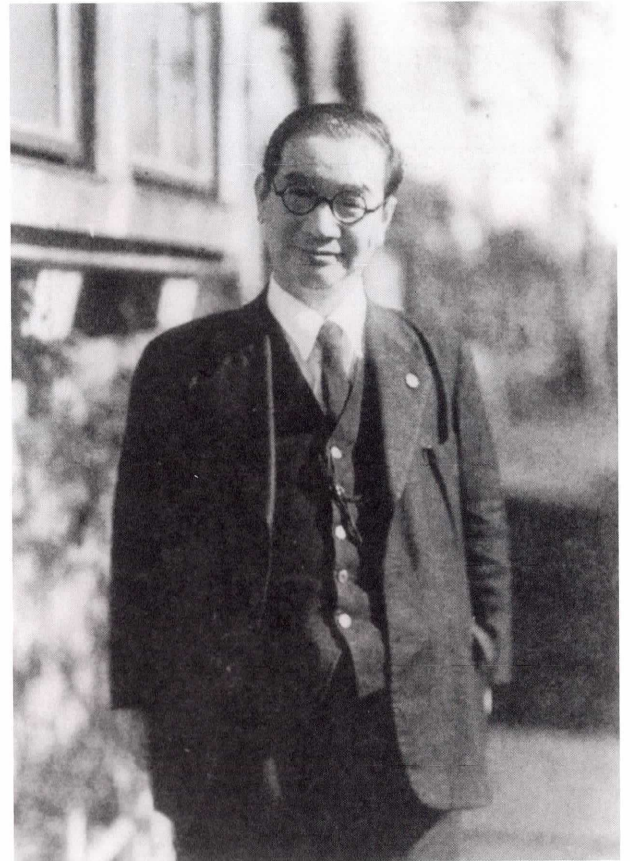
1909年以降神戸新川のスラム街に居住し、伝道と隣保事業に従事。1914(大正3)年プリンストン大学留学、1917年帰国後新川で労働組合運動に参加、争議の指導、労働者の人間解放に努力した。

さらに消費組合運動、農民組合運動でも指導的役割を果たす。その後宗教活動に重点を置き、農民福音学校、神の国運動を推進し、海外諸国に伝道講演に出た。1940(昭和15)年反戦論者として東京憲兵隊に検挙されたりもした。

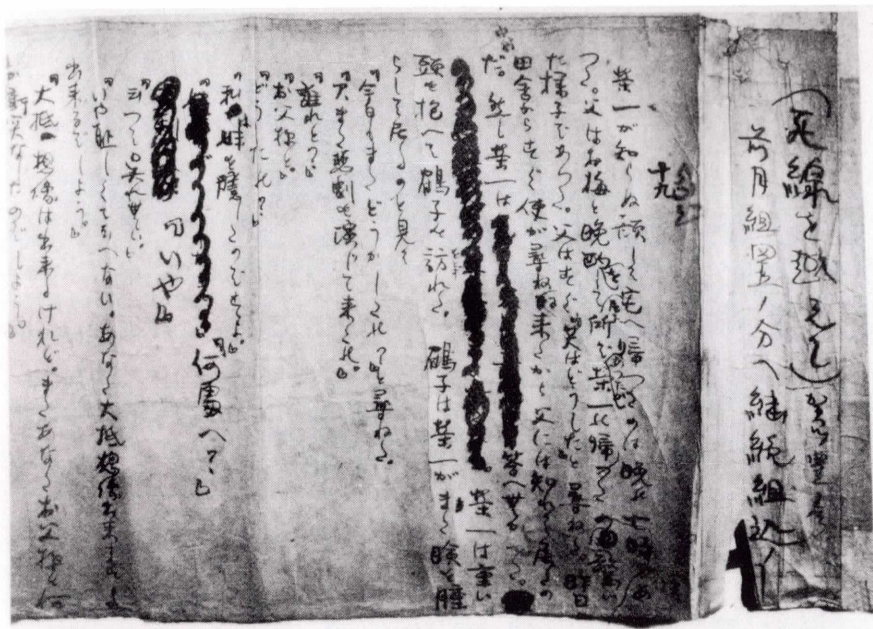
戦後、日本社会党の結成、新日本建築キリスト運動、世界連邦運動など活動を続けた。自伝的小説『死線を越えて』は今も広く読まれている。

賀川は学生時代明治学院図書館の本をほとんど読んだといわれている。そして図書館の書物から最も影響を受けたことを記念して、蔵書1万卷を学院図書館に寄贈し、現在賀川文庫(松沢記念館)となっている。

賀川は明治学院理事として学院の経営に参画したほか、大学教授として協同組合論の集中講義を行った。そして俸給はすべて学生の懸賞論文の賞金(奨学金)とした。



賀川豊彦 Toyohiko Kagawa



1920年賀川豊彦『死線を越えて』を『改造』に連載

Beyond the Death Line, an autobiographical novel by Toyohiko Kagawa, was serialized in the magazine Kaizo(1920)



# 5 神学部の移転

Separation of the Theological Department

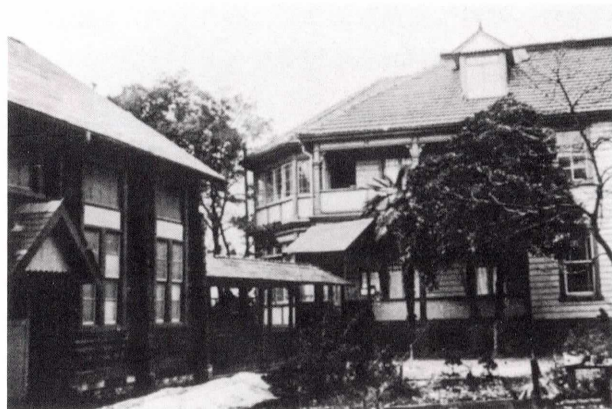
移転の理由は白金校地が狭くなったということだけでなく、東京神学社(植村正久設立)との合併の布石でもあった。1930(昭和5)年、神学部は学院から分離し、東京神学社と合併して日本神学校が設立された。日本神学校は後に東京神学大学となった。



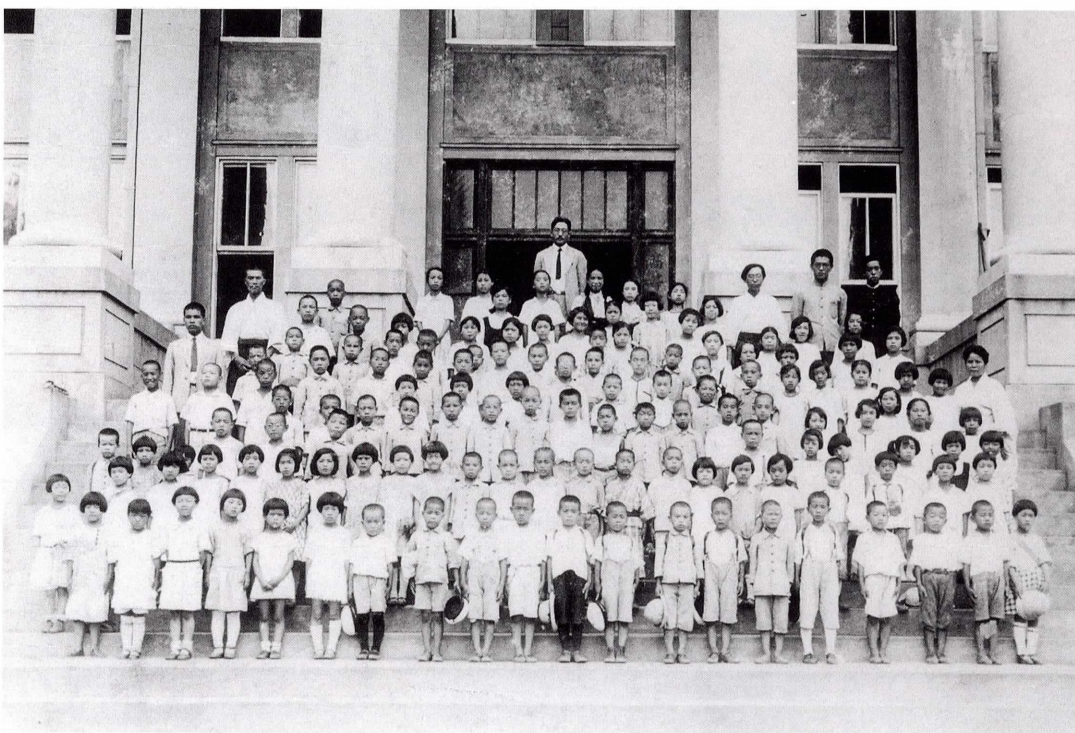
1924年頃の野球部 このころ「明治」の校名は「明治学院」を指していた *Baseball team (c.1924)*



神学部教授と学生たち *Theological Department faculty and students*



1924年神学部角筈(新宿)に移転 *Theological Department in Shinjuku*



1927年の夏期学校(1925年に落成した井深ホール前) *Summer school for children (1927)*

1923(大正12)~1940(昭和15)年児童夏期学校が開催された。

周辺地域への教育的伝道をめざした奉仕活動で、学院教師、学院生のほか教職員子女、近隣教会女子会員らも加わった

# 6 苦難の道

Struggling on a thorny path

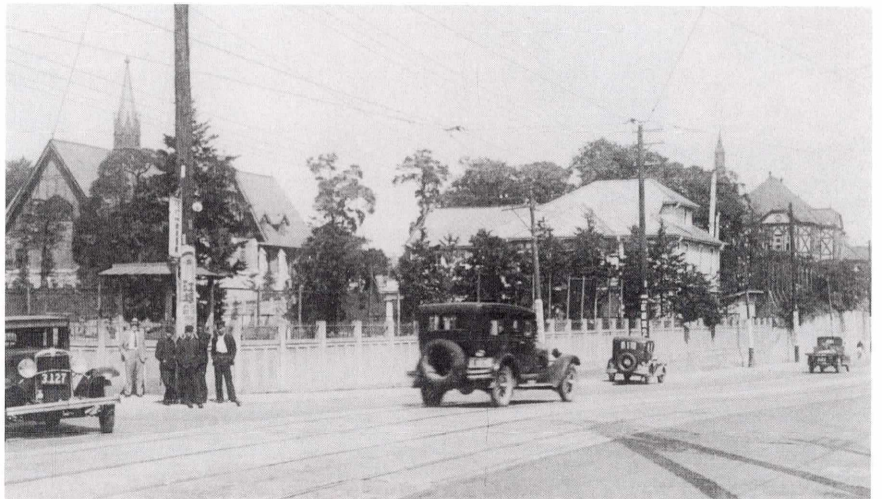
1931(昭和6)年「白金学生消費組合」が設立された。1927年に消費組合は設立されたが、一般小売商の出張販売と化し市価と変わらなかった。このような状況のなかで消費組合改革の声が学生から高まり学生消費組合が設立された。しかし参加学生の一部が左翼運動で検挙され、一般学生出入り禁止となり財政赤字で解散した。



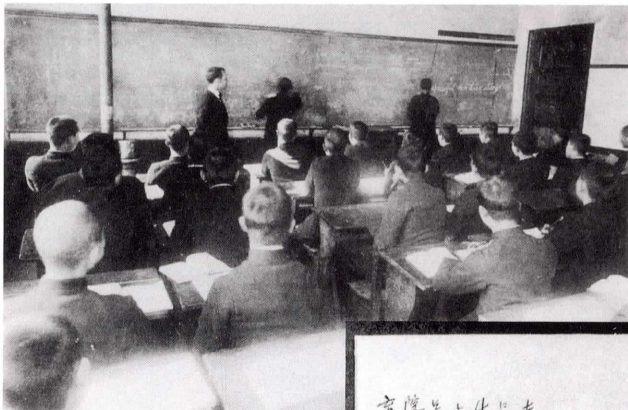
1925(大正14)年4月、田川大吉郎第3代総理就任 Daikichiro Tagawa, the third president



化学実験風景 (1928年) Chemical experiment



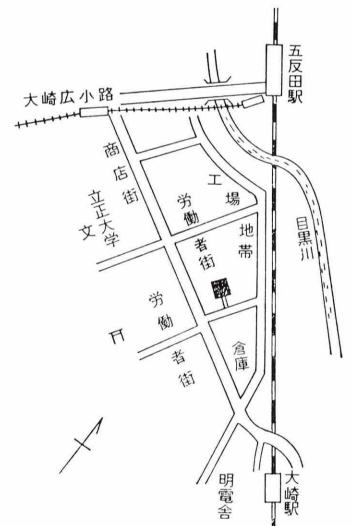
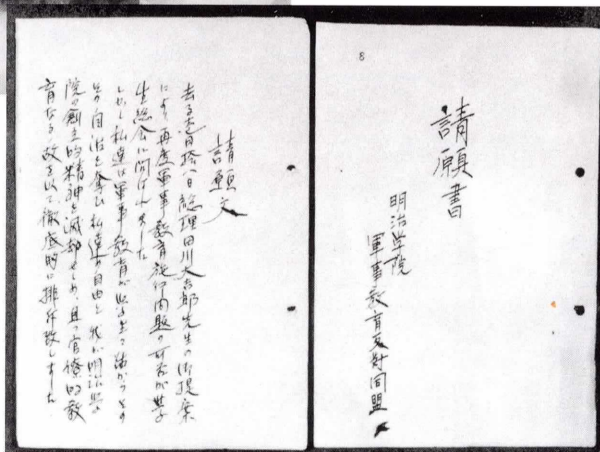
1927(昭和2)年8月、学院前に市電が開通し「二本榎明治学院前」の停留所ができた。Streetcar stop



中学部教室風景 (1928年)  
Class scene in Middle School

高等学部及び高等商業部に軍事教練実施。教練に反対して高等学部生徒が田川総理に出した請願書(1928年)

Petition



1929年、高等学部社会科学学生セツルメント開設

Neighborhood map of "Settlement"

当時 Kommunismus の台頭により社会意識が高まっていた。

五反田駅と大崎駅の中間の労働者街に建物を借り、子供会、日曜学校などが行われ、1934年閉鎖された

1930(昭和5)年、A.オルトマンズ隠退帰国

*In 1930, Dr.Oltmans returned to America.*

元東山学院院長、明治学院神学部教授(1926年3月辞任)、総理事務取扱、アメリカ改革派教会の宣教師、昭和14年11月学院構内住宅で召天。

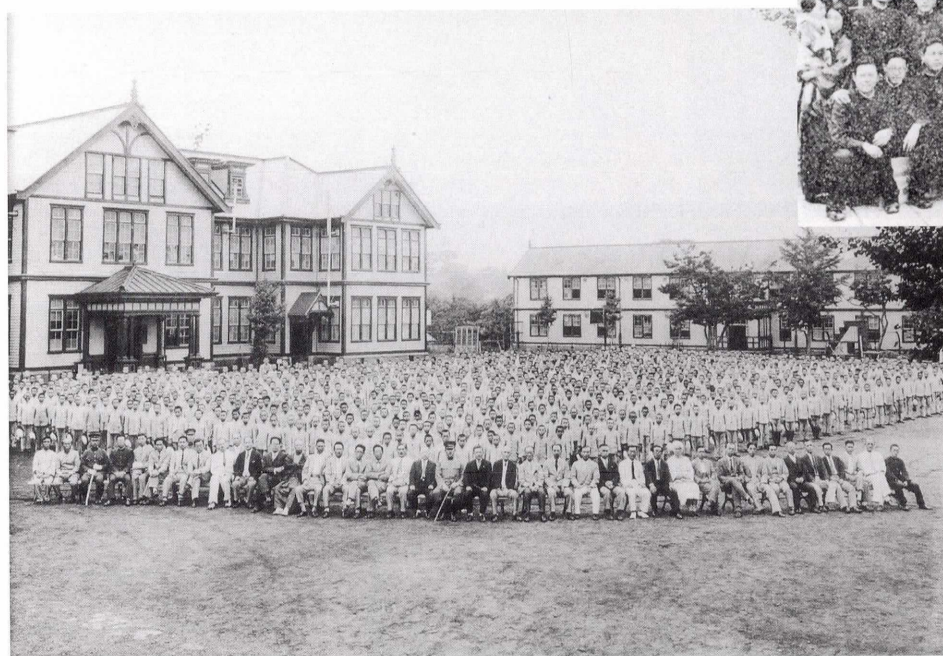


オルトマンズ  
*Dr. Albert Oltmans*



オルトマンズ夫妻帰米記念会 *Farewell photo in honor of Dr.Oltmans*

白金学生消費組合  
前列右から二人目が創立者大田恒弥  
*The first Shirokane students' cooperative store*



1931年、中学部校舎と中学部教職員  
*Middle School faculty and students(1931)*

# 7 東山学院合併と白金校地

Merging into Tozan Gakuin and Shirokane Campus

1932(昭和7)年、東山学院中等部は、明治学院に合併され、翌年最後の卒業生を送り出して閉校する。

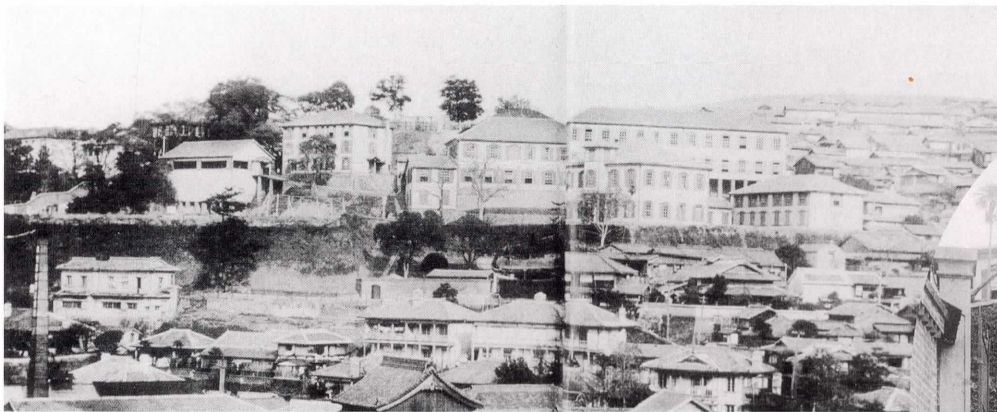
東山学院は1887(明治20)年長崎に設立された。しかし米国リフォームド・ミッションの活動状況調査による勧告で日本における事業集中のため、密接な関係にある明治学院と合併することとなった。

ホキエ院長ほか数名の教職員、教務庶務書類、図書、標本、実験機器などが明治学院に移管された。

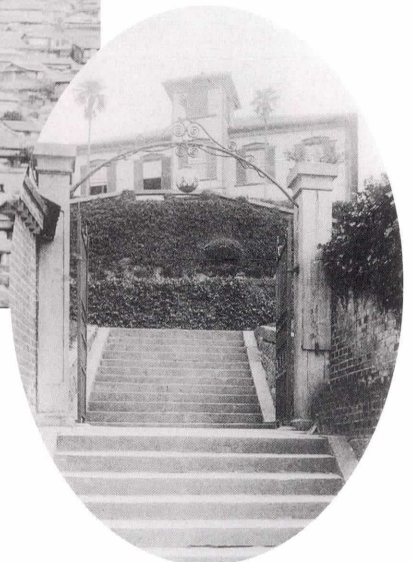


東山学院校舎 (現在グラバー邸裏に保存されている)

Tozan Gakuin School Building



長崎にあった東山学院全景 Overall view of Tozan Gakuin in Nagasaki



東山学院正面

The front gate



創立55周年の大運動会での各クラブデモンストレーション(1932年)

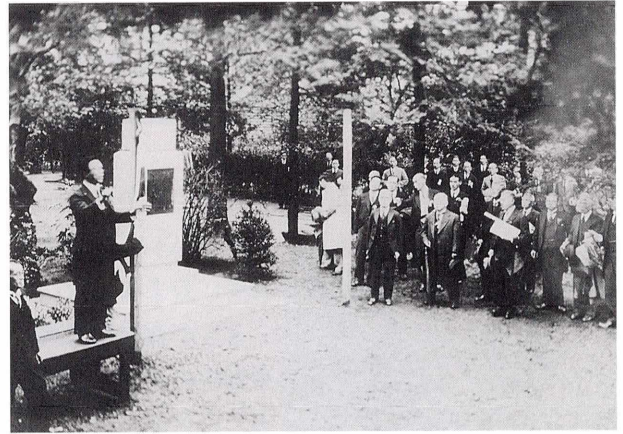
Various demonstrations seen at the Sports Festival commemorating the 55th Foundation Anniversary

日の丸を掲げたマスゲーム Mass game putting up the national flags of Japan  
当時の敷地は運動会が開けるほど広がった。仮装行列、デモンストレーション、マスゲームなどが行われた。学生、生徒の創造性、批判精神は旺盛であったが、だいに全体美、様式美が追求されるようになった

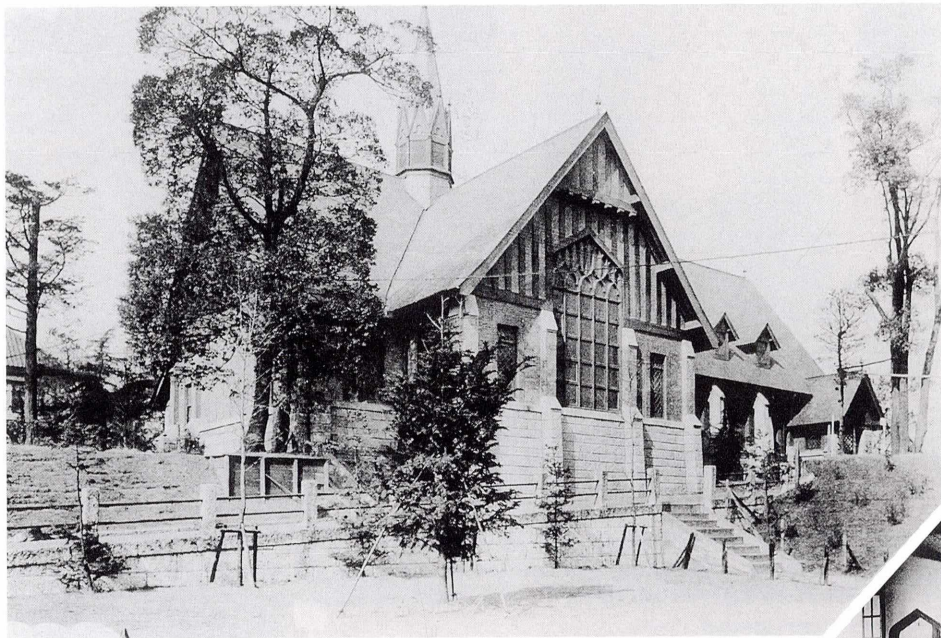




1933年頃の明治学院井深ホール（1925年3月、井深ホール落成）  
I buka Hall (c.1933)

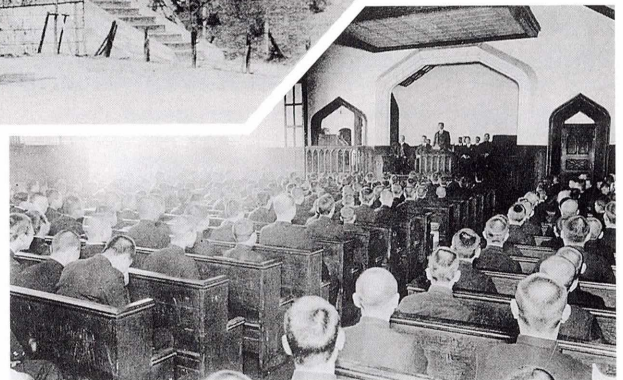


1937年11月、創立60周年記念式挙行、島崎藤村自筆校歌碑建設  
Celebration of the 60th Foundation Anniversary. Erection of the School Song Memorial featuring Toson Shimazaki's own handwriting



1933年頃の礼拝堂 Chapel (c.1933)

礼拝堂内部 Chapel inside



学生セツルメント、子どもたちと学生  
Establishment of secondary "Settlement" by students

簡易診療所開設、失業者救済、夜学校・日曜学校開催などを目的として始まった学生セツルメントは、学院会計赤字のため、1934年閉鎖されたが、1936年第2次学生セツルメントが開設された。しかし共産主義活動であるとのレッテルで1937年6月閉鎖された



学生セツルメント、日曜学校 Students' "Settlement work"

# 8 昭和初期のころの通学風景

*School scenes in the early Showa period*

## 1933(昭和8)年頃の通学風景

白金校地への通学路の中心駅は品川駅、五反田駅、目黒駅であった。このほか国道1号線に沿って市電が走り、二本榎停留所があり、学院生徒の多くが利用していた。

1934年に愛国報国機「大学高専号」の航空機献納が行われた。明治学院もこの趣旨に賛同し発起校の一つとして多額の献金をした。



通学バス Bus service



目黒駅周辺の朝 バスに乗り込む明治学院生

*Early in the morning around Meguro station*

二本榎停留所  
(東京市電が見える)

*Nihonenoki  
streetcar  
stop*



井深ホール前の石段を上る朝の風景  
*Students walking up the stone steps of Ibuka Hall*

# 9 「御真影」奉戴式

Reception Ceremony for the Imperial portraits

「御真影」(天皇、皇后の写真)の下付に関しては「奉安する適当な場所がない」としてのびのびになっていた。しかしホキエ院長事務取扱は文部省から再三にわたり注意を受け、ついに礼拝堂の東南の一角を改造して「奉戴」することとなった。文部省は「御真影」は外国人に手渡すことはできないとして、ホキエ院長事務取扱に随行した加藤幹事に渡された。学院では学生を含め仰々しく出迎えた。

御真影を安置した礼拝堂の一角

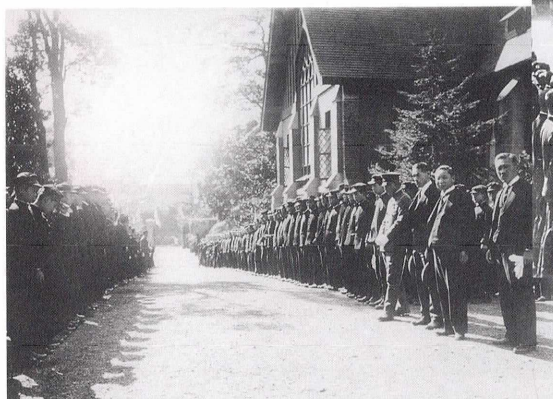
A Corner of the Chapel for installing "Goshinei" (the Emperor and Empress' portrait)



1938(昭和13)年10月、御真影奉戴式

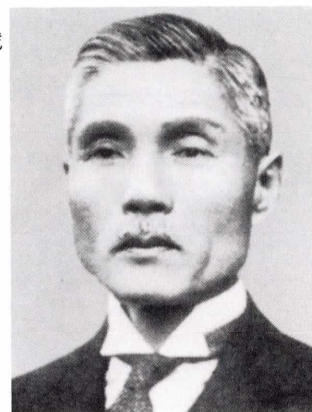
Receiving "Goshinei"

学生も整列して御真影を迎えた Students standing in lines



第4代学院長 矢野貫城

Tsuraki Yano, the fourth chancellor



神社に対する敬礼は「愛国心と忠誠」にほかならないとする文部省は学院にも神社参拝を要請し、学院の教師、学生も銃後後援強化週間や戦勝記念にことあるごとに明治神宮や靖国神社への参拝を繰り返した。神社参拝とキリスト教が学院にも個人にも共存していた。

1938年の卒業アルバムには軍事教練とキリストの中表紙が載せられている

A picture of Christ and an account of Military training seen in the 1938 graduation album



クリスマス生誕劇 Christmas play



# 10 戦時体制への協力

Cooperation with the wartime regime

学院でも中国戦線などの戦場の兵士に手紙や物資を入れた「慰問袋」が集められ送られた。



慰問袋をトラックに積み込む

Comfort bags sent from Meiji Gakuin to soldiers in battle



慰問袋をトラックに積み込む Comfort bags

1938(昭和13)年、文部省は学生、生徒が勤労奉仕することを決定し、1939年からは正課となった。明治学院では実施しなかったが、1941年12月8日の太平洋戦争勃発以降、政府の命令で勤労奉仕、勤労動員に協力せざるを得なくなった。



勤労奉仕をする学院生 Students serving by contributing physical labor



皇居のお堀を清掃する学院生 Students cleaning the moat of the Imperial Palace

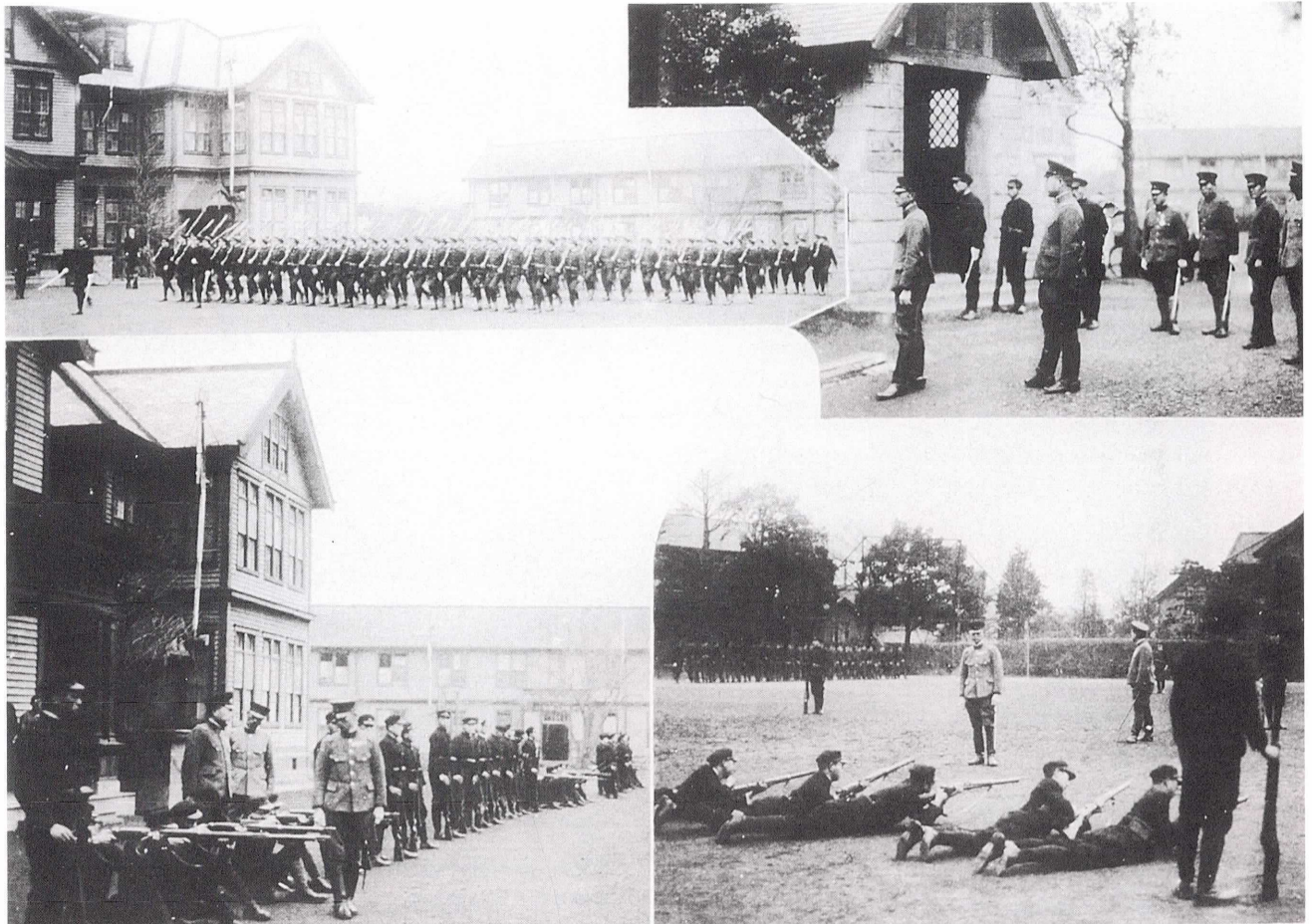


# 11 軍事教練と戦時体制

Military training and the wartime regime

1925(大正14)年中学部に軍事教練の実施が命じられ、学院も実施したが、高等学部では1926年学生協議会がこれに反対し、延期になっていた。

しかし実施していない学校は上級学校への進学が不利になるため、しだいに学生側も実施を望むようになり、1928年から実施されるようになった。

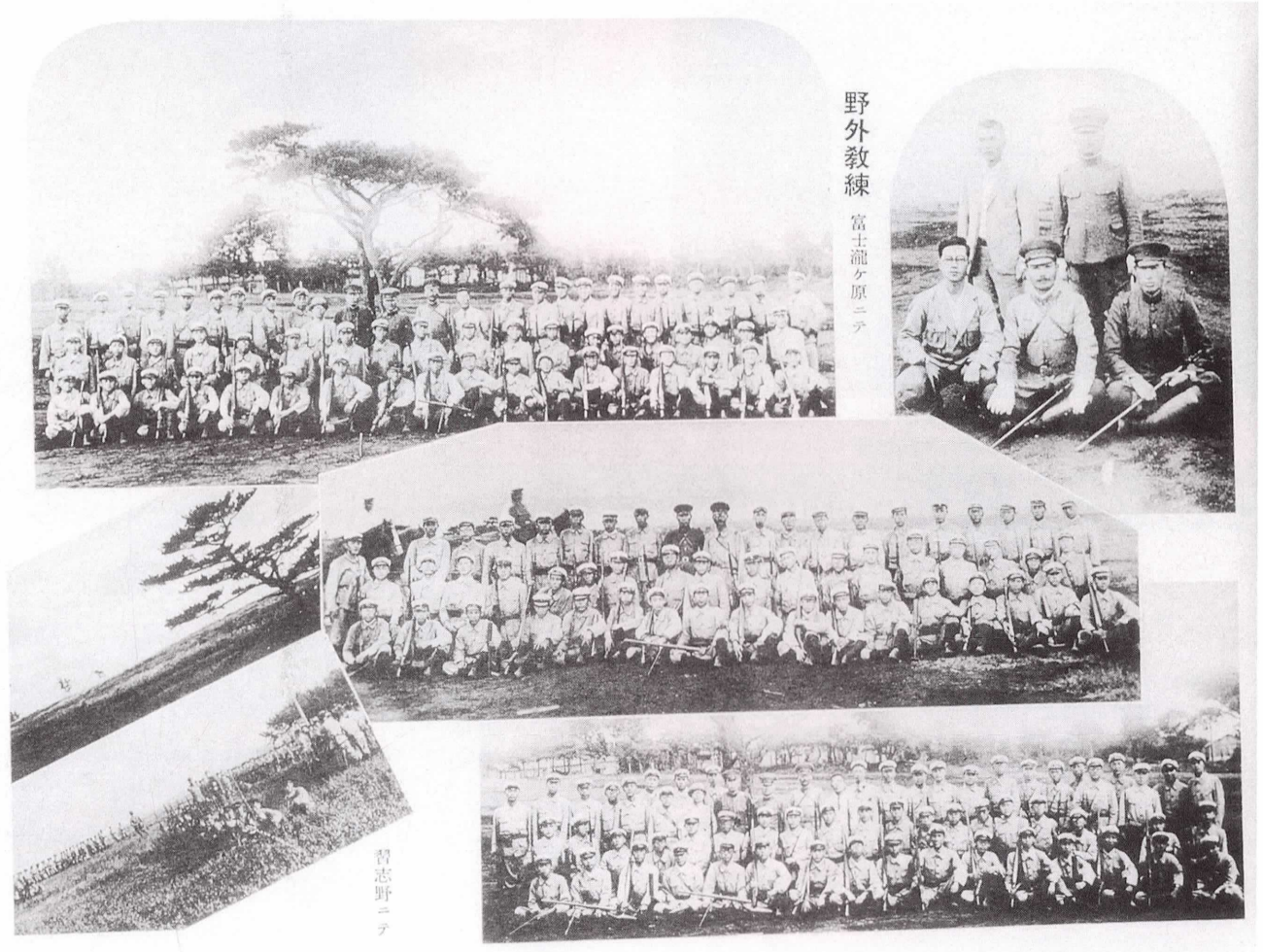


校庭での軍事教練の様子(卒業アルバムより) Scenes of military training on the grounds

明治学院でも「日の丸」掲揚が行われるようになった  
Hoisting "Hinomaru"(the national flag of Japan)  
in Meiji Gakuin Campus



軍事教練はやがて校内だけでなく野外軍事演習に拡大していった。下志津(習志野)、富士の裾野などの演習は激しく、また南京虫などにも悩まされたという。



野外軍事教練に参加する学院生 (卒業アルバムより) *Students participating in field exercises*



野外軍事教練に出発 (井深ホール前) *Departure for military training*



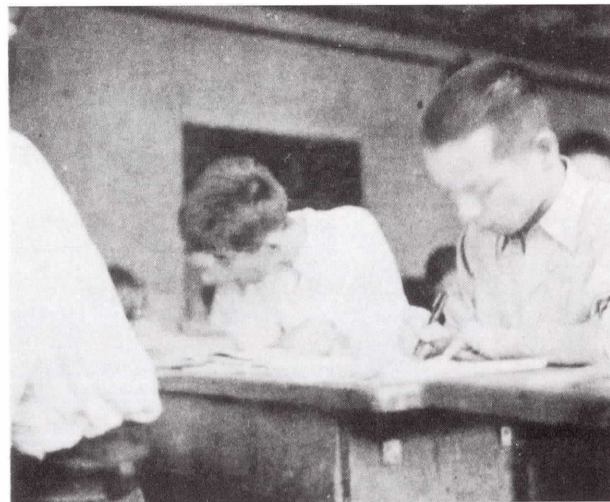
野外でのスケッチ (卒業アルバムより) *A field sketch*

戦時体制のなかにあっても、学生は批判精神とユーモアに満ちていた。卒業アルバムには、教員室を「学院の心臓」と書きつつも、「何ニヲ考エテイルヤ

ラ」などと書いている。また生徒課についても「ココハダレデモキライドス」などと書いている。



ヤマはどこだ Making guesses



サテサテ何を書いている What on earth are they writing?



当時の卒業アルバム Graduation album during the war

1945(昭和20)～1977(昭和52)年

IV

# 目覚ましい発展

Postwar Developments at Meiji Gakuin

戦後の復興期を迎え、学院ではいちはやくその拡張策が取り上げられた。新学制により中学、高校を整備し、また明治学院大学の設置が認可された。当初文経学部という1学部で発足した大学も文、経、社、法の4学部を擁するようになり、また大学院も設置され、これに伴い校地、建物も拡充されていった。

高校は東村山にさらに1校開設され、のちに中学もここに移転し、中・高の一貫教育が行われるようになった。この期における学院の発展は目覚ましく、共同体として学院2世紀への基盤が着々と整えられていった。



ヘボン館を背に創立90周年記念式典 The 90th Foundation Anniversary

年	明治学院事項及び一般事項
1947(昭和22)	・創立70周年式典を行う ・日本国憲法施行
1948(昭和23)	・村田四郎が第5代学院長に就任 ・新学制により明治学院高等学校を設置
1949(昭和24)	・明治学院大学の設置が認可された。文経学部(英文学科、社会学科、経済学科)第一部、第二部を開設、村田四郎が初代大学院長を兼任 ・湯川秀樹にノーベル賞
1950(昭和25)	・日本商科大学を本学に併合 ・朝鮮戦争勃発、特需景気始まる
1951(昭和26)	・サンフランシスコ講和条約調印 ・日米安保条約調印
1952(昭和27)	・中学と高校が分離、大学は文学部、経済学部に分かれ2学部となる
1953(昭和28)	・高等学校山中寮完成
1954(昭和29)	・大学旧図書館が落成
1956(昭和31)	・国連への加盟が承認される
1957(昭和32)	・大学日本館落成 ・都留仙次が第6代学院長に就任 ・創立80周年記念式典を行う。「明治学院八十年史」出版 ・ソ連人工衛星打ち上げに成功
1959(昭和34)	・中学校校舎落成 ・安保改定阻止運動起こる
1961(昭和36)	・大学第一部入学定員440名に増員(従来は330名) ・エドウィン・O・ライシャワー米大使就任
1962(昭和37)	・武藤富男が第7代学院長に就任
1963(昭和38)	・大学2号館、3号館落成 ・明治学院東村山高校開校 ・ケネディ米大統領暗殺される
1964(昭和39)	・新幹線開通 ・東京で第18回オリンピック開幕
1965(昭和40)	・社会学部(社会学科、社会福祉学科)が独立し、文学部にフランス文学科を設置 ・日米間に教授と学生の交流を開始
1966(昭和41)	・中学校、東村山へ移転開始 ・法学部(法律学科)第一部、第二部を設置 ・大学6号館、ヘボン館落成
1967(昭和42)	・創立90周年式典を行う ・「明治学院九十年史」出版
1968(昭和43)	・全国的に大学紛争広がる
1969(昭和44)	・「白金通信」創刊
1971(昭和46)	・沖縄返還協定調印
1973(昭和48)	・大学入学志願者2万名突破 ・オイルショック、円が変動相場制に移行
1974(昭和49)	・東村山に体育館完成 ・高等学校新校舎完成
1976(昭和51)	・一般教育部独立
1977(昭和52)	・島村亀鶴が第8代学院長に就任 ・創立100周年式典を行う ・「明治学院百年史」出版

(太字は当学院関係)

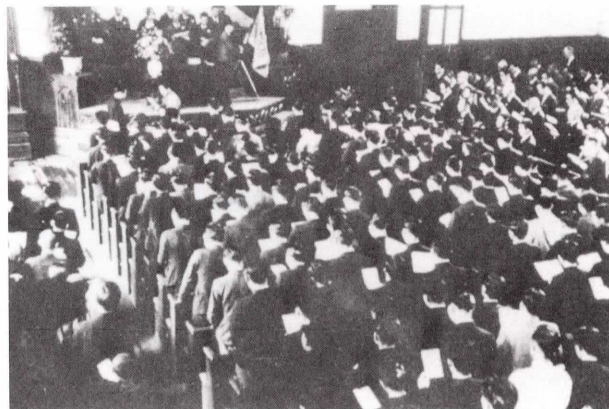
# 1 明治学院大学の開設

*The opening of Meiji Gakuin University*

戦後ただちに学院拡張策が中心課題として取り上げられ、専門学校を新制大学として昇格させる方針が確立し、1949(昭和24)年大学設置が認可された。

当初は、第一部、第二部とも英文、社会、経済の3学科を擁する文経学部という単一学部で発足した。学生数は、第一部538名、第二部376名であった。

入学式において村田学長は「真理の喜ぶところを喜び」(コリント人への第一の手紙前13:6)という聖句こそ学院大学の目指す理想であると説いた。



大学開校式 (1949年) *University opening ceremony in 1949*

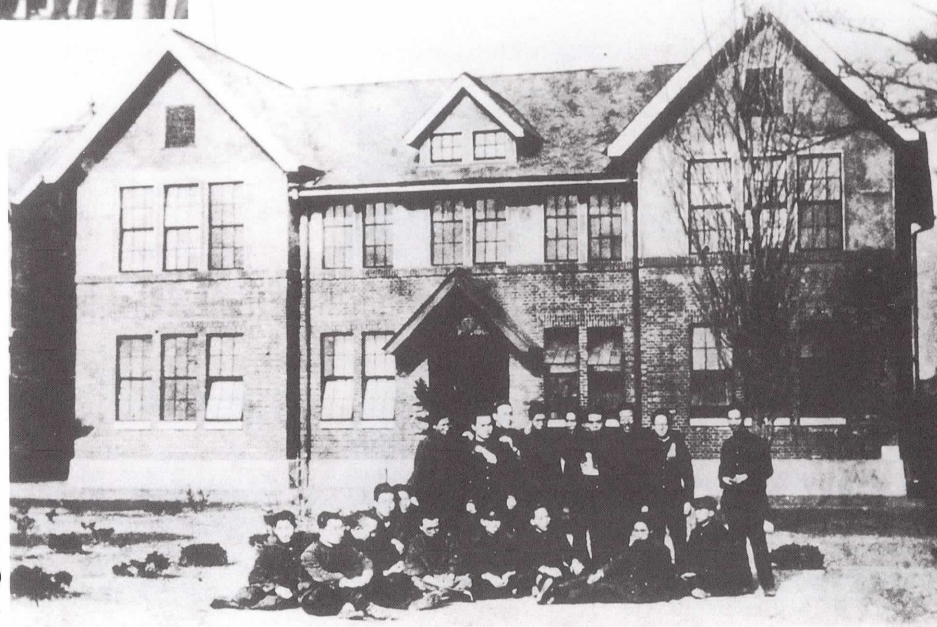


創立70周年で賑わう正門付近(1947年)

*The 70th Foundation Anniversary*



大学開校祝賀会 (1949年) *University opening celebration party*



大学設置とともに新しく建てられた科学館の前でくつろぐ学生たち(1950年)

*Students relaxing in front of the newly established university's Science Hall*

校地の拡充とともに大学校地となった白金海軍墓地

*The adjoining Naval Cemetery being cleared after purchase with financial help of American churches*



富士を望む山中湖畔の大学湖北寮

*Meiji Gakuin's Lodge at Lake Yamanaka with a commanding view of Mt. Fuji*

大学教育の大衆化は高等教育の普及とともに大学教育の「マスプロ」化をもたらした。これへの対応策として、1957年にアドバイザー制度が設けられた。教員と少人数の学生、また学生同士が人間的に触れ合う「共通の広場」として毎年「湖北寮」がつかわれた



三光町のセベレンス館を大学女子学生寮に(1953年)

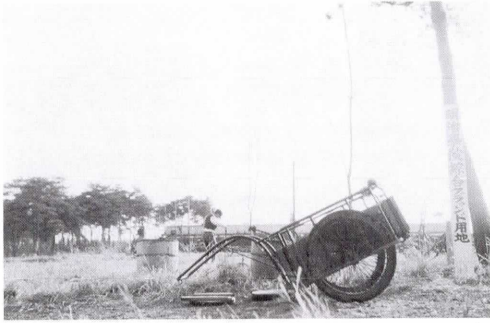
*Severance Hall, Girls' Dormitory at Sanko-cho. The former Dean of Women, Prof. Mari Okajima, at center front*

この女の園は明治学院大学の教育理念を基盤とした「自治寮」。学生と教職員たち



## 2 1950年代の学院生活

Student life in the 1950s



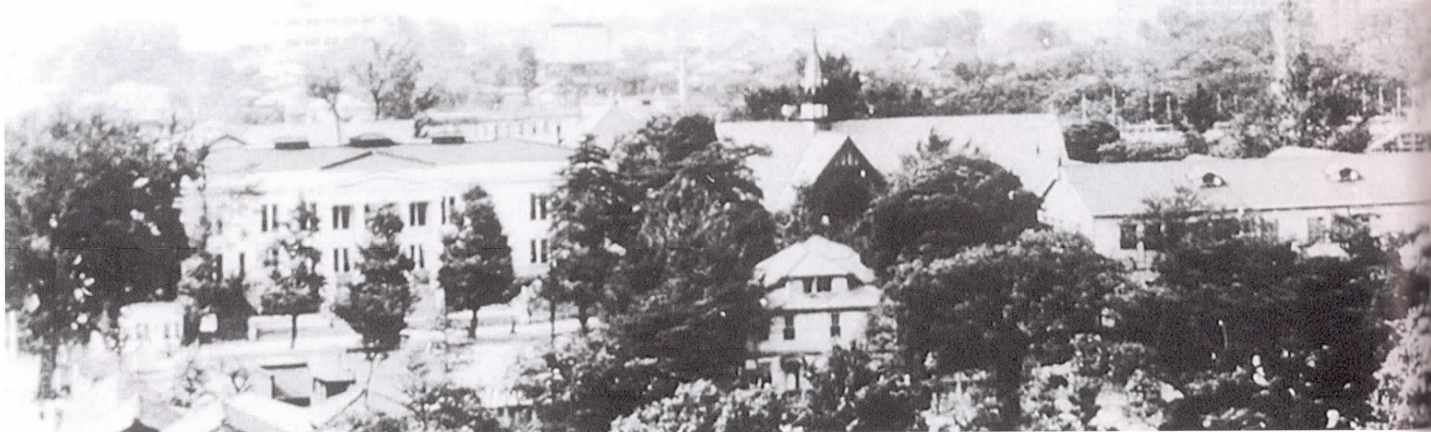
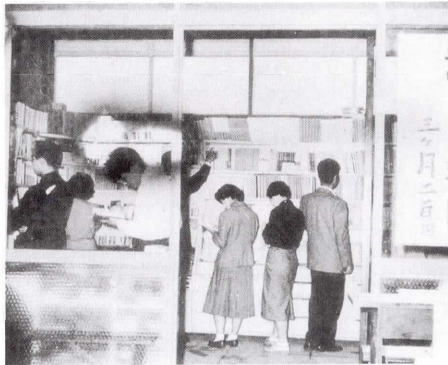
前年入手した東村山校地に桜の苗を植える(1956年)  
Planting cherry seedlings in Higashi Murayama School Ground



溝の口分校での中学職業科実習(1950年代)  
Junior High School vocational course practice at  
a branch school in Mizonokuchi(1950's)



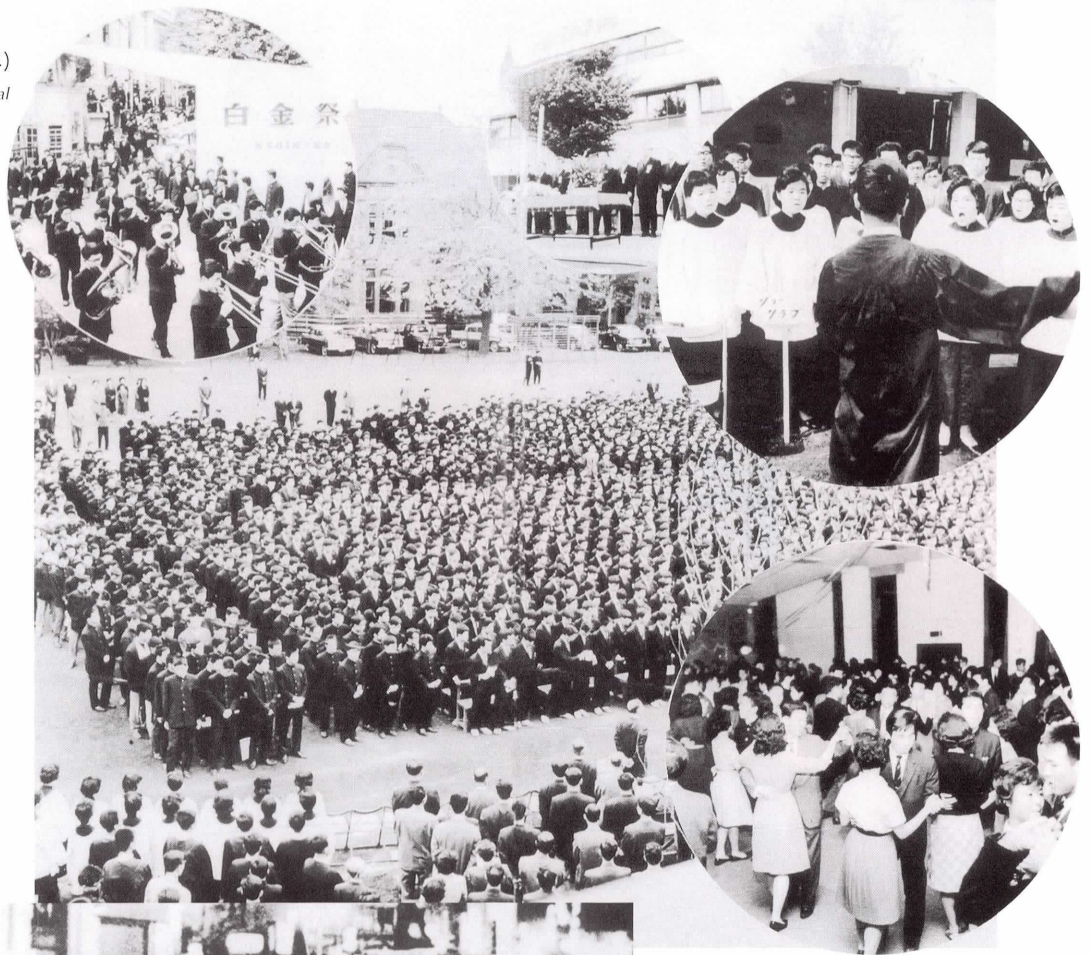
1950年代後半の学院生活風景 Various school life scenes in the late 1950's



# 3 | 1960年代(安保から大学紛争時)

University disturbances caused by the U.S.-Japan Security Treaty in the 1960s

新入生と白金祭 (1962年)  
Freshmen and Shirokane Festival

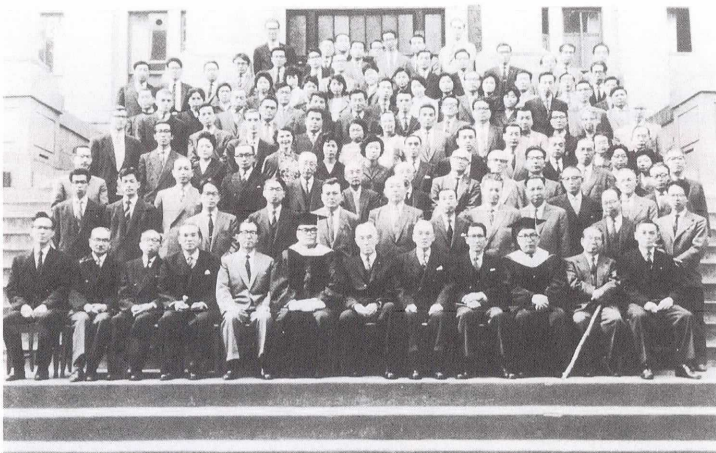


60年安保当時 学院生も街頭デモ (1960年)  
Meiji Gakuin students participating in a street demonstration against the U.S.-Japan Security Treaty(1960)



学院遠景(1958年) Distant view of Meiji Gakuin(1958)



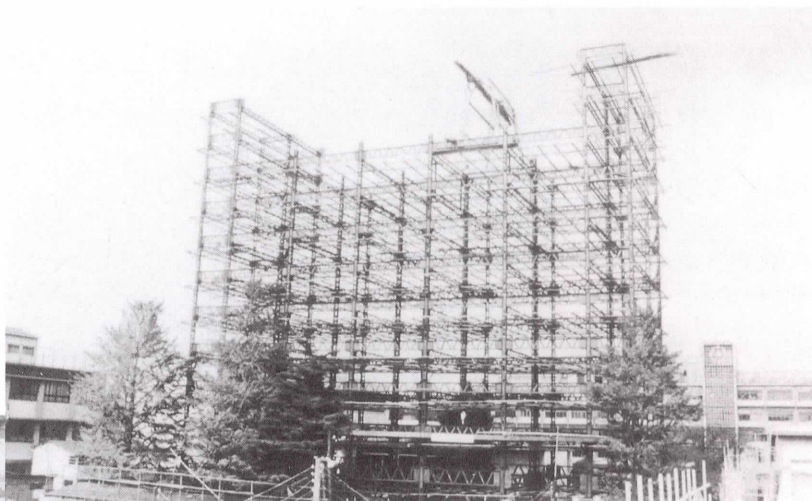


オーガスト・K・ライシャワー博士と学院勤務員 (1963年)  
*Dr.A.K.Reischauer and Meiji Gakuin staff (1963)*



チャペルに設置中のパイプオルガン (1966年)  
*Installing the chapel pipe organ (1966)*

建築中のヘボン館 (1965年)  
*Hepburn Hall under construction(1965)*



第1回日米教授学生交流計画でホープカレッジに  
 ついた大学生たち (1965年)  
*University students attending first Summer Session at Hope  
 College, Holland, Michigan, 1965*



駒沢競技場でのオール明学の体育祭 (1967年)  
*All Meiji Gakuin Sports Festival at Komazawa Athletic Stadium(1967)*



創立90周年の白金祭 (1967年)  
*The 90th Foundation Anniversary and Shirokane Festival*

1968(昭和43)年は大学における学園紛争が全国的な広がりを見せた年であった。それは日本だけでなく、ひとつの世界的な現象でもあった。その意味で、大学紛争は極度の管理化、合理化が行われ、人間の疎外された社会体制のなかで生まれた学生の反乱であった。

本学では「立看板撤去破壊事件」から始まった。



大学紛争中の学院(1968年)

Meiji Gakuin in University Disturbances(1968)



全学集会 Campus-wide meeting



破壊された研究室 Destroyed office



占拠、宿泊された会議室のあと Unlawfully occupied conference room



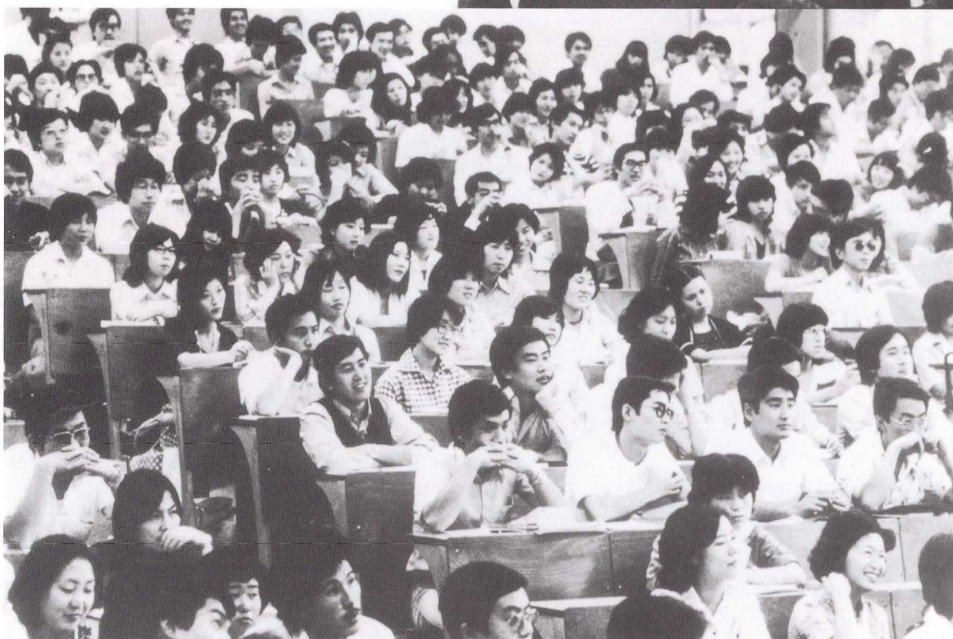
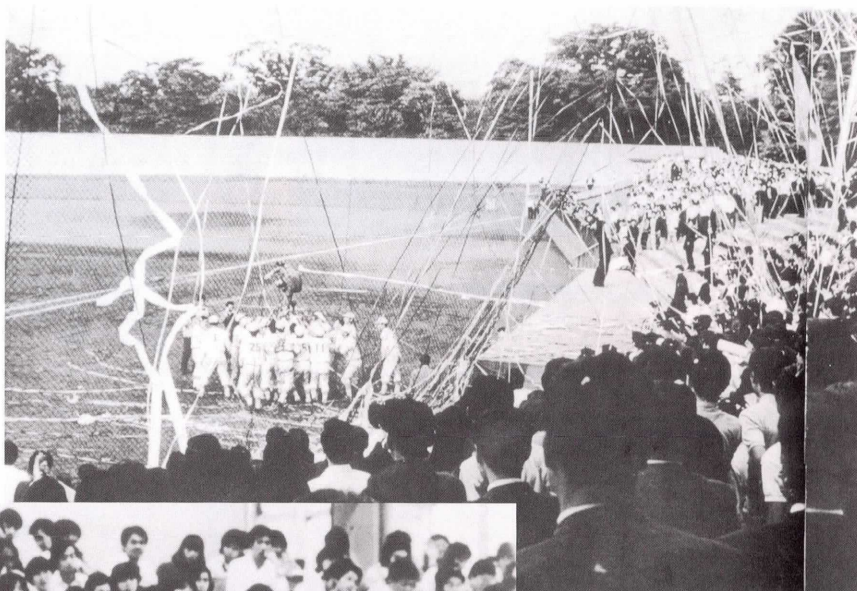
正門前  
The school front gate

# 4 | 1970年代(増大する学生と創立100周年)

*Increasing enrollments and the 100th Anniversary in the 1970s*

野球部首都リーグ春季優勝(1970年)

*Baseball team's victory in the spring league match of the Tokyo Metropolitan Universities*



就職説明会(1977年)

日本経済の高度成長に伴い、学生の就職活動も活発になる

*Employment explanation meeting*



学院から  
東京タワーを望む

*Campus night sight  
commanding a view of  
Tokyo Tower*

創立100周年を迎え、記念事業委員会の委員長である金井学長は、希望に満ちた第2世紀へ出発するにあたり学院の基本姿勢として次の3点を強調した。

1. 「建学の精神」を現代に問い直すこと
2. 学院教育のレベルアップを期すること
3. 全明学人の一致団結と和を図ること

巣立つ  
*Leaving the nest*



旧図書館で勉強する学生 *Students studying in the former Library*



創立100周年の正門アーチ (1977年)

*The main gate memorial arch celebrating the 100th Foundation Anniversary (1977)*

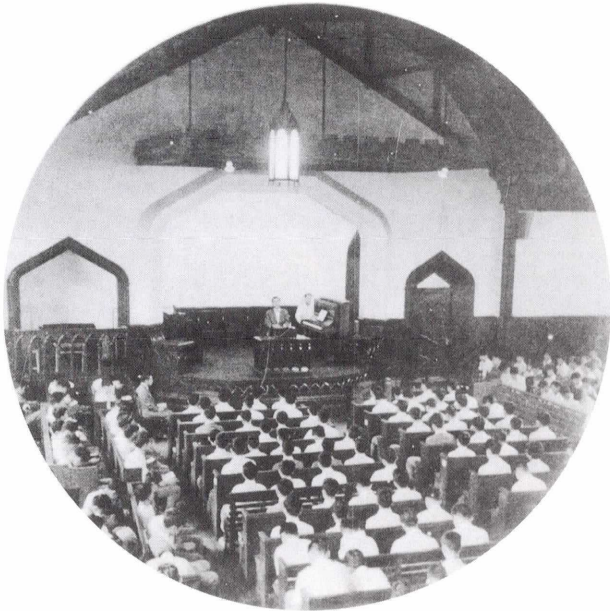


日比谷公会堂での創立100周年記念式典 (1977年)  
*The 100th Foundation Anniversary at Hibiya Public Hall*

# 5 | 1960年代(白金時代)の中学校

Junior High School in Shirokane period(1960s)

1959(昭和34)年に新校舎(後に大学4号館)が完成。  
登山帽子にブレザー、エンジ色のネクタイは目につく姿だった。



チャペルでの礼拝 (パイプオルガンが入る前の内部)  
Worship service in the Chapel before pipe organ being installed



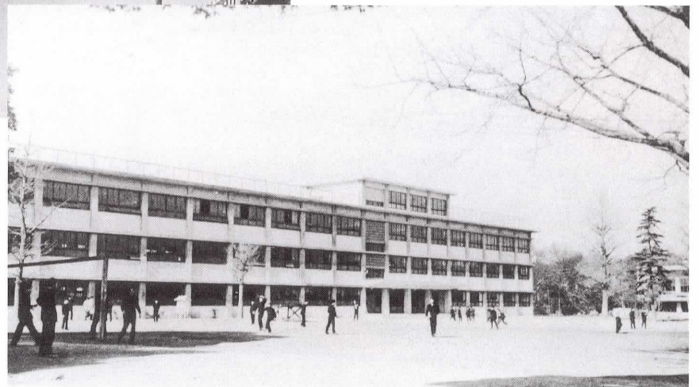
夏の制服でチャペルと高校校舎の間を歩いて中学へ  
Junior High School students wearing summer school uniforms



都内でも珍しかった帽子にブレザーの中学生  
Students wearing alpine hats, blazer coats and dark red neckties



中学校舎側からチャペルを望む (毎朝の朝礼、この後礼拝へ)。  
建物の配置も現在と違っている  
Every morning gathering before attending morning service



完成直後の中学校新校舎  
The new Junior High School Building immediately after completion

# 6 明治学院高等学校

Meiji Gakuin High School

1946(昭和21)年、中学部が5年制となる。

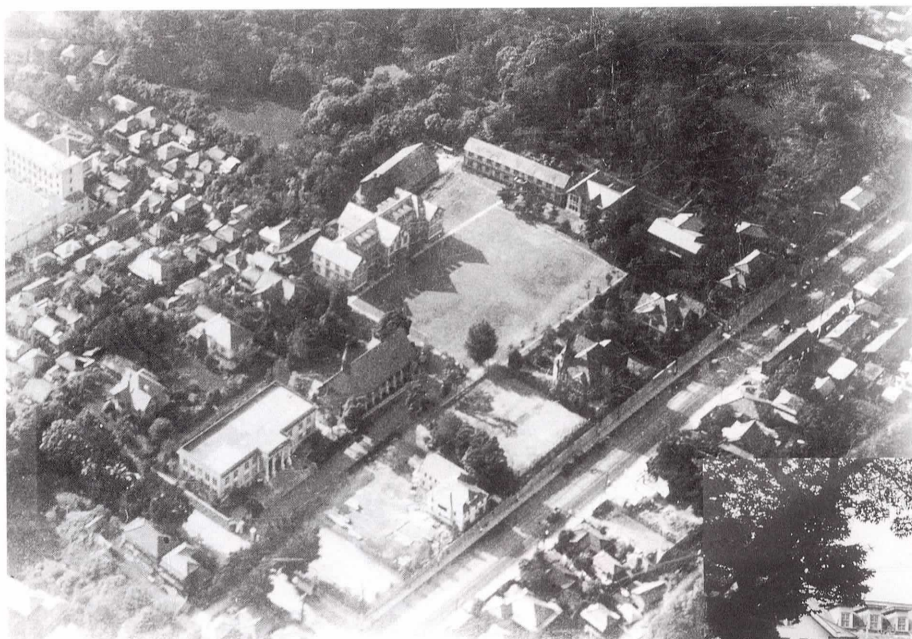
1948年、新制高等学校、新制大学が設立され、1949年、明治学院高等学校が開校された。

理事会は1949年、学院の将来の問題に関する研究の委員会を設置し、理想教育実施案を検討した。そのなかで教育目標や方法の相違から中学校と高等学校は分離されることとなり、中央グラウンド西側の旧校舎を高等学校が、北側の木造校舎を中学校が使用することとなった。



1951年当時の明治学院正門

The main gate of Meiji Gakuin (1951)



1937年頃の明治学院（航空写真）

Meiji Gakuin Campus (c.1937)

この写真で現在残っている建物は、礼拝堂、記念館、インプリー館くらいである



1951年当時使用されていた校舎

School buildings in 1951

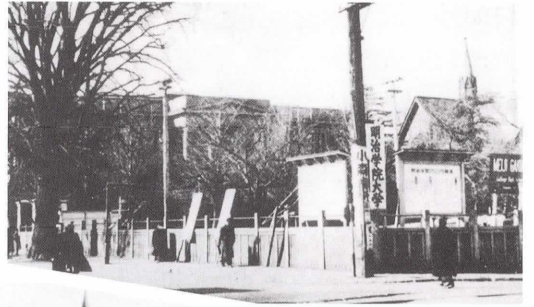


1951年中学・高校教職員

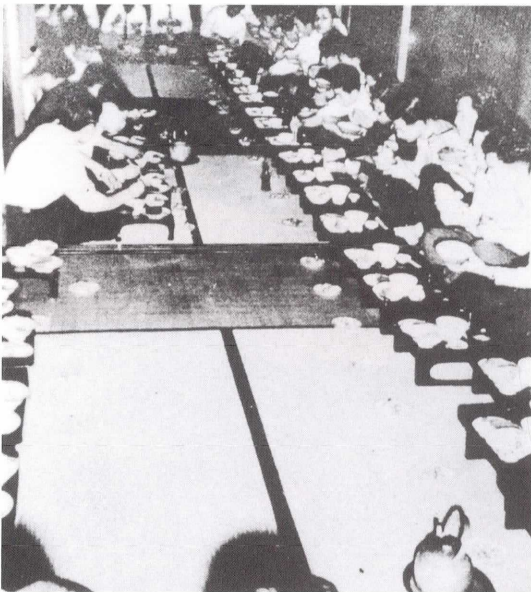
Junior and Senior High Schools teaching and clerical staff (1951)



「いぬぐす」の樹 *'Inugusu' memorial tree in celebration of graduation*  
 チャペルの脇に島崎藤村らのクラスが残した卒業記念樹「いぬぐす」が老齢な姿で残っていた(藤村は長男に楠雄と命名)



1950年当時の学院  
*Meiji Gakuin(1950)*



修学旅行 *School excursion (abolished since 1960's)*  
 業者主導型の修学旅行は1960年代以降廃止され、クラスごとに討論して行き先などを考える「校外ホームルーム」が始まった

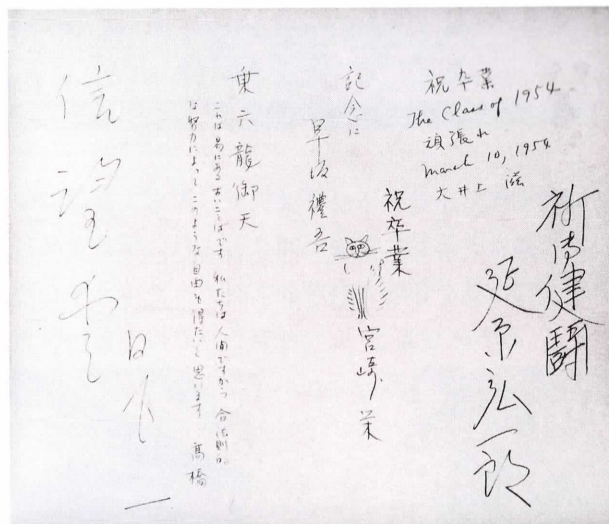


運動会の仮装 *Costume parade in athletic meet*

1954年の運動会 *The 1954 athletic meet*  
 運動会は1960年代に「体育祭」となり競技会が中心の行事となった



1951年高等学校長に就任した日下一は、教育方針のなかで、福音的キリスト教の信仰を活かすようにキリスト教教育を行い、そのために週1時間の聖書の授業と毎日の礼拝を励行すること、学校全体が信仰的に運営され、教師と生徒との間に生きた交わりがなければならず、教師が権力をもって生徒の上に君臨することがあってはならないと強調した。

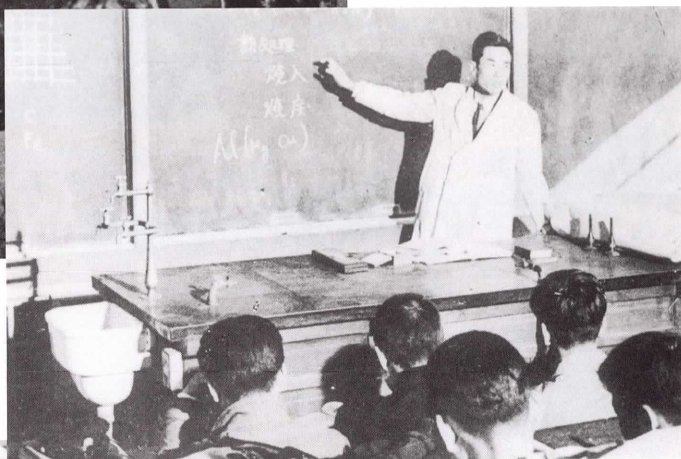


当時の卒業生に送った教師の言葉

Messages from teachers to a graduate at that time

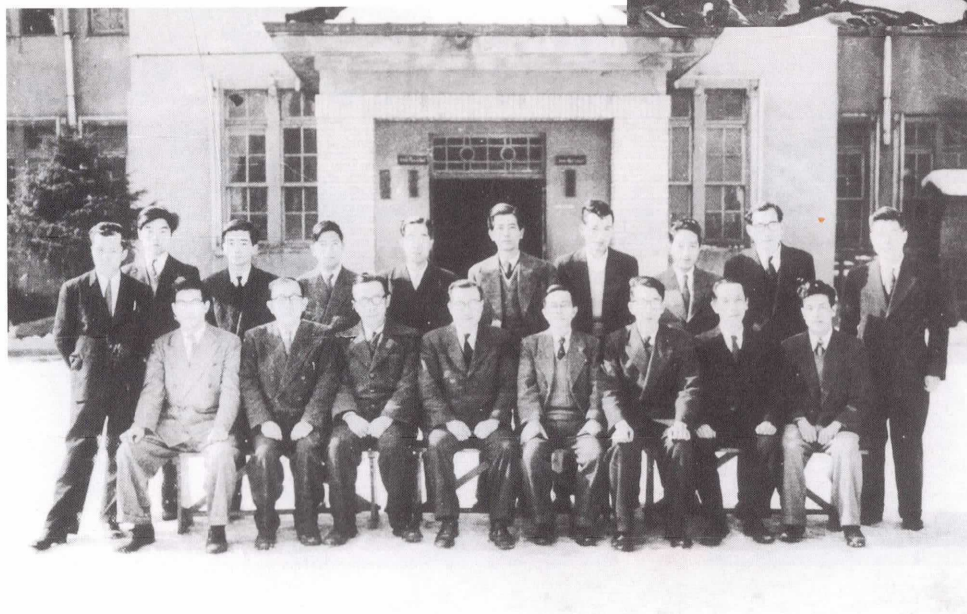


授業風景 英語の授業 English class



授業風景 化学の授業

Class scene in Chemistry

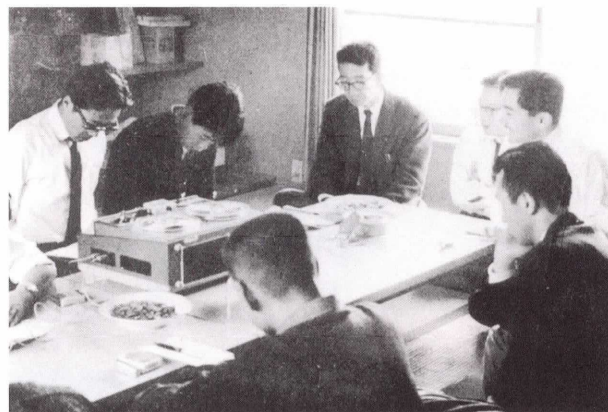


1954年当時の高等学校教師陣  
Teaching staff in 1954

中学校、高等学校が分離したため、高校の教職員の数も一時かなり減った



1960年代に入ると、高等学校では教育・指導について教職員の活発な議論が繰り返され、現在の高等学校教育の柱が形成された。



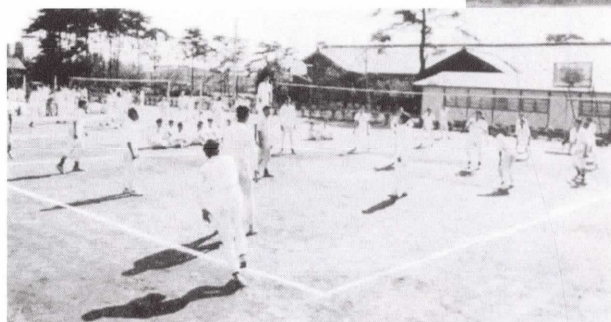
生徒指導をめぐっての教師の合宿研修会 Staff discussion



1964年高等学校第1期工事が完了した木立の多い構内。左側に記念樹の一部、正門に4号館(木造2階建て)、右側に第1期工事で完成した新館が見える High School Building (1964)

#### 山中寮 High School Lodge at Lake Yamanaka

山中湖畔の雑木林の中に、高等学校山中寮が建てられた。1年生は各クラス半分ずつ、3泊4日の夏期学校を行うようになった。初期のころの山中湖は、観光客も少なかった。夏期学校は自炊生活が基本になっている



体育祭は、クラス全員が何かの種目に出場する競技会となり、陸上のほか、テニス、バレーボール、相撲なども競技種目になっていた Sports Festival

#### 白金祭の仮装行列 Shirokane Festival (Fancy dress parade)

白金祭も1970年代、お祭り気分が流され、退廃的雰囲気になってきたため、高校生としての発表を中心とする文化展へと発展していった



東村山総合グラウンドでの体育祭

Sports Festival in Higashi Murayama general ground



# 7 明治学院中学校・東村山高等学校

Meiji Gakuin Higashi Murayama High School and Junior High School

第7代武藤富男学院長は、就任早々の1962（昭和37）年、東村山の地を見て「力なき者の弱さを担う贖罪と愛の教育」を理念とする高校をつくることを決意した。

翌1963年、明治学院東村山高校は、旧東京陸軍少年通信兵学校の将校集会場を仮教室として開校された。

東村山高校初代校長でもあった武藤学院長は「真の一流校とは、ちょうど難病を治療しうる病院が一

流病院であるように、教育力が一流であるものを言うのでなければならない。生徒のマイナス面にも着目しそれをプラス化する教育、そして救いのあることで一流校になってほしい。」とよびかけた。

1966年、白金の地にあった伝統ある中学校が移転を開始し、3カ年かけ完了した。

両校は中高一貫教育によってキリスト教による人格教育を行い、道徳人、実力人、世界人をつくることを目標としてこの地域に根づいていった。



開校を目前にした東村山正門付近（1963年） Higashi Murayama Senior High School just before the start of school (1963)  
“キリストが形づくられるまでの産みの苦しみ”（ガラテヤ信徒への手紙4：19）が、東村山の地で始まる

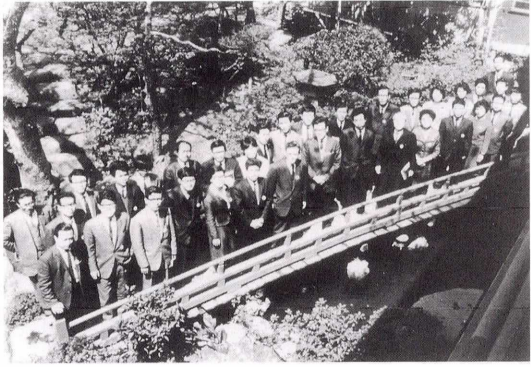


開校式高校校舎献堂式風景（1963年） The ground-breaking ceremony for the Senior High School Building  
校舎ができたのは、4月の開校から半年余たってからで、11月16日献堂式が行われた



初期生徒会投票所受付（1960年代）  
Reception desk for electing early members of students' association (1960's)

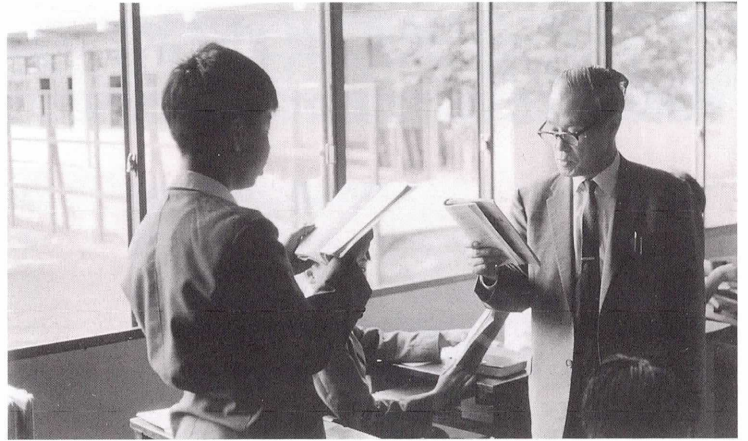
いよいよ自治活動が開始した。同じころPTAも組織された



湯河原敷島館研修会に参加した教職員（1965年）

Teaching and clerical staff in Yugawara Shikishimakan study and training tour(1965)

この年、翌年の中学移転を迎えるにあたり共学論議が活発になされた



中学で武藤学院長自ら英語の授業

Principal Muto teaching English in Junior High School

創立初期週2回東村山に来て英語の授業を行った。この実践は「キリスト新聞」にも紹介された



中学寮生、食前のお祈り

grace by dormitory students

井深寮(中学)は1981年閉鎖まで利用された



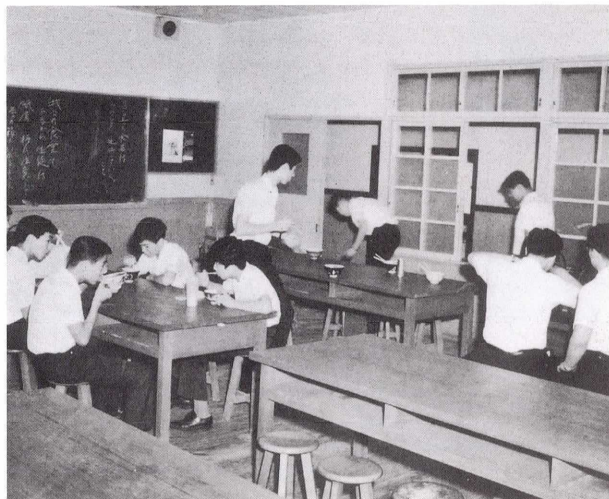
遠距離者のために高校寮(ヘボン寮)

18年間数々のドラマが生まれた

Hepburn dormitory for the students from local schools

通信兵学校時代の建物を利用した初期の食堂(1960年代後半)

当時1食100円~150円であった The former dining room (later 1960's)



駒沢競技場で行進をする本校生

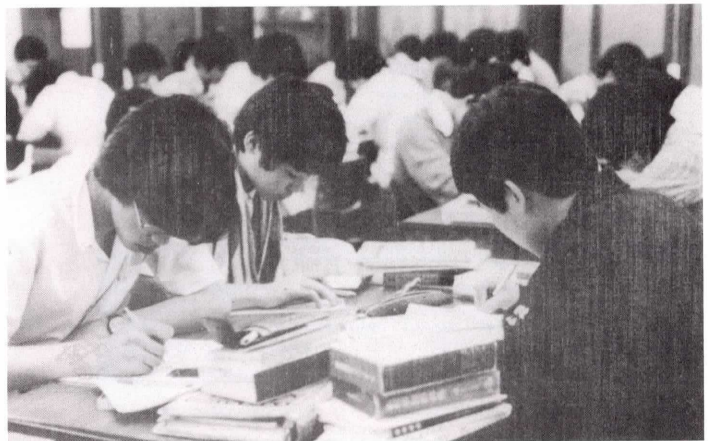
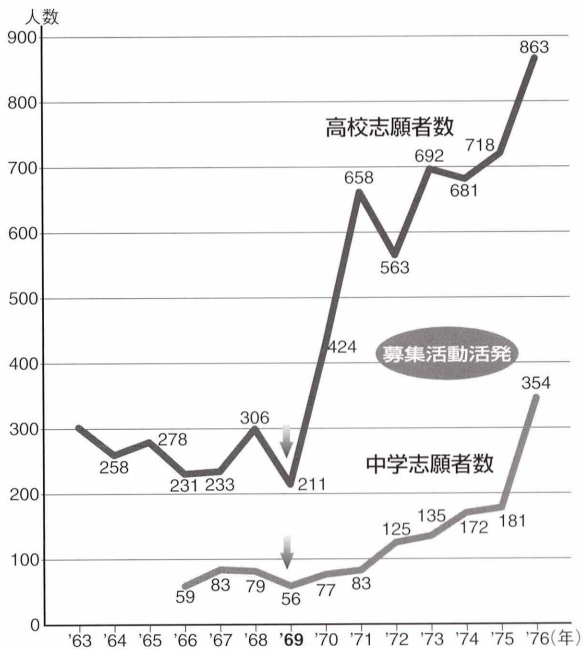
Marching students in Komazawa Athletic Stadium

学院創立90周年を記念して全学院の合同体育祭が行われた



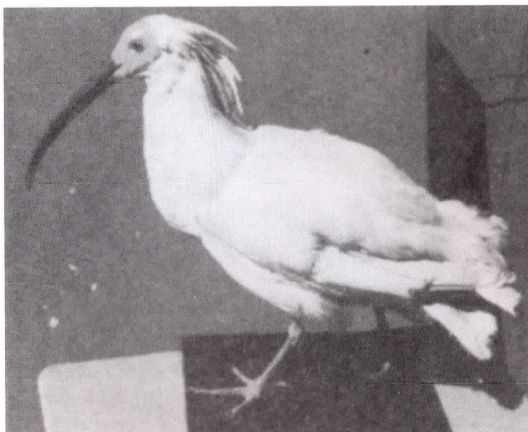


緑陰のもとでの語らい  
Outdoor class in the shade of a tree  
左側にテニスコートがあった（1960年代後半）



寮合宿で真剣に学習する高校生 Lodging together in the dormitory  
1970年半ばより、それまで放課後、波状テスト方式で学習させていたのを、寮を利用した合宿（ドームステイ）として定着させていった。初めは高校生のみであったのが、1980年代に入って中学でも行われるようになった

志願者減少の年、1969(昭和44)年。Decreasing applicants in 1969  
この年志願者が中高総数267名と急減した。  
これをきっかけに学校問題研究会(5つの委員会を含む)を発足させ、学校総点検に乗り出し、機敏な対策を練っていった。  
上のグラフから数年にわたる活発な募集活動により危機を脱していった模様が読み取れる



本校所有のトキの標本  
Stuffed Japanese crested ibis in the possession of this school

本校理科室に保存されている多くの鳥の標本中、最も貴重なもので、戦前東山学院から白金に移管され、その後中学移転の際東村山に移った。  
1971年から数年にわたり国立科学博物館に貸し出された



本校付近の航空写真(1966年) Aerial view of the Campus (1966)  
管理棟ができた年で、中学校舎はこの年着工、チャペルはまだできていない。木造の建物は旧通信兵学校時代のもの

NHKテレビ放映  
NHK TV Broadcasts  
〔1978.2.18〕



**NHK本校教育を放映**

NHK TV program featuring our educational reforms and practice

東村山高校の教育実践がNHK関係者の目にとまり「新制高校30周年記念」—改革への模索—のなかでダイナミックな教育実践として取り上げられた



礼拝で始まる毎日の学校生活 School starts with daily worship service  
講堂で礼拝中の中学生



**市民クリスマス**  
Public Christmas service

チャペルで行われる市民クリスマスは、いまではすっかり地域に根づいた



**文化祭(ヘボン祭) Hepburn Festival**

すべてが生徒の手作り、1980年頃には教職員の演劇も呼び物だった



**近隣の施設で奉仕活動 Voluntary work in neighboring facilities**

1980年代に入って、はじめは高校2年生を中心に地元の老人ホームなどでボランティア活動を行うようになった



高校3年生夜間歩行 Night walk by the third-year High School students  
山梨県塩山より奥多摩湖まで38kmを夜どうし歩いた(1979年から1980年半ば)

# 8 明治学院とライシャワー

Dr. Edwin O. Reischauer and Meiji Gakuin

米国長老教会から派遣された比較宗教学の碩学オーガスト・K・ライシャワーは1905(明治38)年から30年まで白金の宣教師館に居住した。氏はのちに東京女子大の設立にかかわり、夫人ヘレンは「日本筆話学校」のために働いた。1910年に次男として生まれたエドウィン・O・ライシャワーは16歳まで白金で過した。帰国後のちにハーバード大学教授となり、東アジア研究の世界的権威となった。1961(昭和36)年駐日米国大使となり来日するや、来校して昔を懐かしみ、1987年には明治学院大学より名誉学位が授与された。

父子が長年にわたり日本の教育と伝道および日米の国交のために尽くした功績は大であった。なお、現ライシャワー館は1964年高校新校舎建築のため取り壊され、1965年東村山に再建されたものである。子息エドウィンは献堂式をはじめ3度東村山にも訪れている。

## 1965年東村山に再建されたライシャワー館を訪問

*His visit to the rebuilt Higashi Murayama Campus(1965)*



現在のライシャワー館 *The present Reischauer residence*



オーガスト・カール・ライシャワーと夫人ヘレン。3人の子供たちは左からエドウィン、妹フェリシア、兄ロバート (1918年)

*Reischuer's family (Lower left - Edwin O. Reischauer)*



エドウィン・O・ライシャワー米大使が白金のライシャワー館を来訪 (1963年)

*American Ambassador Edwin O. Reischauer's visit to the Reischauer residence in Shirokane Campus (1963)*

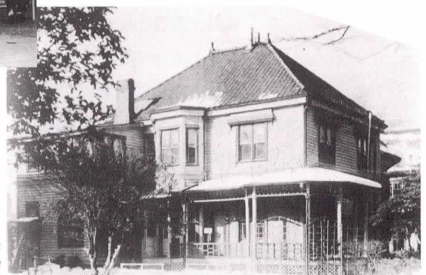


1987年、中・高校生を前にスピーチ最後の訪問となった

*His speech to Junior and Senior High School students made during his final visit (1987)*

## 白金時代の宣教師館

*Missionary residence in the Shirokane period*



# 明治学院の年表

年	事 項
1863(文久 3)年	J.C.ヘボン博士が横浜に開設した英学塾は、1873(明治6)年S.R.ブラウン博士が、同じ横浜に開設したブラウン塾とともに、キリスト教主義による人格教育を基本とする明治学院の歴史にとって、精神的源流をなし、母体的役割を果たした。本学院はその起源をブラウン塾を前身とする東京一致神学校設立の時をもって創立の年と定めている
1877(明治10)年 9月	日本基督一致教会が、教育機関として、東京築地明石町に東京一致神学校を設立
1880(明治13)年 4月	ヘボン塾は、築地明石町に移転して築地大学校と改称し、J.C.バラが校長となった
1881(明治14)年10月	米国リフォームド・ミッションが、横浜山手に先志学校を設立
1883(明治16)年 9月	先志学校を築地大学校に合併し、同時に築地大学校の名称を東京一致英和学校と改称
1884(明治17)年 8月	服部綾雄が、東京一致英和学校の予科として、神田淡路町に、東京英和予備校を設立
1886(明治19)年 6月	東京一致神学校、東京一致英和学校および東京英和予備校を合併して、名称を「明治学院」とし、現在地に校地を求めた
1887(明治20)年 1月	明治学院の設置が認可され、9月サンダム館、ヘボン館竣工
1889(明治22)年10月	神学博士J.C.ヘボンが初代総理(現在の学院長にあたる)に就任
1891(明治24)年11月	井深樞之助が第2代総理に就任
1899(明治32)年 8月	文部省訓令第12号(宗教教育禁止令)が發布された。本学院は尋常中学校の資格を返納、キリスト教諸学校との協力により宗教教育の自由を守った
1902(明治35)年 4月	長崎の東山学院神学部を本学院神学部へ合併
1907(明治40)年	島崎藤村作詞により校歌を制定(作曲者：前田久八)
1916(大正 5)年 3月	新礼拝堂(チャペル)が完成
1921(大正10)年 3月	神学博士アルバート・オルトマンが総理事務取扱に就任
1925(大正14)年 2月	理事長田川大吉郎が第3代総理に就任。3月井深ホール(旧高等学校校舎)落成
1927(昭和 2)年11月	創立50周年記念式典を行う。「明治学院五十年史」出版
1928(昭和 3)年 4月	高等商業部を設けた
1930(昭和 5)年 3月	神学部は本学院から分離し、東京神学社と合併して日本神学校設立
1935(昭和10)年 4月	高等商業部に第二部(夜間)を設置
1937(昭和12)年11月	創立60周年記念式典を行う。島崎藤村自筆校歌碑を立てる
1939(昭和14)年 8月	矢野貫城が第4代学院長に就任
1944(昭和19)年 4月	青山学院文学部、同高等商業学部および関東学院高等商業部を統合し、明治学院専門学校と改称
1947(昭和22)年 4月	新学制により中学部(5年制)を明治学院中学部と改称
11月	創立70周年式典を行う
1948(昭和23)年 4月	神学博士村田四郎が第5代学院長に就任。新学制により明治学院高等学校を設置
1949(昭和24)年 4月	明治学院大学の設置が認可された。文経学部(英文学科・社会学科・経済学科)第一部、第二部を開設 学院長村田四郎が初代大学長を兼任
1950(昭和25)年 6月	日本商科大学を本学に合併
1952(昭和27)年 3月	白金海軍墓地買収
4月	中学、高校分離。大学は文学部、経済学部に分離
1953(昭和28)年	高等学校山中寮完成
1954(昭和29)年11月	大学旧図書館が落成
1955(昭和30)年 4月	大学院文学研究科英文学専攻修士課程を設置
1957(昭和32)年 2月	大学旧本館が落成
4月	神学博士都留仙次が第6代学院長に就任
5月	大学学生ホールが落成し、「グリーン・ホール」と命名
11月	創立80周年式典を行う。「明治学院八十年史」出版
1958(昭和33)年 2月	文学博士高橋源次が第2代大学長に就任
1960(昭和35)年 4月	大学院文学研究科社会福祉学専攻修士課程および経済学研究科経済学専攻修士課程を設置
1962(昭和37)年 4月	大学院文学研究科英文学専攻博士課程を設置
6月	武藤富男が第7代学院長に就任

年	事 項
1963(昭和38)年 3月	大学2号館・3号館が完成
4月	明治学院東村山高等学校開設
1964(昭和39)年 4月	前文学部長若林龍夫が第3代大学長に就任
1965(昭和40)年 4月	社会学部が独立(社会学科と社会福祉学科)し、また文学部にフランス文学科を設置。日米間の教授と学生の交流を開始
10月	大学6号館が完成
1966(昭和41)年 1月	女子学生寮(セレベンス館)を目黒碑文谷に新築
4月	法学部法律学科第一部、第二部法律学科を設置 中学校東村山に移転開始
10月	大学研究室棟を竣工し、「ヘボン・ホール」と命名
1967(昭和42)年 4月	大学院文学研究科社会福祉学専攻修士課程を改め大学院社会学研究科社会福祉学専攻修士課程とし、新たに社会学専攻修士課程を設置
11月	創立90周年式典を行う。「明治学院九十年史」出版
1969(昭和44)年 4月	大学院社会学研究科社会学・社会福祉学専攻博士課程を設置
1970(昭和45)年 4月	大学院経済学研究科商学専攻および法学研究科法律学専攻修士課程を設置 和田昌衛が第4代大学長に就任
1972(昭和47)年 4月	大学院法学研究科法律学専攻博士課程を設置
1974(昭和49)年 4月	元経済学部長金井信一郎が第5代大学長に就任
1976(昭和51)年10月	一般教育協議会を一般教育部と改称
1977(昭和52)年 8月	島村亀鶴が第8代学院長に就任
11月	創立100周年記念式典を行う。「明治学院百年史」出版
1978(昭和53)年 4月	元経済学部長平出宣道が第6代大学長に就任
1981(昭和56)年10月	大学長平出宣道が第9代学院長に就任
1982(昭和57)年 4月	前文学部長森井眞が第7代大学長に就任
5月	横浜校舎新築工事の起工式挙行
1985(昭和60)年 3月	横浜校舎献堂式挙行
4月	横浜校舎開校
7月	国際学部棟新築工事起工式挙行
1986(昭和61)年 4月	国際学部国際学科設置。国際学部棟献堂式挙行
10月	「明治学院」名称制定100周年を記念して、平出宣道学院長および福田垂穂副学長が渡米。長老、改革両教会を訪問
1987(昭和62)年11月	創立110周年記念式典を行う。明治学院110年史「明治学院の現況」出版
1988(昭和63)年	明治学院高等学校山中寮新設
1989(平成 1)年 5月	テネシー明治学院高等部開校
1990(平成 2)年 4月	文学部に芸術学科、心理学科および法学部に政治学科設置
4月	大学院国際学研究科国際学専攻修士課程を設置
4月	国際学部教授福田歆一が第8代大学長に就任
1991(平成 3)年 4月	明治学院高等学校新校舎完成。両高校、中学男女共学開始
1993(平成 5)年 2月	大学本館(第1期)完成
1994(平成 6)年 4月	大学院文学研究科心理学専攻修士課程を設置。第10代学院長に中山弘正が就任
1995(平成 7)年10月	横浜校舎開校10周年を祝った
1996(平成 8)年 4月	文学部教授大場建治が第9代大学長に就任
4月	経済学部商学科、経済学部第二部商学科を経営学科に名称変更。大学本館落成。戸塚グラウンド完成
1997(平成 9)年11月	創立120周年



# Seeking Truth and Freedom:

## Reflections on Meiji Gakuin's 120-Year History

*Although this year marks 120 years in the history of Meiji Gakuin, its origin can actually be traced back as far as the Edo period, when Hepburn Academy opened in Yokohama in 1863 (Bunroku 3), 134 years ago. Thus, Meiji Gakuin is regarded as one of the oldest private institutions in Japan, after Keio Gijuku, which began as a private juku in Tsukiji, Tokyo, in 1858 (Ansei 5) run by Yukichi Fukuzawa. With roots dating back 134 years, Meiji Gakuin is the oldest Christian school in Japan, followed by Doshisha, Rikkyo, and Aoyama Gakuin.*

*Meiji Gakuin's beginnings stretch back to the stormy mid-nineteenth century, when Japan emerged from a long period of feudalism and self-imposed isolation and was forced to encounter modern Western civilization. The earliest missionaries from the American Presbyterian Church, the Scottish United Presbyterian Church, and the American-Dutch Reformed Church played important roles in this encounter with the West as they sought to Christianize Japan and to introduce various aspects of Western culture.*

*The roots of Meiji Gakuin can also be traced back to this period of Protestant missions and the collaborative efforts of several well-known figures who had established private academies to educate leaders for the new Japan. Some of the more familiar names include Dr. James C. Hepburn, Dr. Samuel R. Brown, Dr. Duane B. Simmons, Dr. Guido E. Verbeck, Dr. Martin N. Wyckoff, and Rev. James H. Ballagh and his brother Professor John C. Ballagh. Dr. Hepburn is one of the founders and first president of Meiji Gakuin, known for his Japanese-English dictionary, the Hepburn system of romanization, and for his many contributions to Japanese medicine.*

*The private schools established by these pioneers, known respectively as the Hepburn Academy, Brown Academy, and Verbeck Academy, were essentially the foundation stones for what would later become Meiji Gakuin University.*

*The official date of its founding, 1877, is the year the Brown and Verbeck academies were incorporated under the auspices of Tokyo Union Theological School. The school assumed the name Meiji Gakuin in 1886 when Tokyo Union Theological Seminary merged with the United Japanese-English Union School (successor to Hepburn Academy) and the Japanese English Preparatory School established by Hattori Ayao. At that time, Meiji Gakuin, with Dr. Hepburn as its first president, moved to the present site in Shirokane.*

*Although Meiji Gakuin was initially established as a theological school for training Japanese Protestant leaders, it soon diversified and grew to include a seminary, a preparatory school with a five-year program, and an upper division with two- and three-year courses, roughly equivalent to a junior liberal arts college and a college of commerce. Following World War II, Meiji Gakuin reorganized according to new government regulations and grew to include a junior high school, three high schools (including one in the United States), a university with undergraduate studies in five faculties and eleven departments, and a graduate school that offers Master of Arts and Doctor of Philosophy degrees in a number of fields.*

*Over the years, Meiji Gakuin has produced several Christian leaders as evangelists or theologians and has been led by a number of capable administrators, including Dr. Toyohiko Kagawa, the world-famous evangelist and social worker; Kajinosuke Ibuka, who contributed to the formation of Meiji Gakuin and followed Dr. Hepburn as president in 1891; Rev. Masahisa Uemura, stalwart defender of evangelical Christianity; Dr. Shiro Murata, influential preacher and New Testament scholar, who was the fifth chancellor and first president of the newly reorganized university; and Dr. Senji Tsuru, the sixth chancellor and former chancellor of Ferris Seminary, noted for his work on the colloquial version of the Bible.*

*Meiji Gakuin has also produced some leading Japanese literary figures in its long history, among whom are such names as Toson Shimazaki, noted poet and novelist and author of the school's alma mater; Shukotsu Togawa, Toson's classmate who became professor at Keio University; and literary critic Kocho Baba, also Toson's classmate, who taught European literature at Keio*

University. In the history of English education after the war, we should not forget the name of Dr. Toru Matsumoto, Professor at Meiji Gakuin University, who served as an instructor on NHK Radio's English conversation program from 1951 to 1973 and made the name of Meiji Gakuin familiar to a large number of English learners in the country. In the field of music is Yoshie Fujiwara, who was a well-known opera singer in Japan.

Meiji Gakuin owes its fine reputation today to many outstanding professors, including such well-known scholars as Dr. James C. Hepburn, who, along with his famous dictionary and romanization system, is also known for his translation of the Bible and introduction of Western medicines into Japan; Dr. August K. Reischauer, Professor of Old Testament and father of the former ambassador to Japan, Edwin O. Reischauer; and Dr. Tomio Muto, evangelist, editor, head of the Christian Literature Society, and the seventh chancellor, who promoted a number of innovative educational reforms.

In the fields of scholarship and education, we owe a great deal to the following leaders: Junzaburo Nishiwaki, professor emeritus of Keio University, distinguished poet and critic, who contributed to the establishment of the doctoral program in English Literature; Dr. Genji Takahashi, professor emeritus and second university president, authority on English literature in Japan, who also served as the president of ELEC, ZENEIREN, STEP, and other organizations; Dr. Jiro Takenaka, professor emeritus, one of the most eminent scholars of English education in Japan, who is well known for his book on English teaching methods; and Professor Emeritus Isao Mikami, well-known translator of Shakespeare, who contributed greatly to the establishment of the Shakespeare Society of Japan.

The most recent chancellor is Hiromasa Nakayama, professor in the faculty of economics, and the university's president is Kenji Oba, professor in the faculty of liberal arts. Chancellor Nakayama, motivated by a deep, Christian faith, led Meiji Gakuin to reflect publicly regarding its responsibility in World War II. President Oba is widely acknowledged as an authority on Shakespearean studies in Japan, having published numerous books on Shakespeare and participating in the formation of the Shakespeare Society of Japan. We trust that these two leaders will continue to work together to insure a bright future for the students, faculty, and staff of Meiji Gakuin in the 21st century.

Today Meiji Gakuin University consists of two campuses, one in the heart of Tokyo at Shirokane, and the other in the more spacious suburban setting of Yokohama. Because of limited space on the Shirokane campus and an enrollment of over 10,000, a large tract of land was purchased in 1980 in Totsuka, Yokohama, in order to build a new campus for first- and second-year students. This campus opened in April 1985 and a new faculty of international studies began classes on the Yokohama campus the following year. The establishment of this new faculty and the International Peace Research Institute in 1986 was in keeping with the pioneering spirit of the university's founders and was a natural extension of its Christian heritage.

Meiji Gakuin University strives to provide both the resources and the atmosphere needed to educate men and women for the future. The curriculum and academic community serve to encourage students to develop critical perspectives in various fields of study and to provide them with the knowledge and skills required to address the complexities of modern life.

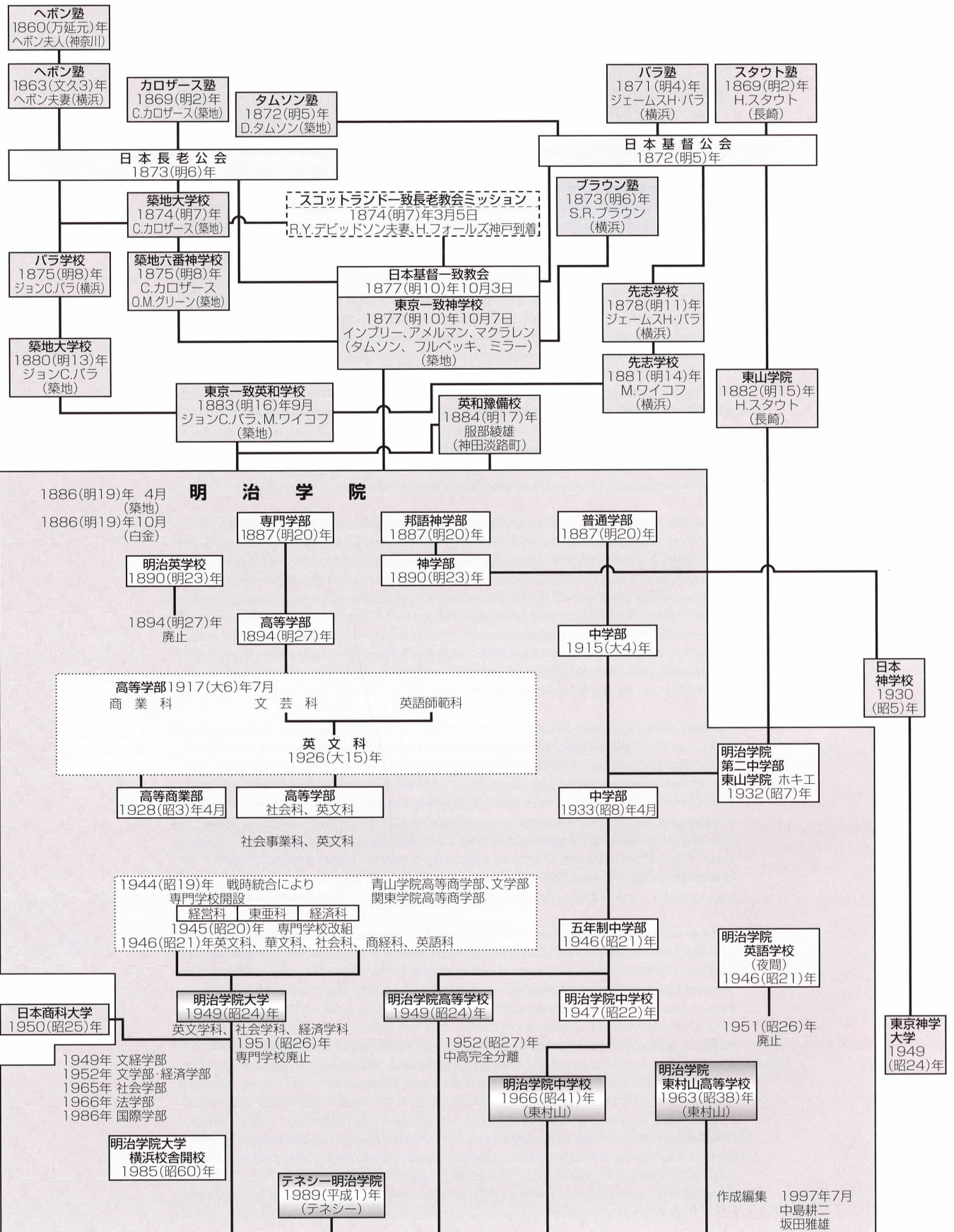
Nourished by the Christian tradition, the university continues to cultivate individuals with an international vision who will live with integrity and compassion in their personal and professional lives. Meiji Gakuin welcomes young people who aspire to be leaders in the 21st century.

All people concerned with Meiji Gakuin should not forget our school motto: "Seeking true freedom through liberal education based on Christianity", "Acquiring foreign languages according to her tradition of English education" and "Cultivating a pioneering spirit as a citizen of the world", towards her educational ideals of 'Christianity', 'liberalism' and 'globalism'.

# 明治学院発展系統図

米國長老教会ミッション  
1859(安政6)年10月18日  
J.C.ヘボン夫妻 神奈川到着

米國オランダ改革教会ミッション  
1859(安政6)年11月1日  
S.R.ブラウン夫妻 神奈川到着  
1859(安政6)年11月7日  
G.H.F.フルベッキ 長崎到着



## 編集後記

明治学院の歴史は、創設者たちの教育理念とともに一貫して真理と自由を求めての歩みだった。明治学院が21世紀に向けてまた大きな歩みを続けていくためには、伝統ある学院の歴史に学び、現状の認識を新たにし、そして未来を望みながら新しい時代の息吹を吸収していかなければならない。

こうした観点から、創立120周年の記念事業の一つとして、歴史写真集『真理と自由を求めて——明治学院 120年の歩み——』の刊行とCD-ROM制作が計画され、昨年6月に編集委員会が設けられた。編集委員会では学院の鼓動が直接伝わるような生きた学院史を作ろうという方針を立て写真の選定に入り、今年の3月の合宿を含めて延べ30回近く委員会が開かれ多忙をきわめた。

しかし、その写真の収集にはおのずと限界があり、

当初の企画に比べ不本意な出来上がりになってしまったが、躍動感にあふれた見やすい写真集になってはいるかと思う。この写真集とCD-ROMが学院の新たな未来を切り開く道しるべとなればと願っている。

なお、この写真集の編集にあたっては、学院関係者はもとより、ワタリ写真館はじめ多くの方々に大変お世話になった。心から感謝申し上げる。また写真の照合などの編集に協力いただいた前田薫氏、菊地光子さん、また英文を担当いただいた藤原博道先生、その監修にあたられた Mark and Cindy Mullins 先生ご夫妻、そして印刷、レイアウトなど引き受けられたトッパン・フォームズおよび凸版印刷に深く感謝する次第である。

1997年10月

### 編集委員一同（ABC順）

千葉 茂美(代表)	伊藤 昭一	岩居保久志
加藤 博	小暮 修也	久世 了
小原 和夫	坂田 雅雄	瀬川 和雄
鈴木 忠男		

### 資料提供（順不同）

明治学院大学卒業アルバム、大学案内  
明治学院高等学校卒業アルバム、学校案内  
明治学院中学校卒業アルバム、学校案内  
明治学院東村山高等学校卒業アルバム、学校案内  
明治学院東村山中高三十年小史（1993）  
明治学院五十年史  
明治学院八十年史  
明治学院九十年史  
明治学院百年史  
目で見る明治学院100年  
明治学院の現況  
明治学院大学図書館  
明治学院同窓会アルバム  
明治学院建物調査報告書（1996）  
市民グラフヨコハマ No.31（1979）  
横浜開港資料館  
松沢記念館（賀川純基氏）  
ワタリ写真館  
ヘボンの手紙 高谷道男編訳（有隣堂）

ヘボン 高谷道男（吉川弘文館）  
甦る幕末 ライデン大学写真コレクションより（朝日新聞社）  
井深家写真アルバム  
井深梶之助とその時代（明治学院）  
植村正久と其の時代（教文館）  
新潮日本文学アルバム「島崎藤村」（新潮社）  
写真作家伝叢書1「島崎藤村」（明治書院）  
文学界（復刻版）  
方法序説 落合太郎訳（岩波文庫）  
幸福論 三谷隆正（岩波文庫）  
ドキュメント 明治学院大学 1989 学問の自由と天皇制（岩波書店）  
日本肖像大辞典（日本図書センター）  
国立公文書館

### 参考資料提供者

佐藤 謙氏  
中島耕二氏  
秋山繁雄氏

## 真理と自由を求めて

—明治学院120年の歩み—

---

1997年10月発行

---

発行 学校法人 明治学院

〒108 東京都港区白金台1-2-37

TEL 03(5421)5111(代)

編集 明治学院創立120周年 歴史写真集編集委員会

制作 トップラン・フォームズ株式会社

〒101 東京都千代田区神田駿河台 1-6

凸版印刷株式会社 年史センター

〒110 東京都台東区台東 1-5-1

印刷 凸版印刷株式会社

〒110 東京都台東区台東 1-5-1

---

 学校法人 明治学院